樂するに至りき。ローリーが散文の名家として後世に知られたるは、重に此の大著述に因りてなり。此の『世界史』は筆を世界の創造に起して、宿命の說豫知の事、自由意志、樂園、大洪水等に關する基督敎の古傳說を採錄し、次にアッシリヤ、ペルシャ、希臘、羅馬の史を語りて、筆をマセドニヤ帝國の瓦解に至りて止めたり。行文平明にして氣格高雅なり。

さて、上に擧げたる二家の外に、更に特筆すべき一大散文家あり、他なし、有名なるフランシス、ベーコン是れなり。ベーコンは實にエリザベス朝に於ける散文々學の極頂を代表せると同時に、當時の學問界をも代表せる者なり。嘗て英國最大の哲學家と稱せられし溢美なる名譽は今は漸く衰へたれども、其の學問上に於ける功績は尙優かに大書特筆すべき價値あり、所謂歸納的論理法は全くベーコンが力によりて學壇に弘布せられしなり。

第六章　フランシス、ベーコン

當時の學界――學風の革新――ベーコンの經歷――著述――『學風刷新論』――其の學說――『短論文集』――其の文章

ベーコンが略傳を敍する前に、少しく十七世紀の起頭に於ける英國學問界の景況を說かんに、其のころ哲學と呼び、科學と名けたりしものは、頗る近代のと趣を異にせり。彼のオックスフォード及びケムブリッヂの大學の如きは、當時已に學問の中心たりしが、そこにて敎授せし哲學、科學は、所謂スコラ哲學派の餘弊を傳へて、煩瑣なる講究に流れ、甚しきに至りては、偏に名目の末に拘泥し、迂腐爛熟、些の生氣なきを例としたりき。最も重ぜられたりしは論理學と倫理學となりしが、これはた古希臘の碩學アリストートルが學說の枝葉に泥みて、所謂演繹論理法の濫用に流れたりき。按ふに、アリストートルは古代哲學の泰斗にして、其の學說の宏博なるや、物理、政理、論理の各部門に涉り、加ふるに、其の比類なき綜合力と判別力とは、よく彼れをして古今有數の大智者、大哲學者たるの位置を領せしめたりしが、其の哲學の器械的部門たる(エリザベス王朝に尤も盛に行はれし)所謂演繹論理法は、觀察精覈、用意周到なるアリストートル其の人にして始めてよく善用すべき利器なるも、俗學之れを用ふれば弊の生ずるをまぬかるゝ能はざるものなり。英國十七世紀の起頭は、恰も此の弊の顯然たりし時にて、學風革新の必要は日々に學界に逼り

たりき。

是れより先き、中世紀のころより、哲學と宗教と互に相接近し來りて、遂には羅馬舊教派の神學說と古代希臘の哲學とはいつしか相密關する者となりにき、然るに所謂神學說は本來保守の性質を有し、哲學はもと進步を第一となせるがゆゑに、二者は動もすれば相矛盾し、教理は之れが爲に其の礎を危うし、哲學は之れが爲に其の眞を毀へりき。且やアリストートルの學說も、其の末流に墨守せらるゝに及びては、甚しき保守の學風となり、只管抽象の眞理を講究することをのみ目的として、殆ど人世と相關せざるものゝ如く、實際に隔たること日に遠く、ベーコンの時に至りては、此の弊殆ど其の極に達し、學風一新の必要はます〳〵著くなり來たれり。活眼達識の士は、之れより先きにも、屢ミスコラ學派の羈絆を脫して刷新を行はんことを企てたりしが、教會の威力盛なるが爲に、いづれも其の功を奏せざりしに、ベーコンいづるに及ひて、學風革新の端は開かれたり。要するに、ベーコンは反動の兒(チヤイルド)なり、空理的學風に反動して起こりたる新學說の祖師なり。其の實利的應用に偏局せしは勢の止む能はざりし所ならん。其の學說の大要を語るに先ちて、まづ

其の傳のあらましを叙すべし。

フランシス、ベーコンは一千五百六十一年一月廿二日英京ロンドンに生まれき。(我が朝正親町天皇の永祿四年にして、藤原惺窩の生誕と同年に當る)。其の父は時の掌璽官士爵(サー)ニコラス、ベーコンなり。フランシスは十三歲にしてケムブリッヂ大學に入り、夙に穎悟の譽ありしが、其のころ已にアリストートルの學說を批議し、ひそかに思へらく、アリストートルの哲學は徒らに空論を敎ふるに過ぎず、人生に稗益する所無しと。大學にありしと三年、やがて駐劄公使の隨行員となりて佛蘭西に遊びぬ。當時の佛京は豪奢蕩逸の府にして、かしこに遊ぶ者殆ど其の弊に薫染せざるはなし、彼れひとり超然、滯留三年の間、曾て講學を怠らざりきといふ。たま〳〵其の父の訃に接し、匆々として國に歸る、此の時『歐洲現狀論』の著あり、是れ其の最初の作なり。其の尙いと稚かりしや、女皇エリザベスは屢〻其の父ニコラスの邸に臨み、フランシスが聰慧なるを愛し、其の齡にまして大人びたるを稱へて小掌璽官と呼びしことありしのみか、時の宰相バレー、シヽルは其の伯父に當り、官緣ははじめより淺からざりしかど、故ありて伯父に忌まれ、仕官を求めて得ざり

しかば、しばらく志を官に斷ち、はじめ法律學を修めたりしを傳手に、狀師をもて職とせりき。されど本來の嗜好は哲理の講究にありしかば、暇ある毎に哲學を研鑽し、夙く其の大著『學風刷新論』又の名『眞正哲學の大創設』の稿を起こしぬ。

一千五百八十二年はじめて法庭に出づ、同八十五年、メルコム選出の國會議員となりて多少の名聲ありき。然るに其の性華美驕奢を好み、衣食住なべて其の分に過ぎたりしかば、負債山の如く、進退殆ど谷まらんとせり。幸ひにも時の權門エッセックス伯に知られたるより、伯の斡旋にすがりて大狀師（ソリシトアゼネラル）の榮位を得んと試るに至りしが、又バレー卿の爲に妨げられて、其の志を果たさゝりき。伯はベーコンが失望を慰めんとてトヰケンハムといふ園囿を讓與しぬ、其の價凡そ一千八百磅に當たれりきといふ。ベーコンが伯に負ふ所は尙かばかりにはとゝまらざりしに、交誼はいくばくもなくて破れたり。蓋し、ベーコンの烱眼は早くもエッセックスの異圖あるを看破して、之れに附隨するとの危きを覺りしかば、二つには數回諫爭を試みしも聽かれざりしが故に、交を絶ちけるなり。かくてエリザベス女皇の晚年に至りては、漸く用ひられてミッドルセックス選出の國會議員となり、つゝいて女皇の顧問に擧げられたり。時にエッセックスが國事犯事件起りぬ。ベーコンは舊恩人の爲に多少斡旋する所ありしかど、女皇の怒釋けずして、伯は竟に死刑に處せられにき。伯が悖逆を公告せし公文は、女皇の命を受けてベーコンがみづから起艸せしものなりといふ。

此の頃小品の論說文をつゝり、積みて十篇となれるをば一冊子となし、一千五百九十七年に發刊しき。是れ今尙もてはやさるゝ『エッセーズ』の一部分なり。（一千六百十二年更に若干篇を加へ、官な誤められて後又更に增補修正する所ありき）一千六百六年、ベーコン四十五歲の時、チープサイドの豪商が女アリス、バアンハムといふを娶る。之れより先き、女皇崩じ、ヂェームスの一世位に即く。ベーコン王に寵用せられ、まづ士爵（ナイト）を授けられ、ついでソリシトアとなり、アットルヂーとなり、掌璽官となり、大司法官（チャンセロア）となり、一千六百十八年、更に進みてエルーラムの男爵に叙せられ、翌三年、またセント、アルバンスの子爵となりぬ。そが畢世の大著『新機關（ノヴム、オルガノム）』は一千六百廿年に上梓せられき。稿を更へしと十二回に及びきといふをもても、經營慘憺の著述たるを知るべし。此の時に當たりてベーコンが名譽威權を嫉むの徒、仔細に彼れが陰慝を摘發して上訴す、收賄に關する

罪凡そ二十三ヶ條なりき。ベーコンは貴族院の彈劾を受けしが、其の一をも辯疏する能はずして罪に伏しぬ。すなはち一千六百廿一年に(シェークスピヤの死後五年)其の官職を褫はれ、四万ポンドの科料を課せられ、剩へ獄に下されけるが、王ヂェームス其の前功をおもうて其の科料を免じ、在獄二日の後釋放せり。

爾後ベーコンはゴオハムベリの村莊に退隱して、專ら讀書、著述、乃至科學の實驗等に從事せりき。舊稿に屬する論文の添削、『ヘンリ七世紀』の編述、『新アトランチス』と題せる哲學的架空談の著作、及び其の大著『學風刷新論』中の自然史に關する部分を物したりしは正に此の間なりきといふ。一千六百二十六年にみまかりぬ。(藤原惺窩に後るゝこと七年なり)。

ベーコンが大著『學風刷新論』"Instauratio Magna" or "Great Institution of True Philosophy"は六篇にて完結の筈なりしが、四、五、六の三篇は斷篇零章をとゞめたるのみ。第一篇の正題は "Partitiones Scientiarum" にて、專ら當時の學問の狀況を概論し、其の衰頽の原因を說明せる者にて、一千六百〇五年『學問の發達』("The Proficience and Advancement of Learning") と題して英文にて出版せしが、其の後多く訂正增補して、一千六百二十年、あらためて出版しき、此の時はずべて羅甸文をもて物し、書名も "De Augmentes Scientiarum" と改めたり。第二篇はすなはち『新機關論』"Novum Organum" にして、こは專ら演繹論理法の謬妄を說破し、歸納論理法の必要なる所以を論じ、且つ其の原理を說明せる者也。曰はく「人間は自然の臣僕兼解釋者なり、彼れは自然界の法則及び秩序に關しては、自ら作爲若しくは瞑想して、觀察し得たることの外を知る能はず、又行ふ能はず」と。謂ふ意は、凡て談理は實驗を礎とせざるべからずといふなり。又曰はく「從來人間は自家の觀念によりて宇宙を作らんと欲し、且つ自家の心中に其の一切の素材を見出さんと試みたりしなれど、若ししかせずして、專ら經驗と觀察とを基礎となしゝならば、空論、空說のかはりに、事實を收むるを得たりしなるべく、且つ竟には物質界を左右するの大法を知るに至りしならんに」と。是れ將た粗鹵なる演繹論法の弊を刺れるなり。

按ふに、ベーコンが歸納論理法は英國實驗科學の礎となりしものにて、『新機關論』の如きは其が大著中の最要部たるや明かなり。彼れは、此の篇に於て、歸納法の諸則を規定せしのみならず、論者の動もすれば、陷り易き諸種の過誤の根原を論じ、且

つ其を矯治すべき方法をも說けり。彼のアリストートルは夙に論理式を規定し、三段論法の準則を設け、かくして似て非なる推論を豫防せしが、ベーコンは更に一歩を進め、論理的誤謬の原因の、單に用語上にのみ存せずして、論者の心內に在るを看破し、仔細に僻見の因緣を說けり、是れ有名なる四偶像論なり。其の解一ならずと雖も、一に曰はく、一族、一門の慣習を墨守し、荒唐なる傳說を推重し、其の他を顧る能はざるが故に、謬見生ず、是れ一なり。若しくは或政黨、宗旨、時尙、時習、等に執着し、又はおのが得意の書に拘泥し、何事を觀察、批判するにも其の準繩を棄つる能はず、此の故に謬見生ず、是れ二。若しくは、其の境遇、又は其の公職とする所の事業、即ち、自家の專門にのみ着して其の以外の美を認むる能はざるの謬見、是れ三。若しくは或學說に執着するよりして生ずる謬見、此れ四と。

さて、第三篇は "Phænomena Universi" にして、こは事實と經驗とを蒐集し、且つ之れを分類、整理するの方法を敎へたるものなり。蓋し、事實と經驗とは歸納法の精髓なり。此の篇中「風の由來」「生死の由來」は、羅甸文にて物し、自然史の部は "Sylva Sylvarum" と題して英文にて物せり。さて第四篇、"Scala Intellectus" 第五篇 "Prodromi" 第六篇 "Philosophia Secunda" は、いづれも斷篇たるにといまれり、就中、最後の篇は全く筆を下さゞりしなり。これらは今細說するの要なければ省きつ。

ベーコンははじめて歸納論法を規定せしと、學風の革新を唱道せしとの爲の故に、一代に盛譽を博し、且つ若干の裨益をも與へたれど、其の實彼れが說はあまりに實用に偏したるものなり。彼れはあくまでも厚生利用をもて諸の學問の目的なりとせり。「智識は實力なり」といへる彼れが訓言は、最も露はに其の持論を表示せる者といふべし。彼れは以爲へらく、「自然即ち造化の理を知るは、そを利用するの力を得る謂也」と。テーヌはベーコンを評して曰はく

> ベーコンは最大の度に於て常識（コムモンセンス）を有したり。彼れは極めて實踐的なり、又實利的なり、彼れがアリストートルを大才と稱しながら其の學說を非難せしは、アリストートルが哲學の人間の利福を進捗するに益なきが爲に外ならず。要するに、ベーコンは思索其の物を愛する人にあらずして、實地應用を愛する人なり。其の目は天に向はずして地に向ひ、浮虛なる事物に向はずして、堅實なる事物にのみ向へり。彼れ已に其の哲學を名けて『新機關』といふ、彼れが眼中より見いだし來たれば學問は悉く人間改造の器具たるに外ならざりしなり。

と。げにや、嚴密に評せば、彼れは大なる思索家にはあらずして、むしろ大なる應用家また大なる修辭家なるべし。彼れが論說の大かたは、絕妙の巧辭もて表白せられたる大常識の集會ともいひつべきなり。されど、其の學識の該博にして、精根衆に超え、一代の卓見家たりしことは爭ふべからず。尠くとも英國經驗學派の率先者たるの名譽は、何人も否む能はざる所ならん。

ベーコンは羅甸の古文學を崇敬するのあまり、近世國語を卑しむこと甚しかりき。謂へらく、總じて此等近世語は、早晩、書籍と共に亡滅すべきものなりと。彼れの書を著すや、たま〳〵英國語をもて綴ることあるも、多くは別に羅甸文をもて其の譯をなすを例としたりき、さるは、英語亡滅の後を慮りてなるべし。かく自國語を卑みし應報は覿面なりき。そが羅甸文の著作は多けれども、『新機關』を除くの外は、今殆ど讀まるゝものなし。然るに其の英文にて物せる『エッセーズ』及び "The Advancement of Learning" (『學問の發達』) は我が國人にすらも愛讀せらる。其の外『ヘンリ七世紀』 "The New Atlantis," 及び "The Sylvarum," もまた英文もて綴られたれど、等は今殆ど讀まれず、但し、こは其の內質の陳腐なるが爲のみ。

要するに、ベーコンが後世の俗間に知らるゝは、重に其の『エッセーズ』即ち『短論文集』によりてなり、而して其の文章家としての眞價値は、專ら之れによりて見るを得べし。件の論文は、總體にて五十八篇、いづれも『文章軌範』『唐宋八大家文集』などにありふれたる如き短篇にて、近世に謂ふエッセー(論文)とは趣き異なり。もとエッセーといふ語は、試、筆又は、試、文などいはんほどの義にて、思ひよれるまゝを咄嗟の筆に物したるを指せるなりき、されば、ベーコンのエッセーも、大抵は隨筆めく論文にて、近世に謂ふ物々しき論文にはあらず。さりとて、我が國の隨筆物のやうに、秩序もなく感ずるまゝを筆に言はせたるにはあらず、句々洗錬にして、言々圓熟、條理はた井然たり、處々散文の詩ともいふべきほどに、詞藻うつくしく、比喩巧みなれど、而も一字の冗なく、簡淨の致を極めたり。或は稱してベーコンの句々は皆格言なり、其の一句を敷衍せば一大論文を成すに足らんといふ、詢に然り。

ベーコンの文は當朝に於ける華なる散文の極致を代表す。彼れの冷靜と圓熟とを以てして、尙幾分か華文めく病ひあるを免れず、詩的時勢の影響の大なるを見るべし。

第七章　劇壇幷びに脚本家

英國劇――神秘劇――其の脚本――教訓劇――其の脚本――其の特質――正劇の端緒――ヘイウッド――間劇――正劇――喜劇――悲劇――其の體式――散文劇――劇場及び俳優――古代劇

英國の劇も、希臘幷びに其の他諸國の劇にひとしく、其の源を宗教に發したり。蓋し、文化の尙ほ未だ洽からざりしや、僧侶以外にして文字を解するもの殆ど無く、而して法談、說敎などいふ事も行はれざりしかば、何等かの方便によりて愚蒙の徒を敎誨するの必要ありき。所謂神秘劇（ミステリー）又の名奇蹟劇（ミラクル、プレー）は、基督の敎旨、該敎の史に見えたる聖賢、義人、及び其の經典中に見えたる著明なる事件などを知らせんとて、僧徒の工夫せし所なり。我が國俗、或は誤りて、泰西の演劇はなべて希臘に緣起せしものゝやうに思へれど、中古以後の泰西劇と古代の希臘劇とは、全く其の性質を殊にしたるものなり。學者或は中古以後の劇を傳奇劇（ロマンチック、ドラマ）又はゴシック、ドラマと呼びて、古代劇（クラシック、ドラマ）即ち希臘、羅馬のと區別す、中に就きて英國幷びに西班牙の劇は、純然として獨立の緣起を有す、其の興隆の初めに於ては、絕えて古代劇に因緣する所無し。

英國劇の體式は、時代と共に變化せしが、其の最も古き體式は、前に謂へる神秘劇（ミステリー）又の名奇蹟劇（ミラクル、プレー）なり。或は稱して怪異劇（マーヴェル）ともいへり、たゞし、正當にいへば奇蹟劇は重に舊約書の事件に關し、神秘劇はをさ〳〵新約書に關するものなりされど英國のは必ずしも此の區別を具へざりしが如し。いづれも基督經典中の事件を經とし、聖賢、義人の傳を緯としたり。其の脚色の荒唐無稽にして蕪雜粗笨なりしは、奇蹟劇といふ名によりても推知せらるべし。按ふに、我が二十五座、三十五座などいふ神樂劇に髣髴たりしものならん。

始めて英國にて奇蹟劇を興行せしは、一千百十年なり、後にセント、アルバン院の住持となりしヂェップレーといふ僧の發企せし所なりといひ傳ふ。其の後、ヘンリ二世王以來、此の種の劇おひ〳〵に行はれ、詩宗チョーサアの頃には殆ど普通の興行物となり、そを演ずるものも、特り僧侶ばかりにはあらで、平人はたこれに與かりきといふ。かくて、一千二百六十八年のころ（我が後深草天皇の文永五年に當る）、今樣、猿樂などの時代に至りては、市人中に結社して、神秘劇を演ずる者あまた出で來、おのゝの經典中の主要なる事件を脚本に物して、世界開闢より最終審判日にいたるまで

の事を演じき。其のうち、いと長きは三日若しくは八日間も打ちつゞけたりといふ。其のころの舞臺は、譬へば、我が踊家體などに似て、いづれも二重にしつらひ、上なるを正當の舞臺とし、下なるを樂屋とし、時としては地獄にも代用しきとか。且つこゝかしこ自由に牽きまはり得べきやうに車輪をも附けたれば、市中の廣き場所にひきゆきて隨時に興行する便宜ありき。其の結構の粗糸なりしこと想ふべし。

當時の演劇社、すなはち組合のうち、其の脚本の今の世に傳はれるもの三あり、Towneley と Coventry と Chester 是れなり、共に一千三百年より一千六百年までに行はれたりしものなり。其のうち、第一の組合の脚本は、三十種、第二のは四十一種、第三のは二十四種、いづれも近き頃シェークスピヤ會にて編纂發行せりと聞こゆ、中に就きて最も古きは Towneley の脚本なり。

さて、其の筋立の大概を抄錄したる者を見るに、まづ其の第一編には、世界開闢の事、ルシファー(魔王)幷びに其の黨與の悖叛、及び彼等が天界より逐ひいださるゝ事等を含みたり。はじめて場の開かるゝや、天神出現して簡短なる白を述ぶ、やがて世界の開闢に着手す。天人等一齊に神德を謳歌す。神すなはち徐かに帝座を降りて下場す。惡魔たゞちに神の空座を簒奪して、傲然衆天人に君臨す。此に於てや、善惡の諸天人爭議決せず。たま〳〵神歸り來たりて大に怒り、悉く賊徒を天堂の外に逐ふ。次ぎてアダム、イヴの二人創造せらる。而してエデンの樂園に於ける二人の幸福を嫉妬する惡魔の白は該篇の結局なり。

さて第二の脚本は、アベルの虐殺を骨子とせり。開場と共にケインに事ふる一僮上場して開場詞の如きものを述べ、觀者の謹愼沈默して觀んとを警告す。ケインやがて農具を携へて上場し、僮と耕作の事に關して相爭ふ。アベル上場してケインを遇すると懇ろなり、ケイン却りて之れを虐遇し、且つ終に之れを殺す。次ぎてケインが咒咀の白あり、僮とをかしみの立廻り及び問答あり。而してケインが觀者に對して告別の白を述ぶるをもて結局とす。

第三の脚本以下は前例によりて類推すべし。概して惡魔をもて重なる人物とし且つ多少滑稽の素をまじへたり。所謂惡魔は間〻我が二十五座のばかに相當す、中には我が道戲芝居に似たるものあり。Chester 幷びに Coventry の脚本も其の性質

の大體は、上に擧げたると相同じ、管々しければ今は悉く省きつ。

神秘劇中にいづる主要なる人物は、ヘロッドとターマガントとなり。甲は古の虐殺者、乙はサラセンの惡神にて、共に我が所謂荒事師の役廻りを演じたりき。ヘロッドの白は概して左の如し。

我れこそは全き人類の大君、命ずるも打つも、解くも、縛るも、我が心のまゝだ。太陰もおれが命ずるまゝだ。よう心におぼえておけ、おれの權力は無上だぞ。今も、昔も、行末も、おおよぶ者のない剛の者だぞ。おれが退れと命ずれば、太陽もえ照らさぬわえ。

ターマガントはおそろしき高言者、爭論者、殺人者、世界の制御者、地震と雷との兒、死神の同胞など稱せらる。後には此の二人物の中いづれか一を具へざるを不具の劇とせり。ヘロッドとターマガントとが當時の劇に於けるは猶我が金平の金平本に於けるが如くなりき。

神秘劇一變して**教訓劇**(モーラル、プレー)といふもの起りき、こは後の正劇の萠芽也。そも〳〵神秘劇の本來の旨は、上にいへる如く、神學上の事件及び理義を不學に教ふるに外ならざりしが、新奇を追ひ變化を好むの念は、演劇者をも、看者をも驅りて、次第に其の主題の區域を擴張せしめ、最初はたゞ目先を變へん爲にのみ挿加

せし神學(經典)外の比喩的人物も、月日を經る儘に、やう〳〵劇の主要なる人物となり、隨ひて劇の筋立もいつしか世間の事件を主とし、竟には宗教の旨に遠離るに至りき。さて、此の新體の劇にては、常に人の善德と惡德とを重要なる人物とせり、後には富貴、善行、懺悔、死などいふ無形の性質及び境遇までが、比喩的人物に作られて、舞臺に言動するととなりにき。概して、善德の竟に克ちて惡德の敗るゝを劇の筋立とせり。かゝりしかば、夫の神秘劇にてはワキとなれりし惡魔は、教訓劇にては主要なる道戲形となり、惡德といふ他の道戲形と共に、猥俗を極めたる滑稽的科白を物して、專ら看者の嬉笑を買へり。但し、惡魔は其の相貌をも言動をも、頗る醜く、おそろしく物したれば、眞の道戲形たるよりは、むしろ惡形に近かりしならん。惡德は後の醇粹なる道戲形の祖なり。

教訓劇の種類は一二のみならず、爰には只一つ二つを擧げて、**其の脚本**の大むねを示すべし。いと古き作のうちに『心、意、知』と題したる教訓劇あり、智惠まづ塲に上る、やがて精靈來たりて彼れと合躰し、共に神の慈悲、七聖餐、五官、理性等に關して問答するとあり。次ぎて心、意、知の三者おの〳〵其の特に司る所の性質を演說

す。其の時、處女の扮裝したる五智(常識、想像力、決志力、思量力、記憶力)が一齊に唱歌することありて退場す。さて惡魔王ルシファア上場し、心、意、知は人の魂の三性なりと演說し、さて「我れ此の三者を襲ひて墮落せしめんと欲す」といひ、姑らく下場し、又忽ちに上場し、難無く其の志を成就し、やがて揚々として高言壯語す。かくて其の演說の將に終らんとするに臨みて、突然一人の小童(多分看者中の小童ならん)を引きつかみ、おそろしく叫呼しつゝ退場す、これ滿場の喝采を博せん爲なり。惡魔王の去るや、彼れが犧牲となりし三者はでやかなる衣裳を被りて上場す。今や彼等は眞心を見失へり、かるがゆゑに意まづ邪淫に傾心し、衆皆一齊に起ちて歌ひ且つ舞踏せんとす。心まづ其の黨類を招集す。瞋恚來たり、頑固來たり、害心來たり、短慮來たり、破壞來たり、不和來たる。次に知其の從隷を呼ぶ。邪智來たり、輕蔑來たり、不義來たり、不信來たり、暴虐來たり、詐欺來たる。つぎに意の諸僕來たる、不注意、怠惰、飽饜、貪婪、姦淫、是れなり。已にして伶人等角笛を吹き鳴らし、一同起ちて舞はんとす。忽然として大爭論起こる。十餘名の惡德等逃走す、ひとり心、意、知、の三者のみ舞臺に留まる。此の時智、惠上場す。精靈(アニマ)もまた上場す。精靈の相貌のおそろしきとは惡魔にもまされり。彼れたちどころに六の怖ろしき罪業を生む。こゝに於てや、精靈はじめて我が姿の變はりたるを覺る、而して心、意、知は此の怪異の自家(おのれら)等の非行に緣起せるを知り、やがて退場す。其の時、智、惠、口を開きて長白を述ぶ。心、意、知も再び上場して懺悔改悛の意を述ぶ。精靈(アニマ)かくと聽きて痛く打喜ぶ。これを大畧の筋立とす。

總じて敎訓劇の旨は善、惡、性の、爭鬪を諷示するをもて主としたるが中に、間〻人の性の大概がほの見えたるもあり。一千五百三十一年前(我が能樂全盛の時代)に刊行せられたりし『諸人(イデヤ、マン)』と題したる敎訓劇の如きは、上帝の獨白をもて場を開けり。上帝は人間が七のおそろしき罪業の爲に神を見棄つるを打慨き、死の神を召して云々と吩咐することあり。死の神すなはち命を奉じて諸人といふ者の許に至り て其の業(ワザ)の計算帳を上帝の宮(冥府)に持參すべしと傳ふ。諸人こゝに於て其の信友黨與(フェロシップ)といふ者の許に趣き、此の長旅の伴侶たらんことを乞ふ。黨與は諸人の爲に何人をも殺さんほどの眞心はあれど、此のたびの事は諾しがたしといふ。次ぎに親族に訴ふ、脛に痙攣の患ありて同伴しがたしと辭す。富貴に訴ふ、彼れ冷々た

り。最後に善行といふ女性に訴ふ。此の女尚甚だ屠弱にして殆ど立つこと能はず、諸人が携へたる業の計算帳の空白なるを指示し、やがて知識の許に往けといふ。諸人の知識に遵ふや、知識に紹介せられて、懺悔に遭ひ、次いで、輩固、分別、美性及び五智に逢ふ、彼等皆共に行かんと誓ふ。已にして墓に臨むや、美性まづ共に行くことをいなみ、輩固また逡巡し、分別、五知次ぎて辭す。知識すら諸人を棄てゝ去る。最後までも離れざるはひとり善行ありしのみ。

はじめて套の數を五とし、更に一套中に幾多の齣を設けしは按ふに『智と學との結婚』と題したる教訓劇なるべし。またやゝ個人生を描き得たるに近しと見るべきは"Like Will to Like, Quoth the Devil to the Collier."と題したる教訓劇なり。此の劇にいづる人物には、主人公にして惡德を兼ねたるコール、ニューファングルといへるを始めとして、其の友Ralph Roister, Tom Tossspot, Philip Fleming, Pierce Pickpurse, Cuthbert Cutpurseなどあり。なほ別に名譽、嚴刻、面目などいふ比喩的人物もあり。其の中、前に擧げたる人物の如きは多少個人的性格に近きものを具へたり。さてまた史劇の萌芽とも見做すべき教訓劇は"The Conflict of Conscience."と題したる者なり。此の篇の主人公なるPhilologusは、彼の俗界の名利の爲に神明の教を棄てきと傳へたる伊太利の狀師、フランシス、ベィラの替名なりとぞ。

純粹に抽象なる善德と惡德とを人物としたる教訓劇は、到底、尋常看者の同情を牽く能はざりしが故に、いつしか青史に著名なる善惡人の名を借りて此等諸德を代表せしむること起こりき、此れを史劇の緣起即ち**正劇の端緒**とす。さかしながら、其のころプルータスと呼び、アリスタイチーズと名けたる劇中の人物は、未だ以て一個人の性格を具へたるものといふべからず、プルータスは愛國心の權化、アリスタイチーズは公正の替名たるに過ぎざりしなり。而して之れと共に言動する他の人物中には、間〻純粹の比喩的人物もありて、後の史劇とは大に旨趣を異にせり。此の故にストラフォード、ブルック氏は以爲へらく「所謂正劇の興隆は殆ど此等諸劇とは關係する所なし、彼れはむしろ、古代劇及び伊太利劇を摸範として成りしものといはんが至當なり」と。さて論を繼ぎて曰はく

さりながら在來の諸劇もまた多少の變遷を經ざりしにはあらず、而して此の變遷をして迅速ならしめし者は、實に宗教上に於ける革命の衝動なりとす。蓋し、宗旨上の軋轢の劇烈となれりしや、彼の單に過去をのみ再現する演劇はもはや現在に熱裏せる世人

が悦樂せしむる能はざりき。此に於てや、劇もまた一種の黨派的機關となり、或は舊教派に利用せられ、或は新宗派の一武器となり、所詮は比喩の假面を被りて當世を諷刺する一具となりき。後の滑稽劇即ち喜劇(コメディー)は多少此の新教訓劇にも胚胎せり。云々。(以上大意)。

と。案ずるに、はじめて喜劇の要素を作り、且つ劇をして密に現實の人間に關係するものとならしめしは **ヂョン、ヘイウッド** なるべし。ヘイウッドはヘンリ八世に仕へたる劇の作者なり。彼れが作はもとより正當の喜劇にはあらず、みづから名けて **間劇** (Interlude)といへりき、即ち合間狂言の義或はツナギの幕とも譯すべきか。宴樂又は他の遊戯の間に餘興として演ずべき短き劇を謂ふ。ヘイウッドの作の中、名高きは"A Merry Play between the Pardoner and the Friar, the Curate and Neighbor Pratt."と題したる者なり、譯すれば『赦罪師幷びにフライヤー僧、牧師幷びに隣人饒舌(プラット)の間のをかしき劇』といふ義なり。こは當時の僧侶の敗德を諷刺せる者にて其の大躰の趣は頗る我が能の狂言に似たり。尚『夫ヂョン、婦チップ僧メル、ヂョンの間の好笑劇』又は『四ピー』("The Four Ps.")などいふ作もあれど、煩しければ今は叙せず。案ふに、間劇といふ名目は、ヘイウッドを俟ちて起こりしものにあらねど、そを殆ど教訓劇より

分離して、一種の滑稽劇とならしめし功は、特にヘイウッドに歸せざるべからず、現實らしき人物の劇に現はるゝに至りしは、彼れが作を嚆矢とすればなり。

さりながら眞の英國 **喜劇** 即ち正劇の最も古き標本は(尠くとも世に知られたるは)一千五百五十一年に成りきと傳へたる"Rolph(ロルフ) Roister(ロイスター) Doister(ドイスター)."なり。こは宗教革命に關するいと古き著作家中に盛名ある **ニコラス、ユードル** の作る所なり。ユードルは古文學の教師として名高く、又ウェストミンスター學校の教頭としても知られたりき(一千五百五十六年逝く)。彼れは件の劇の開場詞中にて、余は羅馬の劇詩家プロータースとテレンスとを摸範とすといへり。套(セイ)の數五、而して更に套を分ちて數齣となせり、處は英都ロンドンにて、人物、風俗等は悉く英吉利を本とせり。主人公はロルフ、ロイスタア、ドイスタアにして、女主公は寡婦カスタンス夫人なり。ロルフがカスタンス夫人に戀慕して、結婚をいひいるゝを、夫人がきびしく擯斥し、ロルフの友マッシューが其の間に周旋してくさ〳〵の失敗をなすをかしみより、終に双方の間に笑ふべき爭鬪を釀すこと、及び夫人が情人なるグッドラックと夫人との間の行違ひなど最初の喜劇としては見るべきもの尠からず。我が浪花の俄芝居(にわかしばい)な

どに比ぶれば、着想、落筆、双つながら數等の上にあるものゝ如し。

英國最古の悲劇は"Gorboduc."又の名"Ferrex and Porrex."なり、サックヴィルとノオトンとが分擔して一千五百六十二年(我が正親町天皇の永祿五年)に作りし所也。其の脚色の大要をいへば、紀元前六百年のころ英國王ゴオボダックといふがあり、其の在世中に、其の領土を二分して、フェレックス幷びにポレックスといふ二皇子に與ふ。其の後五年、二人互ひに全權を得んと欲して兵を起こす、國内大に亂る。而してポレックスは終に兄フェレックスを殺しぬ。大后ボデナといふあり、殺されしフェレックスを深愛したりしゆゑに、かくと聞きて恨み怒り、或夜ひそかにポレックスの寢室に忍び入りて其の讎を復す。さるほどに庶民大に激昂し、やがて蜂起して老王夫婦を殺す。此に於てや、貴族等相會して治國の策を議し、まづ大に暴徒を討ず。已にして貴族等相爭ひ國内紊るゝこと麻の如し、而して之れを統一すべき皇嗣なし。強者弱者を壓し、新陳代謝して國權を握る。内亂これが爲に間斷なく、全國疲弊の極に沈む。云々。これを大躰の筋書とす。

此の悲劇は、一套毎に必ず一場の默劇を添へたり、豫め演ぜんとする事件を知らせんとてなり。又初めの四套には、其の尾毎に一段の曲を附加し、已に演じたる事件につきて褒貶の意を謳はしめたり。さて爰に留意すべきは、此の齊唱曲の外は、白の總て沒韻律語よりなれることとなり、こは實に劇詩の體式上に於ける大なる進歩なりしなり。されど其の他の點に於ては殆ど稱美すべき所なし、さるは現に演すべき部分はいと尠くして、白の大かたは過去の物語より成り、加ふるに、勸懲の意あまりにあらはに通徹したるがために、言々おのづから自然の妙致を失ひ、揑造の跡歴々たりといふ。

さて**最古の散文劇**はジョールジ、ガスコインが伊のアリオストーの作を飜案せし"The Supposes."といふ作なりとす。こは一千五百六十六年にはじめてグレース、インにて演じきと傳へたり。また伊太利の小説を種本にして劇を作するの例は、今は傳はらずなりたる『ロミオ、アンド、ヂュリエット』の劇なり、こはアーサア、ブルックの飜案に係る。其の他『タンクレッド、アンド、ギスマンダ』と題したる喜劇も、伊太利のボッカチオの物語を種としたり、こは五人の作者が一套づゝを擔當して合作せしもので、一千五百六十八年、法學内院にて女皇エリザベスの覽に供せしを始とす。案

ずるに、此の作は沒韻律語に關する點だけを除けば、他は總じてゴオボダックが驢に倣へるに似たり、例へば、套の初め毎に默劇を添へ、又其の尾毎に齊唱曲を附加したるなど。

一千五百六十八年より同八十年までの諸遊戯の興行錄によりて取調べたりといふを聞くに、朝廷にて興行せられし劇のみにても五十二篇あり、此等の諸作は今は一だに傳はらざれど、其の外題によりて察するに、其の十八篇は古代(希臘羅馬)の事に關し、他の二十一篇は近世の歴史、小說等に基き、而して他の七篇は喜劇中に攝すべく、又殘る六篇は敎訓劇に屬すべきものなりとぞ。さて、かくの如くおひ〳〵正劇の行はるゝに及びても、彼の敎訓劇はた全くは廢せられずして、はるかに後年に至るまでも、稀々には、興行せられき。彼の神秘劇といふものさへ、エリザベスが崩御後に興行せられし例ありとか。當時の英國が頗る劇の種類に富みたりしを見るべし。

演劇興起の當時には、いまだ一定せる劇場といふもの無かりき。上に擧げたる劇は總じて大學の講堂やうのところ、若しくは法學院、若しくは朝廷などにて演ぜられしものなり。俳優が自由に演劇を興行するの特許を得しは、一千五百七十四年以後の事なり、すなはち女皇エリザベスの嬖臣リースタア伯がかゝへの優人等が內地の各處に於て演劇することを許されし時をはじめとす。彼等が創築せし英國最初の劇場をブラック、フライヤアと稱しき、一千五百七十六年の落成なりといふ。同じ年シューアヂッチ近傍の野に更に二部の劇場起こりき、一をシヤタア座と稱し、他をカアチン座と呼びぬ。シヤタアとは劇部の義にしてカアチンとは帳の義なり。斯くして、ロンドン府內のみにても、程なく七座の劇場を見るに至り、爾後五十餘年間に(Prynneの說によれば)十九座の多きを致しき。さりながら當時の劇場の好標本と見做すべきは、一千五百九十九年(我が後陽成天皇の慶長四年)にテムズ河畔に建てられし地球座なりとす、こはシェークスピヤ等一座の俳優の爲に設置せられしものなり。

此の座の構造をいはんに、內部は圓形にして外部は粗造なる六角塔の形をなし、渠をもて其の周邊を圍繞し、且つ建物の中央には赤き旗を揚げたり。舞臺を除くの外は何等の蓋もなく、即ち俗に謂ふ靑天井なりしかば、驟雨の折には土間の看客は

皆濡れにき。開場は午後三時を定則とし演技の間は、二時間乃至二時間半を通例とせり、又三時間に亘りしは最稀れなり。

觀者は、身分の高き者は、今の棧敷やうの設けの席に着き、又は舞臺なる床几にかゝりて觀覽するを例とせしが、尋常の觀者は、いづれも土間に立ちて見物せり。之れを土間連（グラウンドリングス）と呼べりき。木戸代は六ペンニ、二ペンニ、一ペンニの三等ありて、貴賤貧富を問はず皆自由に入場するを得しが、前にいへる舞臺の座席は、特に上等看客のために設けられたりしもの故、別に一シリングの座料を課し、且つ床几料として別に一シリングを課しきとぞ。さて、たまゝ床几の不足する時には、此等上等客とても、或は躊躇し、或は横臥して見物しき。彼等は演技中にも煙艸を喫し、幕間には骨牌をも弄びき。中以下の觀者にいたりては、技の果つる毎に杯を擧げて麥酒を飲み、菓物を食ひ動もすれば嘲罵爭鬪し、喧囂雜沓、殆ど名狀すべからざるに至りしこと屢〻あり。或は俳優と觀者との間に口論を生じ、往々にして劇外の活劇を演ぜしこともあれば、或は上等客と土間客との間に行違ひを生じ、それがためにくひあまたしの林檎空中を彈飛する奇觀を呈せしこともありき。

テーヌ當時の觀客を評して曰はく、彼等は血氣充滿せる多情、多想像の國民なりき。彼等自身が已に一種の詩人即ち劇中の人物なりき。いと粗末なる舞臺の道具立が、能く彼等の心眼に金殿、幽谷、深山、荒原等の幻象を映出せし所以のものは、其の多感、多想像なりしがためなりと。げに、當時の舞臺の粗樸なりしや、我が能舞臺の趣に似て、更に又質素なりき。舞臺にはさすがに屋蓋ありしも、藁のたぐひをもてふきたり、而して板の間には鼓若しくは蓆の類を敷き、而して總べて見切には彩畫を物したる帳を掛けにき。正面の引幕も其の初めは尋常のブランケットを用ひたるのみかそを中央より左右へ引き分くるをもて例としたりき今の帳の如く上の方へ卷きあぐるやうにせしは遙に後のことなりといふ。隨ひて、畫割やうのものもなく、また大道具と稱すべきものも無かりき。されば優人の場に上るや、支那劇又は我が能にての如く、其の何等の人にして、今何等の處に在るかを自白すること間〻あり。或は板札を舞臺の正面に掲げて地の名を示しゝこともあり。さるは難船の海原も、花園の景色も、すさまじき戰場の光景も、皆同じさましたる舞臺にて見すればなり。稀に用ひし高塔、禽獸、山林などの形も、板にて製りたる甚だ粗造のもの

なりき。

當時の劇は、我が國の劇にひとしく、時間の變遷を嫌はざりしかば、劇中の年華の移り變はることといと急なり、例へば、わづかに二時間ばかりのうちに、或姫君と或年少紳士とが相思ひて出奔し、やがて一兒を擧げ、其の兒程無く生長りて或少女と結婚し、終にまた一兒を生まんとするに至るまでの有爲轉變を演ぜしとあり。されど觀る者は、そを異しとも、不都合とも、感ぜずして、能く劇の旨味に同感しきと見ゆ。又そのころには女優といふものもなく、總べて女形は年少俳優の打扮するが例なりき。今日の如き女優、幷びに自由に移動し得べき大道具の用ひらるゝに至りしは、所謂復位期以後即ちチャールズ二世王以後の事なり。

俳優はおほよそ八人より十二人までを一座とし、一人にて數役を兼ねて演技したり。現にヂョンソンが作"Every Man in His Humour."『人さまく〳〵の氣質』といふ劇には重なる人物十七名も出づるなるに、こを喜劇俳優わづか十名にて演ぜしことあり。又同じ作者の『セヂェナス』といふ劇には、人物三十四名もあるに、そを悲劇俳優の重なる者僅々八人にて興行せし例もありとぞ。シェークスピヤ一座のうち、最も名高き

實惡はリチャード、ベアベージヲといふ俳優にして、道戲形の名人はウィルヤム、クムブ、又ベアベージヲに次ぎてハムレット、イヤゴなどに譽れを得しはヂョセフ、ティロア、女形にて加役にも勝れたりしはリチャード、ロビンソンなど。委しきことは要なければ今はいはず。さて夫の作者が開場詞を歌ふを例とせしと、最負の府内に洽くして其の肖像畫を大かたの家に額面に物して掛けたりしと、舞臺の構造と裝飾との質素なりしこと、座主俳優が脚本をほしいまゝに添削せしことなど、東西相照らして興あることどもは、宜しく別に英國劇史の詳細なるものに就きて見るべし。

上に述べたるサックヰルが『ゴオボダック』は古羅馬の作家セヲカの作に倣ひて綴りたる古代ぶりの悲劇なり、之れを**古代劇**といふ。此の種の悲劇は十六世紀中伊太利、佛蘭西、及び日耳曼に流行し、就中、佛蘭西にては十八世紀までも盛行せし程のものなれど、英國にてはさばかり勢力を得る能はざりき。サックヰル一たび之れを輸入し、ダンエル等再び之れを輸入し、後ち十七世紀に至りて三たび之れを輸入する者ありしかども、根蔕定まるに至らずして枯れにき。さればサックヰル一派の古代劇は"Cornelia." "Cleopatra." "Philosas." 等若干の作ありしにも拘らず、劇場にては勢

力なく、次第に間劇（インタールード）と滑稽劇（ファース）とに歩を譲りたるの觀ありき。

按ふに、間劇、滑稽劇は僅かに一場二場に止まる短かき劇なれど、劇としての質よりいへば、寧ろ古劇に優る所ありき。但し、古代劇を離れて一新劇を工夫するの困難は、其の新臺詞を物するの困難と共に、小少ならざりしが故に、初めの間は詞意共に雜雜を極めしこと疑ふべからず、特に其の韻語に現はれたる一種の破格は後のシェークスピヤの作にすらも影響を及ぼしき。こゝに間劇及び滑稽劇のやゝ名あるものを擧ぐれば "New Custom." "The Trial of Treasure." "Like Will to Like." "Cambyses." "Damon and Pythias." "Appius and Virginia." 等是れなり。

第八章　リ、及び大學才子

ゴヨン、リ、――大學才子派――ジョール ジ、ピール――ロバアト、グリーン――キッド、ナッシ及びロッヂ――諸家の概評――マーロー――其の作

英國劇の所謂第二期は、一千五百八十年より同九十六年までにして、此間には彼の『ユーヒューエズ』の作者リ、の脚本并びに所謂大學才子（ユニヴァーシティー、ガイット）の諸作及びシェークスピヤが壯年の諸作出でたり。爰には最近の査定に據りて、まづリ、と大學派との名作をのみ略叙すべきが、此等諸家の作は其の體式くさ〳〵なり。一千五百八十七年以前は散文又は韻語にて物すること例なりしが、マーローいでゝ『タムバアレーン』の劇に沒韻律（ブランクヴァース）語を用ひしや、此の體、劇壇を風靡し、韻語の作、散文の作は、一時殆ど跡を絶ちにき。マーローの事は尙下にいふべければ、あら〳〵リ、の作をいはんに、リ、が脚本家となりしは『ユーヒューエズ』を物せしより遙かに後也。リ、の作は所謂大學派のとは全く別種なり、彼れは（ブルック氏によれば）散文にて七種、韻語にて一種、沒韻律語にて『タムバアレーン』の類に倣ひて）一種の脚本を物しき。『月中女』『エンヂミオン』『マイダス』『戀の變相（メタモアホーシス）』『處女の變相（メタモアホーシス）』など、其の聞こえたる作なれど、いづれも多少神祇傳（ミソロジー）に因み、若しくはパストラル、ポエム（山野歌）の氣脈を具へたるものにて、正しき劇たるよりはむしろ假面劇（マスク）に似たる者なり。加ふるに、其の文致は例のユーヒューエズ體の過巧纖細なるものなれば、若干の妙なる落想の散見したるにも拘らず、劇詩としては、固より稱美すべき程のものにあらず。

大學才子派

とは諸大學出身の作家をいふ、マーロー、グリーン、ピール、ロッヂ、ナッシ及びキッド等是れなり。此のうち、マーロー、グリーン、ピールの三人を俊秀とす、

他は必ずしもいふに足らず。ブルック氏は件の三家を評して曰はく「彼等の作は人間の情慾(パッション)と行爲(アクション)との作用(はたらき)を多少眞の劇詩的効力(ドラマチック、エッヘクト)ある筆法をもて書きあらはしゝ嚆矢なり。ピールとグリーンとは、其の作中の人物(カラクタース)を種々の境遇に立たしめて、能く相活動せしめ、且つ能く相發暢せしめたり、而も彼等の筆力は未だ脚色をして圓了せしむるに及ばざるなり、換言すれば、一齣々々相追ひて自然に結局に達すらんやうに劇を作くるの力量を缺きたり。之れを要するに、此の二家は技術を缺きたり、されば彼等が作中の人物の語(せりふ)は、詞句の詩歌としては妙なることあるも、概ね自然の致を失ひて質實ならず」と。

ジョージ、ピール(一五五八——一五九八)は一千五百七十七年オックスフォード大學には最初の學位を得、又同七十九年にマスタア、オブ、アーツとなり、後ちロンドンにいでゝ、文壇の一冒險者となり、淺ましき放蕩の生涯を經たりしこと、當時の專門作家の例にひとし。其の處女作を"The Arraignment of Paris."とふ、『パリスの糺問』の義なり。こは例の希臘神祇傳に基きて作れるものにて、ヂュノー、パラス、ヴィナスなどいふ諸神祇を人物としたる所謂、パストラル、ポエムの趣あり。此の以前にい

でたりし諸作に比ぶれば、詩歌としては勝れること明なりといへども、性格劇としては、何等の稱すべき點も無し。且つや、こは特にエリザベス女皇の覽に供する爲に作られしものなれば、眼目の旨意は女皇に對する追從たるに外ならず。其の他『アルカザーの役』、『エドワード第一世王』、『老妻の譚(テール)』、『デヰッド王と佳人ベスセーブとの相思』など題したる作あり。『エドワード第一世王』は後の圓美なる史劇の前驅にして、『老妻の譚』は明かにミルトンが假面劇『コーマス』の源泉なり、而して最後に擧げたるは、通例、彼れが傑出の作と稱せらる。要するに、優美閑雅の妙はシェークスピヤ以前の脚本家中、ピールひとり之れを擅にせりと稱せらる。

ロバアト、グリーン(一五六〇——一五九二)は、全體の上より評すれば、ピールに劣りたりといへども、才分は豐富にして着想は慧利、殊に滑稽に秀でたり。彼れは一千五百八十三年にマスタア、オブ、アーツの學位をケムブリッヂ大學に得、後まもなくオックスフォードの一員たるを許されしかば、自ら稱して「二大學のマスタア」と號しき。其の專門作家となりて後の放逸と悖德とは、當時の衆作家の例に同じ。其が種々の著作中の、最も勝れたるは脚本にして、脚本中の最も傑れたるは『フライヤア、ベーコン』及び大學才子

コン及びフライヤア、バンゲーの傳(ヒストリー)』と題したる者是れなり。こは千五百九十四年に始めて印刷せられしが、劇に演ぜられしは一千五百九十一年をはじめとす。

此の劇の主人公は後に、エドワード第一世王となりしウェールスの公爵(プリンス)エドワードにして、女主公は掌璽官の女マーガレット、所謂フレッシング、フィールドの佳人(フェアメイド)なり。公が狩にいでゝマーガレットを見初むることを發端とし、從臣レーシーを農家の少年の如く假裝せしめて彼の少女を說かしめんとするを脚色の第一段とす。かくて後、公は姿をかへてオックスフォオドなる方士ベーコンといふ僧を訪ひて其の望の成否を占はしむ、而して彼の僧が神術は、圖らずも、レーシーが二心を抱いてマーガレットに懸想し、公(プリンス)の爲に彼れを說かずして却りて自家の爲に求婚せることを明しぬ。公大に憤る。會〻レーシー復命す、公劍を拔いて之れを誅せんとす。マーガレット走り入りて仲裁し、假令妾が命を召さるとも、レーシーと別かるゝこと能はずといひ、且つ、殿下は其の榮譽の之れが爲に汚れんを思ひはかりたまはずやと直諫す。公竟に屈服してマーガレットを棄却す。以上をもて眼目の脚色とすれども、別にベーコン幷びにバンゲーの二僧を一方の方術家とし、日耳曼より渡來せるヴンデルマ

ストといふ魔法家を他方の敵者として、方術くらべの段あり。ヴンデルマストがベーコンの爲に破らるゝ場が見せ場なり。さて最後の齣は、エドワード公とカスチルのエリンノアとの結婚にして、ベーコンが豫言を述ぶるを當時流行の場あたりとせり、即ち、後の英國王エリザベスの德を豫言して譽頌する事これなり。ハドソンの評によれば、公爵レーシー及びマーガレットの二性格はシェークスピヤ以前に無類の作なりと。云々。

グリーンが作は尙此の外に、ロッヂと合作せしものを加へて、若干あり、今は悉く省きつ。

さて、トマス、キッド(?——?)には"The Spanish Tragedy." "Cornelia." 等の作あり、トマス、ナッシ(?——?)には"Will Summer's Testament."を名作として其の他若干編、またトマス、ロッヂ(?——一六二五)には"Marius and Sylla."を首として、これにもまた他の幾多の作あり。

以上諸家の作は、其の文も、其の想も、思ひ〳〵の姿なれど、其の間また多少相通ずる特相あり。其の一端を言はんか、いづれも國劇興隆の風雲に乘じて現はれし輩な

れば、流石に生氣勃々として清新の致、紙幅に溢れんとする概あり。セインツベリ氏が「彼等が作の誇張と放縱とを其の表情の上に極めたるは、恰かも群兒が將に遊戯を催さんとするに當りて先づ一番の吶喊を試むるに相似たり」と評したるは適評なり。げにや表情の誇張と放逸とは、ビール、グリーン等以下の特質にして、其の悲を叙し、喜を叙し、剛を歌、ひ美を詠ずるや、嘗て極端に流れざるはなし、而して此の風はマーローに至りて更に一段を進めたり。さて、表情の誇大に次ぐ特質は、其の臺詞に引喩、即ち典故を引用することの夥しきこと是れなり。場に上るほどの人物は大方皆希臘、羅馬、乃至、古代神話中の用もなき故事を援引するを例とせり。されば、かゝる誇衒の弊ありしにも係らず、流石に精妙なる文字にも乏しからず。マーローを最としてビールこれに次ぎ、グリーンまたこれに次ぎ、放縱誇張若しくは平板冗漫の辭句の間、時に燦として眼を射る好句もあり、是れ皆後に大シェークスピヤが想像の鎔爐に收容せられて、更に一段の烹鍊を經て醇善醇美の詩句となりにしものなり。

クリストファア、マーロー

は シェークスピヤ以前に於ける英國最大の劇詩家にして一千五百六十四年、二月二十六日、即ちシェークスピヤが洗禮を受けし前恰も二ケ月に、カンタアベリなるセント、ジョールヂの會堂にて洗禮を受けきと傳ふ。一千五百八十三年に、ケムブリッヂ大學に於て、はじめて學位を得、同八十七年にマスタア、オブ、アーツとなり、後いくばくもなくてロンドンの作者界に墮落し、遂に不羈放蕩なる生を送りしが、一千五百九十三年、六月一日、フランシス、アーチャアといふ者と爭論の末、搭鬪して命を失ひぬ。時に齢三十歳なりきといふ。

其の初作は『タムバアレーン、ゼ、グレート』と題せる悲劇にして、其の着想の壯大と其の沒韻律語の勁拔とは、實に一世を聳動して、マーローが詩名はロンドンの上中下に轟きにき。今日の所謂脚本を標準として評すれば、此の作の如きは白を集めて一篇を成せるものといはんよりは、寧ろ種々の演説を聯ねたるものとも評すべし。人物の名は相異なれども、そが演説する所は、いづれもおなじ頭腦より出でたらんが如く聞ゆ、即ちバイロン、ミルトン、アヂソン等が作と失を同うせり。按ふに、其の一時をうごかしゝは、其の想像の雄勁にして燃ゆるが如きと、其の斬新なる沒韻律語が他の陳腐爛熟せる有韻律語と相照らして異彩を放ちしとに由來するところ

多かるべし。但し、『タムベアレーン』はマーローが純粹の處女作なれば、此の作のみによりて彼れを評價せんとするは不當の沙汰なるべし、彼れが技倆は爾後駸々として作毎に進みたればなり。其の『モルタの猶太人』に於ては、無慚の貪焚を描き、其の『醫師フォースタスの哀史』に於ては、無限の知識餓鬼を寫し、其の『エドワード二世』に於ては、好史劇の模範を示しき。かるが故に、批評家等、或は彼れが不幸短命なりしを痛く惜しみて歎ずらく、彼れにして薄運ならざりせば、エリザベス朝の文壇に二個のシェークスピヤを得べかりしものをと。セインツベリ氏解して曰はく

此の評は當たらず。マーロー偉なりさいへども、全く諧謔滑稽の才を欠けり。彼れの悲壯を自在にする能力と豊富なる想像の才とか、此の特質を兼れ備へなば、げに他のシークスピヤを成ッを得たらん、猶其の度の一層小ならん場合には、他のホーマアを作り、而して其の物すごく且つときれ〳〵なる場合にすら、他のダンテを作らんが如し。

と。ハドソン氏もまた曰ふ、

喜劇を成すの力は、明かに彼れの有せざりし所なり、而してそは高尚なる悲劇を作らんには必須の力なり。此の理や、古くはプレトーの時代に斷定せられたりし論點にして、其の健全にして正確なる、蓋し、動かすべからず。況んやシェークスピヤの實例が、更にその理の當然なることを確定せるをや。按ふにシェークスピヤの能くシェークスピヤたるを得たりし所以は職として其の能く人心にありとある諸能力を兼具し、能く整頓し、能く調和し、或は之れを明々地に、或は之れを冥々裡に、各篇のうちに利用せしに由る。

と。所詮、マーローの衆作家に卓越せる所以は、主として、其の落想の雄大なるに在り、ベン、ヂョンソンの所謂「マーロース、マイチー、ライン」、(マーローが雄大の句)是れなり。但し、彼れが雄大は無規放埒にして、尚頗る修練を缺きたり、以て金剛玉のいまだ琢磨せざるに喩ふべし。其の傑作と稱せる『エドワード二世』だに、シェークスピヤが傑作の史劇に比ぶれば、啻に數流の下にあるのみにあらず、明かに其の質を異にせり。マーローはむしろ抒情的劇詩家と稱すべきものなり。

かくはいへど、シェークスピヤの作すらも、其の三十歳前後の手に成れるものゝ、就中、史劇の或二三の、如何にマーローのに髣髴たるかを思へば、行年三十にして世を辭せしマーロー!の天才は、未だ輕々しく評定すべからざるに似たり。近世シェークスピヤ研究の盛大となりしや、人皆相爭うてマーローが作を玩讀し、含味咀嚼す、所以あるかな。左に(多少上文に謂へる所と重複する嫌ひはあれど)ブルック氏の語を假りて此の章の總評に代へん。

「マーローが作は、よく其の一生の閲歴と、其の共に著作せし作者社會の生活とを反映せり。マーローは不信神、多想像、多感、多情、放縱、逸蕩なる詩文人の生活を過ごしき、而してピール、グリーン等に至りては更にまた甚だしきものあり。彼れ等は皆、劇場と酒樓と牢獄との間に其の一生を終へにし當時の放蕩なる作劇者の代表なり。彼等が作は能く人間の善美なる側面をも描き得たれど、不羈放逸なる青年の痕跡も歴々たり。彼等の劇は粗大、放膽、剛强にして、不同不等なる生氣其の中に充溢す。又奇異にして荒唐、時としては蠻野の風あり。又屢〻温柔なる情緒に富めり。其の多情にして多感なるや、間〻婦人の情に似たり。而して其の人情を描き、感慨を寫すや、常に過大誇張に流れざるはあらず、要するに、彼等の作は何等の適宜をだにも具へざる者といふべけれども、其の絶えて無生氣、不活潑の弊を存せざる所、多少此の失を償ふに足らん。又其の粗野なるを病とするも、雄勁なるは及び易からず、而して是れ一は其の時勢の然らしめし所なり。蓋し、エリザベス朝は奇なる照(コント)對の充滿したりし時なり、烈火の如き行爲(アクション)と多感多情の瞑想とが流行したりし時なり。又男女間の空想をよろこび、武俠の遺風をほまれとし、猥褻陋俗を避けずして戲謔をほしいまゝにしたりし時なり。公には企業、冒險、頻に行はれ、私には口論、鬪爭、間斷無く接踵し、文壇は平靜なるが如くにして、辯難、思索は盛に行はれ、一方には信神の念磅礴し、他の一方には懷疑、不信仰の念勃々たりし時なり。而して件の情勢の全分は、正しく彼等諸作家の劇中に描き出だされたり、只其の彩色のあまりにきら〳〵しきに過ぎたるのみ」と。

第九章　シェークスピヤ

經歴——第一(フォリオ)——其の著作期——第一期——第二期——第三期——第四期——劇詩——叙事詩及び抒情詩——四大悲劇

ウィルヤム、シェークスピヤに就きては、こゝには多く言はざるべし。シェークスピヤが閲歴に關する臆測、其の爲人に關する揣摩、想像、其の劇詩家としての技倆に關する月旦は、已に万牛に汗せしむべき著述となりて諸文華國の文庫に充滿せり。今や童蒙もシェークスピヤの名を聞知したれども、專門の學者だにも未だ其の爲人の詳細を明かにする能はず。その故は他無し、シェークスピヤの傳は希臘のホーマア我が國の近松の如く、模糊零碎、茫として探究するに由なければなり。英國に在りて

はニコラス、ロー以來、獨にありてはレッシング、ゲーテ、シュレーゲルこのかた、シェークスピヤを景崇するの念月に年に加はりて、所謂シェークスピヤ會員等の聲古研鑽は殆ど至らざる所無しと雖も、此の大作家の眞相は、或意味より言へば、尙いまだ洞破せられざる概あり。彼れに關する最近の考察を知らんと欲する者は、Hiram Corsom 氏の "Introduction to Shakespeare," 及び Sydney Lee 氏の "A Life of Shakespeare." などに由りて其の大概を窺ふべし。こゝには二三の要件のみを揭げん。

ウィルヤム、シェークスピヤは、一千五百六十四年、四月二十三日(?)(我が朝正親町天皇の永祿七年、近松門左衞門の生誕前八十七年、小野通女八歳)ウァーヰック州なるエヱン河のほとりなるストラットフォオドにて生まれき。父はヂョン、シェークスピヤといひ、母はメーリー、アーデンといひて、共に中等社會のやゝ下級に位せりし者也といふ。シェークスピヤが幼年の生活、其の敎育、其の容貌、擧止、習癖等に關したる取調はおほむね空漠たる推測の說なり。傳說によれば、彼れが受けたる敎育はストラットフォオドなる或學校にての初等の學問に過ぎざりしものゝ如し。同代の劇詩家ベン、ヂョンソンの如きはシェークスピヤを許して「彼れは聊かの羅甸語と尙一段少許の希臘語とを知れるのみとそしりたりき。されど此のベン、ヂョンソンといふは、當代屈指の博學家なりしのみならず、自尊倨傲なりし男なれば、彼れが貶して淺學といひしもの果たして眞に淺學なりしや否や、未だ輕々しく斷ずべからず。最近の考索はむしろシェークスピヤが學識の博大なりしこと、及び其の諸國語に通じたりしことを立證せんとす。通例はシェークスピヤが用ひたる語の數を一萬五千言とすれどホールデンの如きは二萬四千言なりといへり。孰れにしても、ミルトンが用ひたる語數よりも多きこと數千言(ミルトンのは八千言、あるは一萬七千言と稱す)これによりてもシェークスピヤの學識のなみ〳〵ならぬは知らるべし。

彼れは十九歲に滿たざるころ、七歲年上なりしアン、ハサウェイといふ女を娶り、後六ケ月にして一女スーサンナを生ましめき。爾後一二年は、按ふに、ストラットフォオドにとゞまりしならんか。或はいふ、此の間其の父を助けて羊毛商の家業に從事せりきと。彼れが生計上の必要に迫られて、二つには立身の緒(ふとぢ)を得んと欲して、はじめて首都ロンドンに立出でしは、按ふに、一千五百八十五年の頃なるべくや。さて其の最初の間の業務は、梨園に於けるいと卑賤なる職なりきともいひ、俳優の見習

やうのものなりきともいひ傳へたれど、詳かならず、たゞし、其の後數年の間に、彼れが次第に立身して、俳優としても重立ちたる者の中に位し、作者としてもグリーン、マーロー等と拮抗すべき身分となりしことは事實なるが如し。彼れが當時の交遊中にはエッセックス、スサムプトン、ペムブロークなどいふ權門、貴紳もあり、また詩文壇の名家もありき。最近の推定に誤謬なくば、彼れは此等諸交遊に、たとへ尊敬せらるゝには至らざりきとも深く、愛重せられたりしものゝ如し。同輩ベン、ヂョンソンは後に彼れを評していはく「予は彼れを愛し、たりき、而して今も尚彼れを追慕するの念大なり。彼れは實に公明磊落にして、いみじき想像、めでたき思想、溫雅なる詞藻に富めりき。さるからに、其の一瀉千里の筆は、時としてはそを抑制する必要ありし程なり、彼れが機才は實に彼れが命ずるまゝなりき。若し其の機才を規正する力將た其の命ずるまゝなりしならば、いかにめでたかりけん。されど、彼れの妍は其の媸を償ひて餘ありき。云々」と。同代の士おゝ〳〵彼れの聰慧にして溫雅なりしを稱せり、就中、Gentle Shakespeare. といふ稱呼は明かに彼れが性の溫厚閑

一千五百九十三年其の處女作と自稱せる『ヴィナスとアドニス』を出版し、翌年また『リュークリーズ』をいだしき。此の前後に於て彼れが物せし劇詩(脚本)相ついで出て、其の死するに至るまでに作せし數(たしかに彼れが作と考定せられたるものゝみにても)三十有七篇の多きに及びたり。さて、此等著作より得し所の利益は尠少ならざりきとおぼしく、彼れはいつしか數劇部の座主となり、一千五百九十七年には其の故郷ストラットフォオドにてニュープレースといふ莊園を購ひ、後幾ばくもなくして(或は謂ふ一千六百十二年)みづからもそこに移り住みき。其の故郷と家族とにとほざかれりしこと十二年の後なりきといふ。退隱後の生活は甚だ平靜にして多福なりしが如し。一千六百十六年四月二十三日、五十二歳にて逝りき。三子ありき、一男、二女なり。

シェークスピヤが作は、其の存生中に、彼れが許諾を經ずして、幾たびもほしいまゝに出版せられしが、いづれも甚しき錯誤、謬脫に富みて處々殆ど讀むべからず。今日彼れが作として傳はれるは、いづれも此等杜撰の刊行と彼れが死後七年目に出でし有名なるフォリオ版とを參照し、更に諸家の綿密なる校訂を經て成れる者なり。

此の第一フォリオ版は、作者が友人等の編集刊行せしものにて、諸版のうちにて最も信憑すべき者たり。其の後、一千六百三十二年に、其の再版成り(所謂第二のフォリオ)又一千六百六十四年に第三のフォリオ版出で、又一千六百八十五年に第四のフォリオ版出でしが、これらは却りて、種々の點に於て、第一のフォリオ版に劣れりといふ。例へば、第二のフォリオの如きは、生中に臆測の訂正を加へたるが爲に一層の錯亂を釀したり。又第三のフォリオ版には、更に七篇の作を附載したるが、其の中『ペリクリーズ』の幾分を除くの外は、疑ふらくはシェークスピヤの作ならじといふが最近の定説なり。所謂七篇とは『タイルの君ペリクリーズ』『ロンドン奢侈者』『トマスロオド、クロムエルの傳』『サア、ヂョン、オールドカッスルの傳』『清淨敎の寡婦』『ヨォクシャヤ悲劇』『ロクリンの悲劇』なり。さりながら此等諸作の眞僞に就きての説は、今尙一定せず、且つ其の著作せられし年月に關しても異論まち〳〵なり。左に主としてダウデン氏の所見によりて、彼れが著作期の順序を畧説すべし。

シェークスピヤが著作に專念せし年限は、千五百九十年(或は八十八年)より六百十二年に至る二十餘年間なり。而して千六百年以後は、喜劇、史劇の筆を絶ちて、主として悲壯劇の筆を執れりき。其の著作期は大別して前後の二期となすべく、更に再別して四小期となすべし。第一期(千五百九十年——五百九十六年)は所謂修業期、第二期(千五百九十五六年—千六百年或は六百一年)は國史劇と快活なる喜劇とを物せし時也。第三期千六百一年—同八年)は深刻なる喜劇と雄大なる悲劇とを作りし時にして、第四期(千六百八年—同十一二年)は悲喜能く相調和せる傳奇劇を物せし時なり。

第一期は、作者が作劇と云ふ職業を見習はんとて、其の修業場に在りし時にて、はじめてそこに入りしは二十四五の頃なりしならんが、其の進歩は實に驚くべきものあり き。此の期の作は改作、翻案を主とす、概して輕妙を以て勝る。

第一期の作は、作者が未だ世故に慣れざりし時の作なれば、おのづから實際に隔たり、不自然、空想に流れたりしが、第二期に至りては、漸く世故を知り、人情をも知りたるよりして、其の想像も實際的となれり。此の期には專ら史劇を物せり、而して其の經驗の結果は、空想界よりも實際界に幾多劇詩の好材料あることを悟りしものゝ如し。此の期の作はおしなべて雄渾勁拔なり。

第二期の終らんとするころ、シェークスピヤは人生の不幸辛酸を自家の身上に經驗せり、彼れは愛兒を失ひ、且つ父をも失ひ、剩へ、朋友に對しても快らざることありき。此等の事實が多少因緣となりしにや、第三期に至りては、優雅なる戀愛、雄壯なる戰場の有樣などを寫すことをとゞめて、深く人情の根柢を探らんと試みし概あり、表のみきらびやかなる人生の皮相を離れて、其の暗黑なる裏面に徹底し、事物の神髓を研究し、「人間の害惡とは何ぞ」といふ疑問に答へんとせるが如き趣あり。此の期の作は何れも沈痛にして激切なり。

然るに此の沈痛激切の波瀾は第四期に至りて漸く平穩に復し、且つ結びて解け、ざりし陰雲も漸く散じて、再び鮮かなる日光を漏らすに至れり。一度波瀾を經過せし作者が胸宇は、層一層に濶大となり、沈着となりぬ。今や彼れは人生の秘密を感得し、一面は世間と接觸し、一面は世外に超然たり、即ち赫奕たる理想の光明を眺めながら世間と哀歡を共にすることを得たり、然り、理想界の絶頂に立ちて現實海に於ける榮辱の波瀾を靜に瞰せる者の如し。第四期に屬する諸作は旁觀として作者が人生觀を反映す。此等諸作は、人に誨ふるに、堅忍不拔の精神を養うて、心の和平を保持し、他人の過誤は宥恕し、寛容し、己れの過誤は嚴責し、悔悛し、更に圓滿に向うて奮進すべきことを以てす。此の頃のシェークスピヤは宛として其の作『あらし』中のプロスペロ其の人也。當期の作は何れも現世間に不可思議なる活動(天命)の存在することを表示せる趣あり。蓋し、シェークスピヤは、晩年に至りて、思議すべからざる或力の存在して暗に人間を左右することを信ずるに至りたりしか、非か。さて以上の諸作を一括して表となせば左の如し。

劇詩

『タイタス、アンドロニカス』"Titus Andronicus." (一千五百八十八年より同九十年までの間)

『ヘンリ六世』上篇 "Henry VI." 1. (一千五百九十年より同九十三年までの間)

以上を改作時代の作とす。

『ラヴス、レーボアス、ロースト』"Love's Labour's Lost." (一千五百九十年)

『錯誤の喜劇』"Comedy of Errors." (一千五百九十一年)

『エロナの二士』"Two Gentlemen of Verona." (一千五百九十二年より同九十三年までの間)

『眞夏の夜の夢』"Midsummer-night's Dream." (一千五百九十年より同九十四年までの間)

以上を初期の喜劇と稱す。

『ヘンリ六世』中下篇 "Henry VI." 2.3. (一千五百九十一年より同九十六年までの間)

『リチヤード三世』 "Richard III." (一千五百九十三年)

以上を初期の史劇と稱す。

『ロミオとヂユリエット』 "Romeo and Juliet." (一千五百九十一年、或は九十七年同百九十六年より一千五百の間)

之れを初期の悲劇と稱す。

『リチヤード二世』 "Richard II." (一千五百九十四年)

『ヂヨン王』 "King John." (一千五百九十五年)

以上を中年の史劇と稱す。

『ヴエニスの商賈』 "Merchant of Venice." (一千五百九十六年)

之れを中年の喜劇と稱す。

『ヘンリ四世』上下篇 "Henry IV." 1.2. (一千五百九十七年より同九十八年までの間)

『ヘンリ五世』 "Henry V" (一千五百九十九年)

以上を後期の史劇と稱す。

『悍婦ならし』 "Taming of the Shrew." (一千五百九十七年)

『ウインザアのをかしき女房等』 "Merry Wives of Windsor." (一千五百九十八年)

『マツチアツーアベウトナツシング』 "Much Ado about Nothing." (一千五百九十八年)

『アズユーライキイト』 "As You like It." (一千五百九十九年)

『第十二夜』 "Twelfth Night." (一千六百年までの間)

『オールズウエルヂツトエンズウエル』 "All's Well that ends Well." (一千六百一年までの間)

『メヂユアフアアメヂユア』 "Measure for Measure." (一千六百三年)

『トロイラスとクレシダ』 "Troilus and Cressida." (一千六百三年或は一千六百七年或は前)

以上を後期の喜劇と稱す。

『ヂユリヤスシーザア』 "Julius Cæsar." (一千六百一年)

『ハムレツト』 "Hamlet." (一千六百二年)

以上を中年の悲劇と稱す。

『オセロ』 "Othello." (一千六百四年)

『リーヤ王』 "King Lear." (一千六百五年)

『マクベス』 "Macbeth." （一千六百六年）

『アントニーとクレオパトラ』 "Antony and Cleopatra." （一千六百七年）

『コリオレナス』 "Coriolanus." （一千六百八年）

『アセンスのタイモン』 "Timon of Athens." （一千六百七年より一千六百八年までの間）

以上を後期の悲劇とす。

『ペリクリーズ』 "Pericles." （一千六百八年）

『シムベリン』 "Cymbeline." （一千六百九年）

『あらし』 "Tempest." （一千六百十年）

『冬の夜がたり』 "Winter's Tale." （一千六百十年より同十一年までの間）

以上を傳奇劇と稱す。

『ツウ、ノーブル、キンズメン』 "Two Noble Kinsmen." （一千六百十二年）

『ヘンリ八世』 "Henry VIII." （一千六百十二年より同十三年までの間）

以上を斷篇と稱す。

叙事及び抒情の詩

『ヴナスとアドニス』 "Venus and Adonis." （一千五百九十二年？）

『ルークリーズ』 "Lucrese." （一千五百九十二年より同一千五百九十四年までの間）

『短歌集等』 "Sonnets." （一千五百九十五年より同一千六百年までの間）

此の中『ハムレット』『オセロ』『リーヤ王』『マクベス』の四篇を、通例**四大悲劇**と稱し來りたれど、尙別に勘くも十篇ほどは、シェークスピヤの傑作として見るべく、いづれおろかなるは無し、また實に四大悲劇のみにては、此の大詩人の秘蘊を窺ふに足らざるなり。ハドソン氏が嘗て『ハムレット』を評して、最も少く此の書を讀める者、最も多くハムレットを知り得たりと爲すに似たり、といへる直ちに移して廣くシェークスピヤを讀む者の上に適用し得べし、僅に彼れが作の一二を走讀せる者はシェークスピヤ豈知り難からんやといへれど、彌細かに咀嚼せる者は彌其の深邃にして幽微玄妙なるを認め來たる。カーライル曰はく、人十歳にしてシェークスピヤをよろこび、七十歳にしてなほ其の趣味の津々たるをおぼゆと。シェークスピヤの作は、大洋の如くにいと深くしていと廣しかるが故に彼れが壯時の著作たる短歌集の中に取りてそを眞にシェークスピヤが實情の反映なりと假定し、而して彼れを探らん

んと試みたる者、或は曖昧零碎なる口碑に據りて彼れが爲人を推定せんと試みたる者、若しくは自家の管見を彼れが作中に讀みて徒らにおのが影を追求せる者は、皆こと〳〵く失敗せり。シェークスピヤは彼の偏狹なる主觀詩人と同じからず、其の描寫する所は客觀の自然と客觀の人間となり。彼れは自在に自家の理窟を解脱して、無私無我の筆に客觀の諸法相を書きたり。彼れは人世の暗黑なる方面をも、明快なる方面をも、涙をも、笑をも、千差の性情をも、万別の煩惱をも、其の三十餘篇の劇詩中に、殆ど悉く之れを描破し得たるの概あり。シェークスピヤは第二の自然なり、第二の能造なり。

第十章　ベンヂャミン、ヂョンソン

新文明の豫言者と謳歌者——ベン、ヂョンソンの經歷——著作——假面劇——ベン、ヂョンソンの聲價——テーヌのヂョンソン論

新文明は毎に新文學を生ず。詩人は俗に先ちて當代を表白す、是れ其の時に豫言者と名けられ、若しくは能說者（セイヤー）と呼ばるゝ所以なり。而して彼等が當代の理想又は普通思想を表白し盡くしたる時は、概して時勢の一變せんとする時なり、すなはち該文明の窮極期なり。『源氏物語』成りて藤原氏の盛極まり、曲亭みまかりて幕府覺に衰へたるなども、此の例に漏れぬなるべし。此の故に、大詩人の出づるは、或は革命の兆たることあり、大詩人は豫言者即ち時勢の序を作るものか、はた其の跋を緩る者か、未だ容易に斷ずべからざるなり。しかしながら所謂詩人にも大小あり、僅に一代の理想及び觀念の幾分のみを表白する者と、其の全分を表白する者との別あり。前者は十百を以て數ふべく、後者は常に一二にとゞまる。シェークスピヤ、ヂョンソンの如きは後者、マーロー、ウェブスタア、フォード、マッシンヂャア等は前者なり。前者は先唱者にして、後者は連唱者也、其の歌ふ所は同類なれども、一は全分を歌ひ、一は幾分を歌ひ、一は先んじて歌ひ、一は後れて歌ふ、優劣の存する所以なり。ヂョンソンの才分は、もとよりシェークスピヤに比すべくもあらねど、若しエリザベス劇壇に於いて、シェークスピヤの對敵たりしものを求めば、彼れの外にあるべからず。彼のボーモントや、フレッチャアや、巧はすなはち巧なりと雖も、要するに、第二流以下の作家、彼等のシェークスピヤに於けるは出雲、半二等の老近松に於けるが如し、ヂョンソンの巍然として別に一家をなして、シェークスピヤと相對峙せしに似ず。フルラア

肯て此二家を評して曰はく、ヂョンソンは西班牙の大艨艟の如く、シェークスピヤは英國の軍用艦の如しと。彼れは莊嚴仰ぐべく、此れは鬼沒神出、彼れは不動山の如く、此れは變幻自在、殆ど端倪すべからず。

ベンヂャミン、ヂョンソン　は、蘇國ウェストミンスタアの一僧の子にして、一千五百七十三年、父の死後に生まれたりしが、其の母の一煉瓦師に再嫁するに及びて、義父の職を助くるかたはらウェストミンスタアの學校に入りて、しばらく學間を修めたり、されど煉瓦師の業を壓ひて出奔し、兵籍に入り、和蘭地方に從軍して西班牙人と戰ひ、十九歳にして本國に歸り、やがてケムブリッヂの大學に入りぬ。たゞし、同校にとゞまりしは、いと短き程なるべし、何となれば、翌年、すなはち二十歳の時、妻を娶り、ついでロンドンに立ち出でゝ俳優となりきと傳へたれば也。かくて後、また一轉して劇詩の作者となり、或はひとりにて、或は他の作者と共に、劇詩數十篇を綴りたり。其の頃、同輩と口論の末に決鬪して、みづからも傷き敵手をも殺し、これが爲に一時は獄に下されしが、或僧侶の庇蔭によりて赦免せられ、爾後は專ら作劇の事に從へりき。其の名高き作"Every Man in His Humour."(『人さま〳〵の氣質』)は、一千五百九十六年はじめてロンドンにて演ぜられき。此の作、其のはじめは、人物、服裝、景致などはすべて英國のを寫しながら、時と處とは伊太利の事蹟のやうに取りなして作りたり。こは嘲世諷俗の作なるゆゑ、さすがに憚りてしかせしなるが、後には總體の脚色をも英國のことにひきなほせり。ヂョンソンが作は、悲劇、喜劇、あはせて十八篇の外に、間劇(インダールード)、假面劇(マスク)幷びに小品の詩歌あまたあり、總じては五十篇の多きに及べり。正劇のうちにては喜劇は前にいへる"Every Man in His Humour"(『人さまざまの氣質』)"Volpone"又の名『狐』、"The Alchemist"(『鍊金師』)及び"Epicene"又の名『不言女』"The Sad Shepherd"(『沈鬱なる牧夫』)などは、其の錚々たるもの、中にも『人さま〳〵』は最も精妙、『鍊金師』第二に位し、斷篇なれど『牧夫』は第三に位せり。悲劇にては"Catiline"と"Sejanus"と尤も推重せらる。

因にいふ、**假面劇**といへるは、景と樂と歌との混合より成れる一種の劇なり、時としては舞踏をも加へて演せり。こは十四、五、六世紀間に盛んなりし興行物の一種にて、祝賀、祭禮などの場合に行ひしものなり。或は宮中、或は法學院、或は大學などにて、特に演ぜしこともあれば、間、神秘劇、教訓劇などゝ打混じて興行せし

こともあり。やゝ後年にいたりては、皇家、縉紳家の賀席には必ず欠くべからざる要具のやうに成りき、例へば、即位、皇子の誕生、縉紳家の婚禮、外國皇族の來遊等の場合には、屢〻ホワイト、ホール(王宮)の大廣間にて演ぜられ、皇族みづから其の伎にたづさはりしことあり。劇の性質も、其の用も、幾分か我が能に似たる所あり、たゞし正劇にくらぶれば、すべての結構單純なるものにて科介(みぶりとなし)に深き面白味あるにもあらず、作意も大かたは俗にいふ場、受を主とし、又は寓意を專一とし、又は詞句のうつくしきをむねとせり。されば、特に傑れたる作ならぬ限は、觀者の眼に訴ふるを第一とし、衣裝と粧飾との美を競へり。作中にあらはるゝ人物は、多くは希臘、羅馬の神祇、時としては「夜」、「晝」、「美」、「剛毅」などといふ概念を擬人せるものなり。

假面劇が全盛に達せしは、チェームス一世王の朝也、こはヘンリ八世とチャールス一世との間に於ける遊戯最盛の時也。皇后も、親王も、皆みづから演劇しきといふ。祝祭遊戯官(マスター、オフ、リベルス)の報告によれば、王の朝のはじめ六年間に、此の爲めに費されし費額凡そ二万一千〇七十五圓以上なりきといふ。チョンソンは尤も多く假面劇を作り、シェークスピヤには、如何なる故にや、一篇だになし。チョンソンの作は二十三篇に及びき。チョンソンの作せしところにはヂョンス(Inigo Jones)といふもの舞臺の景畫を工夫し、ローズ(Henry Lawes)といふもの其の樂譜を造りき。

さるほどに、梨園詩人としてのチョンソンの名はおひ〳〵に揚がりしが、家族の增加するにつれて、生計はいよ〳〵困難を加へたり。而して其の性倨傲尊大にして、自ら居ること餘りに高かりければ、かりそめにも世に阿り、俗に從ふことを屑とせず、加之、其の博く古文學に通じたるの餘り、動もすれば世の俗作者を眼下に見くだし、甚しく嘲罵し、若しくは其の作中に俚耳に入りがたき高尚なる議論をほのめかして、自家の識見を衒ふの風あり。作者としての彼れが、觀客としての世人を見るや、兎もすれば敎師の學童を見るか如き趣ありき。是れ其の作の俗衆によろこばれざりし一因なるべし。たゞし、これが爲に、當時の學者社會には推重せられ、彼のローリーが創立せし人魚倶樂部(Mermaid Club)といふ文人、吟客の社中に在りては、彼れは常に覇權を握りき。彼れが此の鬪才場の牛耳を取りしは、後年博士チョンソンが十八世紀の文壇に泰斗と仰がれしに似たるものあり。さて一千六百十九年に、

は、時の桂冠詩宗ダンエルに代はりて榮職に就き、名譽一代に冠たり、是れを彼れが最得意の時とす。

彼れは剛愎不遜なりしと同時に、また頗る義俠の心に富めりき。嘗て彼れが補助となりて物せし脚本 "Eastward Ho" といふ作の中に、蘇國人を諷刺せる一節ありしが、其の立作者たりしマーストン及びチャプマンはたちまち官の忌諱に觸れて嚴しき刑罰に處せられんとせり、然るに該一節は主としてヂョンソンの筆せし所なりしかば、いたく二作者の寃を憫み、みづから名宣りいでゝ其の罪に代はらんと乞ひ、幸にして皆恙なくゆるさるゝを得たりき。

ヂョンソンが晩年の不幸困難は其の壯時にもまされり。其の刻苦經營に成りし夥多の草稿は、不慮の火災に燒き失ひ、家計はいよ〳〵不如意となり、妻にも、兒にも後れて、貧困と零落との間に此の世を去りぬ。實に一千六百十八年なりき。かくて「希有のヂョンソン」(Rare Jonson) といふ美名は、死後百餘年間、英の劇詩壇に轟きたりしが、近世シェークスピヤ研究の盛なるに及びて、劇詩の批評法も一變し、時尚も大に移り變りしために、其の名次第に地に墮ちたり。當年のヂョンソンと今日の彼れとは其の位置殆ど雲泥なりとも評すべし。但し、公平にいへば、其の生時にシェークスピヤよりも重ぜられしも失適宜の至りなれど、今日の如く見おとさるゝもまた是れ反動の過大なるものなるべし。左に彼れが特質を窺ふの枝折に、テーヌが月旦の一斑を掲ぐ。

テーヌは、其の『英文學史』なるヂョンソン論の第二章に於て、仔細にヂョンソンが博覽洽學を證論し、彼れは「醇乎たる文海の鯨鯢」なりと評し、且つ曰はく、「彼れは戰鬪に用ひらるゝ東洋の巨象に似たり、櫓を負ひ、武夫を負ひ、戎具、機械を小山の如く背負ひて、毫も重しとする氣色なく、縱横奔放、其の進退の自在なること駿馬の如し」と。こはヂョンソンが其の誇衒的文致ともいふべき莊麗誇大なる詞藻を列ねて、自在に複雜なる性癖を描破せるを評せる也。テーヌはまた彼れが羅甸藝術に精通せる由を叙説したる後、彼れを他の同世詩人に比して曰はく、「他の詩人(エリザ朝の詩人たち)は概して夢想家(空想家)(ゆめのなすと)ともいふべきものなれど、ヂョンソンは殆ど論理家(ロジシャン)とも稱すべし」と。是れ彼れが條理整然たるを評せるなり。ヂョンソンは常に彼の三同(ユニチース)の規則を守りたり、『鍊金師』の如きは其の適例なるが、これ其の同輩のなさゞりし所なり。次い

てまた論じて曰はく「若し彼れを以て、其の脚色と文致とに於て、他の同世詩人に優れる者とせば、他の點に於ては彼れのかた彼等に劣れりとせざるべからず。蓋し、ヂョンソンは個性を創作し得る作家にあらず、彼れは餘り甚しく規律に拘泥し、餘り甚しく理論に偏局せり、即ち彼れは論理家(ロジスト)なり」と。げにやヂョンソンは同感を呼ぶべき引力に乏しく、且つ外形の一致に力を盡したるにも拘らず、全分と部分とを融會して渾然たる一團となすの詩的魔力を缺きたりしなり。又曰はく「人間の性情は複雜多端なり、偏へに相續的にのみ人心の諸成分を觀察する論理家の到底究め得ざる所のものあり。思議するだに已に難し、況んや之れを打して一丸となし、活動せしめ、云爲せしむるとをや。假空の人物を創作して、活動せしめ呼應せしめんとせば、必ずや神來(インスピレーション)を要すべく狂熱(フィーリング)なかるべからず。作家此の二者を兼具すれば、詩思夢裡に動きて、作おのづから成る。而してヂョンソンには此の神來欠け、狂熱欠けたり。彼れは或一概念を捉らへ來たりて、之れを人に擬し、之れに象を與へ、さて種々の名を附するを得しのみ」と。テーヌの說はよくヂョンソンの短所を悉せり。其の觀察の精刻、其の觀念の深邃、其の詞藻の豐富、其の諷刺の犀利など、彼れが長所もまた尠からずと雖も、到底劇詩家といふ資格よりいへば、此の根柢の短を償ふに足らず、彼れが名の近世の劇詩壇に推重せられざるは、ゆゑありといふべし。

第十一章　シェークスピヤ、ヂョンソン以後

第三期の劇詩家――ボーモント及びフレッチャア――トマス、ミッドルトン――ヂョンソン、ウェブスタア――第四期の劇詩家――劇壇の衰微。

ビール、グリーン、マーロー等の輩出せし時代を英國劇の第一期とすれば、シェークスピヤ、ヂョンソン等の出でし時を其の第二期即ち全盛期と名づくべし。さて之れに次ぐ第三期の劇詩家中に於て、特に注意を要すべきは、ボーモント及びフレッチャア、ウェブスタア及びミッドルトンとなす、他は必しも擧示するに足らざらん。此のうち、ミッドルトンは純乎たるエリザ文學の遺脈を持續せる作家なれど、ウェブスタアはおのづから別に一家を成し、又他の二作家は、就中、フレッチャアの如きは、シェークスピヤの衣鉢を傳へたると同時に、一種の新氣脈を代表し、後の諸作家、就中、第四期の作家等の師表たりき。譬へば、我が國の半二、出雲等が巢林子の衣鉢を傳へながら、別に作劇家としての一機軸を出だして戲曲の新形式を定めたるが如し。

さて、此の二作家は常に協力して作せし故に、古來ボーモント、フレッチャアとならべ稱して、都合五十二篇の脚本をば、すべて合作と見做したりしが、最近の考證によれば、最も力を盡くしゝはフレッチャアにしてボーモントは殆どスケたるに過ぎざりしものゝ如し。

ボーモントは其の名をフランシスといひ、リースタアシャヤの生れ(一千五百八十六年)にして裁判官の子なり。オックスフォオド大學にて學を修め、大學を退きて後に程もなくフレッチャアと相知りしものゝ如し。

フレッチャアは名をヂョンと呼び、ロンドンの一監督(ビショップ)の子なり、ケムブリッヂ大學にて教育を受けきといふ。フレッチャアは其の友よりも十歳の兄にして、其の疫病にて逝りしも(一千六百二十五年)ボーモントが死後十年にて、前者は五十未滿、後者は三十に滿たざりしなり。かくボーモントは早世なりしゆゑに、俗に合作と稱せらるゝものゝうちにも、彼れが與らざりしものも多かるべき筈なり。最近の査定によれば、ボーモントはおもに批判家、原按者としてフレッチャアを助けしにて、實際筆を取りしは後者なるべしといふ。而して通例二作家の傑作なりと稱せられたる『處女の悲劇』("The Maid's Tragedy")及び『フィラスタア』("Philaster")の二篇は、明かにボーモントに負ふ所多く、彼のシェークスピヤのフレッチャアと共に作りきといふ晩年の作『ツー、ノーブルキシズメン』の如きも同じく、ボーモントに負ふ所多しといふ。要するに、フレッチャアが筆のボーモントが批判によりて助けられしは少小ならざりきと見えて、其の獨力に成れるもの、若しくはマッシンヂャア、ローリーなどいふ他の作家等と合作せしものを見れば、多少明かなる差等あり。第一、作意、結構の散漫なるのみならず、文辭も句調も、人物の性質も、すべて靈活の妙を減じ、何となく力無げに感ぜらる。又按ふに、フレッチャアはむしろ喜劇の技倆に長じたるも、悲劇の才には乏しかりしに似たり、悲劇の分子は重にボーモントの寄與ならんといふが最近の通說也。

二人の合作に係るものも、道念の調子は總體に低く、彼のマーローの作、若しくはシェークスピヤの作に見るが如き能ふまじきを敢てせんとする偉大壯烈なる性情は殆ど其の影もなく、人物おほかたは平々凡々なり。往々可憐なる女性を描いて人情の秘奥に觸るゝことあれども、到底、第二流以下の作、其の人を感激するの力よりいへば、同代の作家ミッドルトン、ウェブスタアにも及ばざること一等、ましてやシェークスピヤのに比すべからざると勿論なり。フレッチャアの作は人を娛しまするを得

れども、人をして天外に遊神せしむる力なし。かくはいへども、みだりに上にいへる所に泥みて、フレッチャア、ボーモントをいたく見おとし、讀むに足らぬ者と思はんは、猶ほ巢林子の作意のみを愛し、出雲、松洛等の妙所を看過せんが如し。蓋し、フレッチャア、ボーモントは其の學識の上よりいへば、はるかにヂョンソンにも劣りたれど、其の才藻の豐富にして快恬なる變化に富めるは、彼れの遠く及ばざる所なり。取りわけて、セリフの流暢にして解し易き、滑聲諧詼の筆のシェークスピヤに似て圓滑なる、雄大悲壯の人物こそ描かざれ、可憐悲哀の情致を寫すに巧なるなど、間〻シェークスピヤの面影をしのばしむるものあり。只趣向の動もすれば荒唐無稽なる、あまりに着想の奇を求めて殘忍又は不倫に流れたる、其の他おしなべて道念の高からざる等は、あたらしき彼等の瑕疵なれども、こはエリザ朝文學の通病なれば、強ちに咎むるは酷なるべし。彼等の作の重なる者は、前に擧げたる二作の外に "King and No King." "Bonduca," "The Laws of Candy." (以上悲劇)、"The Woman-hater." "The Knight of the Burning Pestle." "Honest Man's Fortune." "The Coxcomb." 及び "Captain" (以上喜劇)あり。これらは皆合作なりと傳ふ。尙フレッチャアの筆に成れる作に、三の悲劇と九の喜

劇とあり。其のうち傑作と見做されたるは "The Chances." "The Spanish Curate." "The Beggar's Bush." 及び "Rule a Wife and have a Wife." 也。

トマス、ミッドルトン は、悲劇作家たるの資格よりいへば、ボーモント、フレッチャアよりも上、或はウェブスターよりも上、大なる逕庭はありながらも、尙最もシェークスピヤに接近せる作家なりとは、通常批評家の許認せる所なり。現にセインツベリ氏の如きは、其の『エリザベス朝文學史』に、彼れが作 "The Changeling." を激賞し、其の全體こそ不完全なれ、其の部分の妙をいへば、ウェブスタアが "The White Devil." "The Duchess of Malfi." とを除き去らば、シェークスピヤ以後の作中、此れにまさらんもの絶えて無かるべしといへり。ミッドルトンはロンドン紳士の子にして一千五百七十年ごろに生まれ、十六世紀の末ごろ專門作家となり、一千六百二十三年、其の作 "The Game of Chess" の故に罪を得、一時獄に下されしが、赦されて後ニューイントンボックに居住し、そこにて同二十七年にみまかりきといふ。

ミッドルトンが作は概して合作になりしもの多ければ、いづれを其の獨特の技倆とも判じがたしと雖も、其の才の頗る多方面にして、喜劇にも、悲劇にも、拙からざりし

はしるけし。但し、其の多數は、いづれも諷刺的喜劇其のうち幾分は地名、人名等を外國に借りてロンドンの風俗を諷刺せるものなるを思へば、彼れはむしろ滑稽詼諧に秀でたりしに似たり。"Blurt Master Constable." "Michaelmas." "A Trick to catch the Old One." "The Family of Love." (清淨教徒の諷刺) "A Mad World, My Master." "No Wit, No Help like a Woman's." "A Chaste Maid in Chiepside." "Anything for a Quiet Life." "More Dissembler besides Women." 此等は皆喜劇なり。もとよりエリザ劇の通弊として是等の作に見ゆる道念は、決して高尚なりとは稱しがたく、趣向、脚色も不自然なる所多く、今日の心をもて見れば、うなづきがたきふしさはなりと雖も、人物はいづれも活動して、卷を終るまでも讀者を倦ましめざる妙あり。而も、ミッドルトンのシェークスピヤ及び他の同代作家に異なれる一點あり、彼れの作にては陋劣卑しむべき人物も、高雅愛すべき人物も、殆ど無差別に作者の筆に飜弄せられ、往々にして惡人のかた全勝を制し、そのまゝ劇の局を結ぶことあり。あらはなる勸善懲惡の旨が必要なるにはあらねど、ミッドルトンが作意の如きは、常識のうなづく能はざる所なれば、讀者は之れを讀了して、兎角に平かなる能はざる感あり。蓋し、彼れが人生に對する觀念の、尙いまだ至らざりしが爲か、將た舞臺上の効果のみを主として其の他を顧るに遑なかりしが爲めか。

ミッドルトンは頗る滑稽に長じたりしと同時に、"The Mayor of Queenborough." 及び "The Changeling." の二篇に於て其の悲劇の技倆をも示せり。彼れは當時の諸作家に均しく、純粹なる悲劇を是ならずとせしゆゑ、此等二脚本を作せし折にも、滑稽劇の作家ローリーと協力し、其の喜劇の部分を綴ることは專らローリーに委ねきといふ。隨うて、悲劇の部分と喜劇の部分とあまりにいちじるく際だち、全體の上よりいへば、所謂最も不具なる圓滿の作となれる趣あり。而も "Changeling" の女主公 Beatrice. 及び其の僕 De Flores. の如きは、沙翁以外稀に見る所の好性格なり、取りわけて、デ、フロールスの性格の如きは第二のイヤゴとも稱しつべし。而して脚色はた頗る複雜、若干の瑕疵を度外に置きていへは、眞に有數の好悲劇なり。其の他『マクベス』と對照して味へば、一種の興味ある "Witch." といふ劇、全體よりいへば "Changeling" にも優れりといふ。"Women Beware Women." といふ作、チャールス、ラム一輩のために激賞せられたりし "A Fair Quarrel." 及び "The Spanish Gipsy." など、皆そが有名の悲劇なり。

案ずるに、ミッドルトンは專ら營業的に作せしがゆゑに、深くは構案に意を留めて、達者を第一となせりしにや、此れ恐らくは彼れの作に瑕疵のいちじるき所以ならんか。前に擧げたる悲劇のうち、若し只些の經營をだに加へしならばシェークスピヤが傑作にも匹敵すべしと思はるゝもの三四あるを、孟浪筆を下し、不注意にかき流したるがため、憾むべき許多の破綻を生ぜり。不注意はミッドルトンが第一の缺點なるべし。然るに、此の缺點なかりしため、嶄然頭角を當時にあらはし、ミッドルトンと相並びてシェークスピヤ以後の稀れ者と稱せられ、バズリットにはnoble mindedとたゝへられ、就中、近世の諸人、批評家、等に頻に推重せらるゝものをチャン、ウェブスタアとなす。

ウェブスタアは、其の生死の年月さへたしかならぬ程なれば、其の傳は知るに由なし。後世は只彼れが十七世紀の間に生活し、重にデッカアと協同して作劇に從事し、遲筆なるを難ぜられし時、ユーリピヂーズの例を引きて自ら回護し、"The White Devil." 及び "The Duchess of Malfi." "The Devil's Law Case." 及び "Appius and Virginia." の四篇に其の獨得の技倆を示し、久しく等閑視せられたりし後、漸く其の價値を認められて、英國劇壇の文學史に其の名を留めたりといふことを知るのみ。さて此の四脚本のうち、末の二作はいふに足らず、前二篇は眞個有數の作なり。就中、"The White Devil." はテーヌ、スヰンバアン、セインツベリ等諸家の驚歎して措かざる所なり。こゝに其の概評をも引抄する能はざれど、女主公ヰットリヤ、コロムボーナ Vittoria Coromboma. の性格の如きは、シェークスピヤを除くの外は、決して描畫し得て斯くの如くなる能はざる所なるべく、而して其の怖ろしさ、凄さなどいふ趣を寫す筆に至りては、たゞちにシェークスピヤに接近せりとも稱へつべし。

さて、第三流以下に至りては、トマス、ヘイウッド Thomas Heywood (?——?) あり、最多作の作家にして、當時に名高かりしもの三十二篇、別に改削補綴の作二百餘種あり。"A Woman Killed with Kindness." "English Traveller." "Lancashire Witches" 等、尤も聞こえたり。チャン、デー John Day(?——?) は "The Parliament Bees." "The Isle of Gulls." "Humour of Breath." 等の作者にして、シリル、ツールナア Cyril Tourneur (?——?) は "The Revenger's Tragedy." "The Atheist's Tragedy." 等の作者。ジョールジ、チャプマン George Chapman (一五五七——一六三四) は第二のマーローとたゝへられし作家、最も著くマ

ーロローの影を現じたるは "The Massacre of Paris." にして、其の他滑稽劇に "May Day." "The Widow's Tears." あり、佛蘭西風の劇に "Busy d' Ambois." "The Tragedy of Charles." 等あり。ヂョン、マーストン John Marston (?——一六三四) は "Antonio and Mellida." "Parasitaster." "A Malcontent" 等の作者、ウィルヤム、ローリー William Rowley (?.——?.) は "A New Wonder." "A Match at Midnight." 等の作者。

尙第四期の作家には、フィリップ、マッシンヂャア Philip Massinger (一五八四——一六三九) あり。 "A New Way te Pay Old Debts." "The Duke of Milan." は其の傑作にして "The Unnatrual Combat." "The Virgin Martyr." "The Roman Actor." 等また名あり。つゞいてはヂョン、フォオド John Ford (一五八六——?) フォオドは一千六百二十九年に其の處女作 "Lover's Melancholy." を公にし、さて五年の後シェークスピヤ以後に於ける史劇の白眉と稱せらるゝ "Perkin Warbeck." を作し、且つ有名なる "Broken Heart." 及び "'Tis Pity She's a Whore." を作りたり。其の他は、"The Lady of Pleasure." "The Traitor." 等を作し、且つ假面劇 "The Grateful Servant." "The Royal Master." などに有名なりしヂェームス、シャアレー James Shirly (一五九四——一六六六) など。第四流以下の小作家及び匿名の作家を擧げ來らば、其の數一百に近かるべく、間々佳き作もなきにあらねど、劇詩の價値は、歳月を追うて次第に下落せしや爭ふべからず。

按ふに劇壇文學漸衰の兆はシェークスピヤの生時にだに已に見えたり。彼のベン、ヂョンソンの如きは、件の端を開けるもの、ヂェームス、シャアレーの如きは實に極衰期の代表者、即ちエリザベス劇の殿たりしものなり。シャアレー以後、劇壇寂として聲なく、梨園は一時閉され了りぬ。蓋し、千六百四十二年以後は兵馬倥偬たる內亂の時代にして、もとより藝術に利ならざりしに、內亂平定後の淸敎徒政府は尤も苛酷なる梨園社會の敵なりしかば、演劇及び興行物は悉く禁止の命を蒙り、俳優、作者等は、爲に糊口の途を失ひ、或は他に職を求め、或は地方に旅興行して、辛うじて一時の飢渴を凌ぎき。然るに同五十六年に、サア、ウィルヤム、デーヴナントが、敢て法令を犯して、首都ロンドンにて其の新作の樂劇 "Siege of Rhodes." といふを興行せしめし以來、劇運やうやく挽回せられ、王政復舊の變ありしと共に時勢全くあらたまり、又も演劇の流行を來たしき。たゞし、デーヴナント以後の劇は、從前のエリザ劇とは、質をも、係脉をも全然殊にしたるものなれば、茲に附記すべき限にあらず。

英文學史上卷終

英文學史中卷

坪内雄藏著

第三篇　内亂時代の文學

第一章　内亂時代の詩歌

文學史上の内亂時代――内亂の眞相――清淨教徒の勝利――其の　果――當代文學の概況――王黨詩人――其の特質――ダヽン、ドーン――ヘック――其の他の詩人

英國の内亂時代とは、政治史に在りては、重に官民大軋轢の世を指せるなれど、英文學變遷の時期を區劃するの便宜上より、こゝには、之れをもて一千六百二十五年より同七百年までを掩ふ稱となせり。何となれば、一千六百二十五年(將軍家光就職

の第三年すなはち寛水二年)は、政治上に於ては、英國内亂の主動者たるチャールス一世王が即位の年、文學上に於ては、エリザ朝最後の名家フランシス、ベーコンが死去の前年、内亂期の大詩人ヂョン、ミルトンが其の處女作を公にせし前年なれば、ほゞエリザベス文學の最終年を以て目すべく、又一千七百年(光圀薨去の年、元和十三年)は即ち十八世紀の第一年にして、十七世紀文學と十八世紀文學との過渡を代表せるジョン、ドライデンが逝去の年なれば、こを十八世紀文學の起頭となさんこと最も適當と信ずればなり。されば、こゝに謂ふ内亂期は、政治上に謂ふ内亂の時代(即ちチャールス一世の朝)を含むのみならず、其の子チャールス二世が佛より歸りて一旦廢せられしスチュアート王統を舊に復せし復位期(レストレーション)、其の弟ヂェームス二世が再び民望を失ひて位を逐はれし第二の革命期(すなはち名譽革命の時代)をも含めり。故にくはしくは、復位期以前の文學は、之れを第一期。即ち正當の内亂時代文學となし、復位期以後のは第二期。即ち復位期文學となづくべきなり。

エリザベス朝の英文學は、前にも已に說ける如く、學藝復興(ルネッサンス)の餘波と擴充膨脹する國家の氣運とが端なくも投合して釀しいだせるにて、一時其盛を極めたりし由は、上に叙說せるが如くなるが、學藝復興熱に伴へりし異教的情想の次第に南方の人心を腐蝕し、流弊漸くいちじるく、教義道德の本源たりし羅馬教會の壞敗するに及びては、宗教大革新の必要歐洲列國民の深く感ずる所となりぬ。かくて偉人ルーテルのいでゝ激しく本山の教會を攻擊し、プロテスタンチズムといふ新基督教を開くに及びて、氣運竟に一變し、エリザベス朝の末ごろまでは歐洲大陸の風潮に常に後れて觸るゝことを例とせし英國すらも、夙く其の波濤に浸さるゝに至りき。所謂内亂時代に一大主動力として活動せし清淨教徒(ピューリタン)の如きは、此の宗教革新の精神を最も鋭く代表せし者の一なり。按ふに、所謂内亂は、一面より觀れば王家と民衆との軋轢なれば、事專ら政治上に關するに似たれど、其の由りて來たる跡を探れば、腐敗せる舊宗教思想及び舊道義思想と新宗教思想及び新道義思想との苦鬪也。之れを内亂の眞相とす。すなはち内亂時代は新道義を代表せし清淨教徒の勢力の殆ど其の頂點に達したりし時、又諸種の舊思想を代表せし皇室及び舊教徒等が之れに對する反抗の其の極度に達したりし時なり。

こゝには政治及び宗教上に於ける此等衝突の巨細を叙說するの遑なしと雖も、一

千六百四十年の官民の軋轢漸く極まり、有名なる長議會(ロングパーリメント)召集せられ、同四十二年に及びては內亂竟に破裂し、砲聲全島を搖かし、翌年に至りては、首府ロンドンは悉皆民黨即ち衆議院の占領する所となり、峻嚴冷酷なる清淨教徒が全勝を占め、こゝにはじめて平素の志を得て全國に法令し、百事を意の儘に處斷しきといはゞ、彼等が蛇蝎の如く忌めりし浮靡の習俗の禁止せられ、就中、敗風の源と認められし諸興行物の停められ、文學、藝術のたぐひまでも惰弱の媒なりとして斥けられ、風流地を拂ひ、詞壇寂寞たりしさま想ひやるに足りぬべし。當時の詩文人たりし者は概して上流の士人なりき、而して上流の士人は多く王權黨なりしが故に、政治上に於ける王權黨の敗績は、文學上に於ける詞客が失意、困窮及び流浪を意味したり。もと彼等は一種の遊民として深く清淨教徒に忌まれたりしかば、官軍一たび挫敗せしや、彼等皆狼狽し、倉皇大纛に尾して地方に逃れき。(當時民黨中には唯一人の詩人ありしのみ、ヂョン、ミルトン是れなり。)後に王政の舊に復せしや彼等また都に歸りて新國文學の前驅となりぬ。此等の詞客を總稱してカロライン、ポーエッツ(チャールス朝の詩人)といふ。

是れより先き、エリザベス朝に盛なりし武俠的(シヴァリック)及び傳奇的(ロマンチック)精神を好尚するの氣風は、女皇崩御の前後より漸く衰微の傾向を生じ世間の實際に關する眞面目なる考察を歡迎するの氣習は日を追うて歩を進めたり、これ尋究思索の風の廣く行はれそめし端緒なり。チャールス一世の父ヂェームス一世の位に在りしや、天下久しく太平にて、商工業も振ひ、內治もほゞ整頓し、人々堵に安ずるを得たりしかば、風俗次第に改まり、荒唐放逸の想像はいよ〳〵減じ、推理の能力と實際に關する考察とは優勝者の資格としてもてはやされ、詩歌はます〳〵衰へたり。內亂の主動者たりしチャールス一世は、頗る風雅の資に富めりし故、流石に上流の社會には詩文の命脈も繫がれたりしが、それだに大かたは詞花言葉の歌人にて、(カロライン、ポーエッツ)の名こそ今も尙傳はりたれ、要するに『新古今』以後の作家などに比すべく、『万葉』の質樸、エリザ朝の情熱には比ぶべくもあらず。かくて共和政治となり、クロムエルの保護職時代となりては、詩歌は殆ど地に墮ち、チャールス二世の世に又やうやく蘇りつれど、これはた浮靡纖弱の作のみ多く、バトラア、ドライデン二三家の外は殆ど取りいていふに足らず。其內獨り卓然として衆詩人と光彩を異にし、眞個燕群中の

鸞鳳たりし者は民黨の大詩人ヂョン、ミルトンあるのみ。ミルトンの事は別にいはん、こゝには內亂時代第一期に於る詞花言葉の片影ばかりをうかがふべし。

放縱なる想像と自在なる創才とを以て勝りたりしエリザベス朝の詩人に代はりし紳士的詩人の一團をば「カロライン、ポーエッツ」と呼び習はせるは、其の多數がチャールス一世王即位のころに世にいで、其の子チャールス二世の朝に榮え、其の弟ヂェームス二世の世に衰滅せしがゆゑなり。或は此の派を呼びて「メタフィジカル、スクール」(形而上派)とも呼べるは、博士ヂョンソンが杜撰の稱呼にして「ファンタスチカル、スクール」(空想派)と綽號せるは寧ろ彼等を貶したるなり。彼等は一方に於てはエリザ朝美文學の殿となり、他方に於ては十八世紀美文學の前驅となれり。彼等は情熱の詩人といはんよりも寧ろ考察の作家といふべく、感興の詩人といはんよりも寧ろ理窟の作家といふべき者なり。此の派の勢力は一千六百年よりはじめて餘勢同七百年にわたり、所謂擬古文學の俑は作られたり。彼等みづからは稱してベン、ヂョンソンの兒といへりしかど、まことは當時の名家ヂョン、ドーンに負ふ所尤も多し。而してトマス、アーノルドの說によれば、ドーンの詩風は伊太利ネープルスの作家マリニーといふに起源せりといふ。マリニー(一千五百六十九年生同六百二十五年死)は伊太利に於ける當時の擬古文學に飽きて別に一生面を開きし者にて、其の特質は辭藻の巧緻にして新奇なるにあり、而して其の過巧の比喩、綺靡纖麗の形容は端なくも擬古文學の爛熟に倦める時好に投じて、一時大に名を成しにき。マリニーは後に佛國に遊びて、かしこの詞壇にも尠なからぬ影響を及ぼし、やがてその餘波を英國にも傳へき。ミルトンの如き大器こそ此の狂波に卷かれざりけれ、溺れざりし者はいと稀なりき。ドーン、カウレー。クラッショー。ウォーラア。クリヴランド等皆然り。彼のドライデンの如きすら、最初は此の流に身を投じて、專ら不自然の落想(Conceits)をよろこび、彫蟲これ力め、質樸なる感情、おのづからなる想像は詩歌には妙ならずとて棄てにき。

ヂョン、ドーン(一五七三?——一六三一)は英國にて此の派の開祖にしてセント、ポール院の敎頭職を務め、十七世紀のなかばには其の名詞壇に轟きたりし作者なり。其の作いとおびたゞしく、尤も諷刺詩に長じたりと稱せらる。戀歌の作家としては所謂空想派の率先者にして、情を主とせずして考察を主とし、只管落想の新奇な

らんとを力めたり。こはカロライン、ボーエッの大部分を掩ふべき特質にして、比喩動もすれば巧に過ぎて意をそこなへるもの屢〻あり　ショーは其の『英文學史』に彼等の落想の過巧なるを笑ひて姿勢の師又は手品師のわざくれに似たりといへり。此の派の開祖たるドーンが名作のうちにだに、下に掲ぐるが如き笑ふべき文字あり、他は推して知るべきのみ。

"There note they the slip's sickness,—the mast
Shaked with ague and the hold and waist
With a salt dropsy clogged."

船の難に臨めるを病に喩へたる、まづをかしきに、帆檣のゆらめくをわらはやみとは苦しからずや。又「斷腸」とふ題にて情郎がいたく悲しみて情婦の居間に走り入りし時の言葉に

Love, alas!
At one first blow did shiver it (*heart*) as glass.
Yet nothing can nothing fall,
Nor any place be empty quite:

Therefore I think my breast hath all
Those pieces still, though they do not unite;
And now, as broken glasses shew
A hundred lesser faces, so
My rags of heart can like, wish, and adore,
But after one such love can love no more.

腸ちぎるゝ苦しみを玻璃の碎けたるに喩へたるだに純然たる滑馨の文字なるに、理窟づくめに怨じたる口吻は宛然として喜劇の人物の白なり。短所を擧ぐればおほむねかくの如し、されど其の作の妙なるものに至りてはミルトンが小品に比して遜色なき者あり、否、往々にして彼れを凌ぐに足る句ども多し。

ロバアト、ヘリック(一五九一——一六七四)なるべし。ドーンに續いて傑出せるはロンドンの人にして、ケムブリッヂの出身なり。壯時の作は全く見るに堪へざれど、晩年世に出だゝ詩集"Hesperides"及び"Noble Numbers"等の如きは風調の秀てたるを以て聞ゆ。但し、其の詩歌は光彩餘ありて情熱足らず、奇想溢れて風趣に乏しきの通弊を脱する能はざりき。

トマス、カリュー(一五八七——一六三九)リチャード、クラッショー(一六一三?——五〇)之れに次ぐ。其の他 George Herbert (一五九三——一六三三) Henry Baughan (一六二二——一六九三) Richard Lovelace (一六一八——五〇) John Suckling (一六〇八——四二) Francis Quarles (一五九二——一六四四) Henry More (一六一四——八七) Joseph Beaumont (一六一六——九九) William Habington (一六〇五——四五)等皆當代の詞才たり。

尚ほ其の他、ミルトン以外の民黨詩人たりし George Wither (一五八八——一六六七)牧歌に名ありし William Brown (一五九〇——一六五〇?)、官民兩黨の間に漂へりし Edmund Waller (一六〇五——八七)、第十三章に既に一度紹介せる劇道中興の作家 William Davenant、地方の風景を歌ひて風土歌(トポグラフィック、ポーエトリー)の端を發きし Sir John Denham (一六一五——六八)、十六歳にして長篇の詩を作し神童の稱ありし Abraham Cowley (一六一八——六七)等は、いづれも此の派の名家にして「英文學史の秋(オートム)」と謳らるゝ內亂期の野邊の千草、春花爛漫たるエリザベス盛朝より霜葉錦を懸くるミルトンに遷る中間期の眺め、まかすがに棄てがたき趣致無きにしもあらず。

第二章　ヂョン、ミルトン

生涯——第一期——『コーマス』——其の梗概——ミルトンの特質——第二期——時の政治界及び宗教界——三大自由論——アリオパジチカ——第三期——『失樂園』其の梗概——其の他の著作——諸家のミルトン論

ヂョン、ミルトンは內亂期に於ける五大文星の隨一なり。しかも他の四星はすべて散文壇の將星にして韻語に不朽の名を傳へたる此の大詩人に劣ること幾等なり。他の四文星とは、史家としてのクラレンドン、論客としてのヂェレミー、テイロア、思索家としてのホッブズ、文章家としてのブラウンをいふ。

ヂョン、ミルトンは一千六百〇八年十二月九日、ロンドンに生まれき(時に我が朝後陽成天皇の慶長十三年、中江藤樹の生誕と同年なり。)其の父の名もヂョンと呼びて、熱心なる民權黨にしてまた眞摯なる新敎の信者なりき。ヂョンは此の謹嚴沈毅なる父の薫陶に人となりて、夙くセント、ポール學校に業を受け、ケムブリッヂ大學に移りし前に、希臘羅甸の古學を修め、佛語、ヒブルー語、伊太利語等をも學び、さて千六百三十二年にはケムブリッヂ大學を卒業し「マスタァ」の學位を得て(齡二十五歳の時)ホオトン村なる父の家に歸りぬ。在學中に物せし短詩すべて十一篇あり、其のうち尤も聞こえたるは『基督の誕辰』といふ小品なり。ホオトンに在りし間に七

篇の作あり、就中、名高きもの五、曰はく『ラレグロ』、曰はく『イルペンセロソ』、曰はく『アーカヂーズ』、曰はく『コーマス』、曰はく『リシダス』。

ミルトンの生涯は明かに三期に分かつを得べし。第一期は修錬の期にして即ち生誕より一千六百三十八年伊太利漫遊まで、第二期は政治的生活の期即ち一千六百三十八年より同六十年復位(レストレーション)までなり。散文の著作は皆此間に成れり。さて第三期は純然たる詩人的生活の時代にして、こは一千六百六十年より其の易簀まてなり。『失樂園』、『復樂園』、『サムソン、アゴニステス』の三大篇は此の際に成れり。第一期の作の聞こえたるは總べてホオトン在住中の作、即ち前に擧げたる五篇なり、其のうち最も傑出せる作は『コーマス』と題せる假面劇の臺本なり。こは詩としての價値よりいへばミルトンが一代の傑作なるべし、彼の「不具の圓滿」と稱せられたる大叙事詩『失樂園』に勝ること一等なり。『コーマス』は時の縉紳ブリッヂヲーター公の需によりて一盛宴の興を幇けん爲に物したるなれど、エリザ朝以後十九世紀以前に決して見るべからざる絶唱なり。其の筋の略をいはんに

一人の貴女か端無く其の弟等を途中にて見失ひ、覺束なくもさまよふところへ、覺神コーマス牧羊者の姿に變じて出現し、言葉を巧にして乙女を妖魔窟に誘ひ、妖術を以て其の五躰を縛し、其の慾を遂げんとて且つおどしすかして魔酒を飲ませんとす。乙女心清きこと雪の如く、操固きこと鐵の如し、コーマスを罵りて「よし我がうつゝ身をば汝能く縛すとも、我が心の自由をば汝爭でかほしいまゝになしえん」といふ。コーマスなほ懲りずまに嫌し拵へ強ひて魔酒を飲ませんとす、折から二人の弟牧羊者の姿したる精霊(すだま)に誨へられて馳せ來り、劍を揮ひてコーマスを走らす。しかるに乙女は妖術に縛せられて動くことを得ず、兄弟そを解かんとて女神の救を求む。女神すなはち現れて乙女の縛を解く。

さて精霊(すだま)の歌ふ歌をもて全篇の局を結べり。其の最後の六句は

我れに隨はんと欲するうつゝ世の人は美德を愛せよ、ひとり美德のみぞ自由なる。美德は汝に教ふるにいかにせば人界よりも高きところに上るべきかを以てす、美德或はかよわくてえ上らずば天降り來て美德に臨まん。

といふ意味にて、世に聞こえたる名句なり。

此の『コーマス』中の乙女は、疑ひもなく清淨の權化にして、コーマスは情慾即ち誘惑の權化なり、而して二人の兄弟は清淨の美德に伴ふ幇助力をかたどり、女神と精霊とは此の幇助力をして有効ならしむべき神力を表したり。ダウデン氏は『コーマ

ス』の淑女を評して曰ふ

シェークスピヤは、其の作の初期にありては、好みてロザリンド。ビヤトリス。ポオシヤの如き人物を寫したり。此等は其のイモーゼン。デスデモーナ等よりも更に強きと同時に更に弱き人物なり。更に強きは一層智力に富める女性なればなり、更に弱きは一層不調和の女性なればなり。（中略）。ミルトンが詩中の少女が有せる弱點の幾分は、多年他力の保護の下にいたいけに育てられて美しくかよわき身躰をもてりといふ點にあり、されど一たび難に當たる時となれば、判斷力にも理性にも富み、總て精神堅固、道念確實にして、罪業を惡むこと蛇蝎の如き性をあらはせり。（中畧）。蓋し、此の少女は壯時のミルトン其の人、「大學の佳人」たりしミルトン其の人に似たるところ多し。

云々と。按ふに、ミルトンは深くスペンサアに私淑したりき。さればテーヌは評して曰はく

道念の清高なる、文致の富麗なる、武俠的情操の氣高く見れたる、古文學的結構の精美なる、ミルトンとスペンサアとは兄弟なり、されどミルトンはスペンサアの外にボーモントフレッチャア。バアトン。ドラモンド。ベン、ヂョンソン。ジェークスピヤ等、所謂復興期の華美絢爛なる全文學を師とし、之れに加ふるに伊太利の詩歌、羅甸の古文學、美なる希臘文學乃至英國的學藝復興を產み出だしゝ一切の源力をも師としたり。

と。さりながら、彼れの此等諸文學を咀嚼せしや、其の意每に温故知新にありき。

彼れは神を取りて貌を取らず、他の物を化して我が物となしき。ガーネット氏は曰はく

ミルトンが壯時の作と他の英國第一流の詩人のとを比ぶるに、其の純正なることは前者却りて後者に優れり。蓋し、異常なる神來の情に加ふるに强固なる意志ありて輕率浮薄を制したればなるべし。さればワオヅヂオスも、コールリッヂも、バイロンも、シェリーも、キーツも、テニソンも、後年に其の壯時の作を見ては多少恒惋たらざるはなかりしに、ミルトンのみは毫もさる事なかりき。彼れの作は、その英詩なると羅典詩なるとを問はず、多くは或外來の刺激に由りて成れり。『コーマス』の恩人の懇望によりて、『リシダス』の友人の死によりて成れるが如き、是れなり。たゞし『ラレグロ』と『イルペンセロソ』とは內部の感動より成れりと見ゆ、而も尙細査せば、恐らくは然らざるを發見せんか。バイロン。シェリー。テニソン等は絕えず筆を執る、彼等の經營の苦心はいかばかりなりとも、其の作せんとする內存の刺激はいと〳〵鈍し。彼れはひたすら攻究研鑽を事とし、譬へば祭壇の上に薪を積みて、いざと言はゞいつにても天より靈火を呼び下し得べき力を有すと自信したりしものゝ如し。

ミルトンが謹嚴持重なりしは、嘗て其の友ヂヲダチーに語りし語にあるけし、曰はく

予は我が翼を長ぜしめて翱翔せんの準備をなしつゝあり、されど我がペガサス(詩神の乘りたる天馬にて兩翼を有し能く空中を翔る、詩才の謂なり)は未だ高く天空を翱翔するに足るほどの羽毛を具せず。

と。彼れは嗚嗟の感動によりて、不自覺に詩を賦し、文を成すものにあらず、否、飽くまでも其の思へるところ、言はんとするところを自覺せりき。ガーネット氏が「內存の刺激より成れるもの」無しといへるは此の故なり。ダウデン氏曰はく

ミルトンは決して鳥の歌ふが如く、智の認めざる又は化成せざる刺激によりて自在隨意なる快樂をもて歌へることなし。各篇の主意は明に彼れみづからが工夫したるものなり。而して其の形式は云々の結果を生ぜしめんと自覺して刻苦經營せし所なり。

と。テーヌ曰はく「ミルトンは一時の刺激によりては作せず、單に事物と相觸れしのみにては作せず、あらず、學者らしく、古文學家らしく、總じて學者らしく筆を取りき」と。『ラレグロ』『イルペンセロソ』、『コーマス』、『リシダス』いづれもかくの如くして作られき。

ミルトンはホオトンに在りし頃より伊太利漫遊の希望ありしも、兩親許さゞりしかば果たさゞりしが、母は疫病にて逝り、老ミルトンは次子クリストファアの許に寄寓するに至りしかば、ミルトン之れを機として漫遊の素志を達せんと欲し、一千六百三十八年、齡三十一歲の時、竟に伊太利への旅途に上りぬ。これを第一期の生涯の終りとす。

かくて佛を經て伊に入り、羅馬に遊び、かしこにて其の文物典章を探り、多くの名士學者と會談し、滯在二ヶ月の後テーブルスに遊び、尙シヽリー、希臘等を歷遊せんと企てし折しも、本國より王と議院との軋轢いよ〳〵劇を加へ、國事日に非なりといふ飛報ありしかば、感ずる所ありて、奮然本國へ踵を返しぬ。

當時英國の宗敎に二あり、一は國敎にして監督敎會(エピスコペリアン、チャチ)と稱し、上に國王を奉じ監督(ビショップ)を戴けり。他は監督制度を非とし國王を戴くを欲せざる者、所謂清淨敎徒(ピューリタン)是れなり。國敎に在りては國王は宗敎上の君主をも兼ね、諸監督はそが大臣たるに外ならず。清淨敎徒は常に自由を重んぜり、隨うて國王乃至監督の爲に制せらるゝを好まず、其の行狀將た質素廉潔、他の驕奢を喜び道義を重ぜざるに比して表裏黑白の差あり、こゝをもて兩者の相容れざること水火の如し。而して國敎は王權を藉りて清淨敎徒を虐待し、その宗旨上の自由を妨ぐること甚し。ミルトンが歸國後の努力は主

として此の弊を斷除せんとするにありき。以爲へらく、個人が社會の一員として幸福を保有せんとするには其の要素三あり、曰はく宗教の自由、曰はく家庭の自由、曰はく自主の權是れなりと。其の中家庭の自由中には婚姻、教育及び言論の自由、此の三問題を含めりき、之れをミルトンの三大自由論となす。

ミルトンが歸國後の第一著は "Reformation in England"（『英國に於ける宗教革新』）なり、國教の非を鳴らして監督制度を痛擊せる者なり。さて之れについては "Of Prelatical Episcopacy", "Reasons of Church Government urged against Episcopacy" 及び "An Apology for Smectymnus" 等の著ありき。いづれも皆監督制度の攻擊なり。

"Smectymnus" とはミルトンを助けて論戰せし清教の教師 Stephen Marchall, Edward Calan, Thomas Young, Matthew Newcomé, 及び William (Tuilliam) Spentow 五人の姓名の頭文字を集めて造りたる語なり。

一千六百四十四年ミルトン歳三十六にして初めて妻を迎ふ、然れども不幸にして琴瑟和合せず、風波ふば〳〵揚り、竟にミルトンをして『離婚論』數篇を草せしむるに至りき。

結婚後の著書は『離婚論』の外に其の散文中の傑作たる『アリオパジチカ』（一千六百四十五年出版）あり、出版の自由を論じて時の議院に獻言せしものなり。又一千六百四十四年に出版せし『教育論』あり、當時の小學校並びに大學校に行はれたり し制度を全廢して智力と體力と兼具せしむべき方法を議したるものなり。晩年に出版せし『英國史』の如きも當時既に起稿せりきといふ。

一千六百四十五年チースビーの一戰にてチャールス王はクロムエルの爲に大敗して蘇國に遁走せしが、蘇人は直ちに王を捕へて英の議院に送りこしぬ。之れより評議數回の後、王と議院との間に和議殆ど成らんとせしかば、クロムエル黨は大に驚き、急に議院に臨みて武力を以て反對黨を院外に逐ひ、自黨の議員中より委員を選定して王を審判し、叛逆の罪名を以てして王に死刑を宣告す、時に一千六百四十九年一月なりき。さるほどに非難の聲八方に起こり、國中擾々として沸鼎の如し、此の擾亂の中にクロムエルはミルトンを擧げて秘書官となし、年俸二百九十磅を與へき。時に一千六百四十九年三月十五日なり。蓋し、當時外交書類はいづれも羅甸文を用ふるの規定なりしかば、ミルトンこそいとよく此の任に適せしなれ。

ミルトンは之れより全力を傾けてクロムエルの共和政治を助け、國威を海外に輝

かさんと力めき。

共和政府が王に對する措置を難ずる者いよ〳〵多きに際して、遂に"Eikōn Basilike"(『王の肖像』)といふ書出でたり。こは口を極めて帝王の神聖を說ける者にて、或は博士ゴーデンの筆に成りきともいひ、或は又チャールス王の遺稿なりとも噂せりき。ミルトンすなはち"Eiconoclastes"(イメーヂ・ブレーカー)『破像者』を著して故王が違憲の罪を數へ、議院の處置の正當なる由を痛論せり。ついで當時の碩學サルメーシヤスとの論戰あり、"Defensio Regia"に答へたる長編"Defensio pro Populo Angliceno"こは敢をして氣死せしめ、作者をして明を失はしめしもの也。

これより先き、ミルトン視力次第に衰へ、既に其の片眼を失へりしが一千六百五十二年には兩眼共に盲せんとせりき、されども尙屆せずして『英國史』の稿を繼ぎ、『羅甸辭書』の稿を起し、且つ數種の政論をも物しき。就中、有名なるを"Ready and Easy Way to Establish a Free Commonwealth"(一千六百五十九年出版)とす。其の散文の著は此に略〻終結を告げぬ。『散文全集』三卷は其の死後に世に出でき。件の散文の諸著の頗るよく彼れが外部生活の狀態を表現せるは、猶其の詩篇の頗るよく其の內

面生活の狀態を表現せるが如し。以上をミルトンが第二期の生涯とす。

當時ミルトンの光譽は赫々として太陽の天に冲するが如く、其の文名海外に聞こえて、思索家ミルトンは實行家クロムエルと共に英國人の兩代表として敬重せられき。さるほどにクロムエルは漸く民望を失ひ、一千六百五十八年九月「共和政府に饗きはてつ」とこゝかしこに叫ぶ國民の聲をきゝながら「我が事終はんぬ」といふ歎息の一語を遺して易簀するや、ミルトンは猶魚の水に離れたるが如く、今は共に圖るべき知音なければ、潔く世界を厭離せんと決心せり。兎角するうちに、一千六百六十年三月チャールス二世王佛國より來たりて王位を襲ぎ、所謂王政復舊成りぬ。ミルトンすなはち退隱して久しく遠ざかりし詩神を役し、徐に其の大作『失樂園』の結構に心を傾けき。

ミルトンが晩年の生活はテーヌの評論に其の要を悉せり、曰はく

> ミルトンは毅然として淸淨なる一生を終へき。彼れの我强くして執拗なるや、如何なる經驗にも教へらるゝことなく、如何なる不幸にも挫折せざりき。彼れは何事をも能く忍び、殆ど何事をも悔まざりき。其の明を失ひしが如きも、意識して自ら招きしなり。其の晩年には不幸身邊にむらがり來たりぬ。彼れは共和政府の葬儀をも、自己の學說

の折伏なも、自己の名譽の汚辱なも、悉く之れを目擊しき。彼れの周圍には自由を惡み、束縛を喜べる無智の暴民等狂奔せり。全國民は無能不信なる若き遊蕩漢(チャールス二世)の足下に身を投ゝて、恥づべき敬禮を行へり。清淨宗の榮譽ある主導者は陸續罪を得て宣告せられ、斷頭臺上に頭を失ひ、若しくは甚しく凌辱せられき。僅たま〳〵さきだちて病死せりしものも、墳墓を發かれて死後に辱を暴し、若しくは外邦に放涙して屢〻王黨に迫害せられき。勢ひかくの如くなりしかば、或は金錢の爲に操を賣り、或は爵位の爲に主義を賣り、恬として王黨の味方となり、舊友を虐して顧ざるものありき。要するに、英國の最も敬虔にして嚴格なる市民は、多くは獄裏の人となり、然らざれは零落と屈辱との中に淺ましき最後を遂げにき。而してひとり邪惡のみは青天白晝に横行して其の時を得たるを誇りぬ。かゝりしかば、ミルトンの如きも、勢ひ安穩なる能はざりき。其の著書は獄丁の爲に燒かれ、身もまたほと〳〵危かりき。而して彼れが不幸はひとり政治上にのみとゞまらず、家庭其の他の小不幸、陸續身邊に蝟集し來たりぬ。政府の爲に家產を沒收せられしに次いで、彼れが關係せりし銀行の分散あり、之れに次ぐに、倫敦の大火災ありて、彼れが財產の四分の三は爲に灰燼となり果てにき。加ふるに、其の女等彼れに對して毫も孝子たるの分を盡さず、家庭の悅樂は絕無なりき。而もミルトンの剛毅なる、かゝる大不幸の中に立ちて終始凜として動ずる色なく、依然として自若たりき、云々。

かくて遂に一千六百七十四年十一月(我が靈元天皇の延寶四年、松尾芭蕉の入寂前二十年)に痛風の爲に逝りしまでを其の第三期の生涯とす、而もまた取りいでゝいふべき事もなし、只省くべからざるは其の大著『失樂園』を作せんと發企せしは、其の大成に先だつこと遠ミルトンが其の大著『失樂園』を作せんと發企せしは、其の大成に先だつこと遠く二十五年の前にありき。其の齡三十二の時、彼れ伊太利より歸る、思へらく、願はくは古今有數の大作をものして詩名を万代に傳へん、而してそは英詩なるべく、躰は叙事詩なるべく、題目はブリトン史中の古談より擇ぶべしと。既にして寧ろ劇詩躰にものせんかと思ひ惑ひて、種々に腹案を試みにき。されば一千六百四十年より四十一二年に至るまでに、其の略案を手記せるもの都合四種に及べり。第一と第二とは單に詩中にあらはるべき人物の名を記せるに過ぎず、而して其の中にはマイケール、ルシファー、アダム、イヴ、惡蛇、良心、死、勞役、病苦、不滿、無知、信仰、希望、純潔等の名見えたり。第三に至りては明かに『失樂園』と題し、全篇を六齣に分かちて一々其の粗筋を記し、さて第四に至りては齣を分たざるも尙一層詳細に筋立、主意等を明記せり。然るに恰も此の粗筋の成りける頃より、身を政界に投ぜしかば、凡そ十有餘年の間其のまゝに打過ぎしが、後再び機會を得てこれに從事するにおよびて

は劇詩躰は再變して敘事詩躰となり、ルシファ、はセータンと改まり、其の他筋立にも多くの變更を見るに至りき。

『失樂園』は英國詩壇に理想詩の一大代表として崇高の名を擅にす、ダンテの『デヰナ、コメヂヤ』と相照して讀まん者は其の國民性と作家の特質と時勢の感化との如何に詩材に影響すること大なるかを味ふを得ん。左に其の梗概を掲げて、其の旨意の影ばかりを髣髴せしむべし。

(第一卷) 先づ人の祖が不順の罪によりて樂園を失へることを簡叙し、次に天上より放逐せられたる惡魔セータン及び之れに隷屬せる衆魔の事、彼等が會議を開きて地球の創造及び無我無欲なる人間の始祖(即ちアダム、イヴ)に對する上帝の計畫を妨げんと議する事、並びにセータンが宮殿パンデモニヤム(衆魔殿)建設の事等を叙したり。

(第二卷) 衆魔會にては異議紛出して決せず、セータン遂にみづから人間を誘惑するの任に當たり、飛行して地獄門に到る、こゝには「罪」及び「死」といふ兩兇堅固に門を守り居れり、然るに「罪」といふ妖婦は曾て天上にありてセータンに通じ、且つ其の惡計に與せしものなれば、門を開きてつひにセータンを通行せしむ。

(第三卷) 神父(即ち上帝)と神子(即ち救世主)との對談、神は豫めアダムが墮落すべきを知り、神子みづから任じて善後策を講ぜんとす、セータン太陽の使者ユーリエルに逢ひて新世界への路筋を問ひ、委ね天使にやつして進み上る。

(第四卷) セータン遂に樂園に入る事、アダム、イヴが清淨多福なる生活の事、天使の常に樂園を守護する事、セータン夢魔となりてイヴの耳に潜み、我が思ふまゝの誘惑を行はんとして天使に捕へらるゝ事、されど再び逃走する事。

(第五卷) イヴ、アダムに凶夢を告ぐ、アダム之れを慰め、朝の禱を終へて夫婦いつもの職業に從ふ、その時天使ラフアエル來降して彼等に忠告し、且つアダムにセータンが背叛の事、多くの天使の彼れと共に墮落せし事等を告ぐ。

(第六卷) ラフアエル前語をつぎて諸天使と魔軍とが激戰の事、初は天兵一軍に勝ちしも、後魔軍の作りたる戰器の爲に敗走せし事、神子遂に天父の命を受けて一戰の下に魔軍を平げ、天父の許に凱旋せし事等を語る。

(第七卷) ラフアエル、アダムの乞によりて、上帝が如何にして又何の爲に此の世界を作りたまひしか、即ちセータン及び一味の天使等を放逐して後更に一新世界を作り、他の生類を住ませて慰樂したまはんとて、神子及び多くの天使に命じて、一週日の中に其の業を終へたまひし事を語る。

(第八卷) アダム更にラフアエルにつきて、天使が飛行自在の動作を疑ひ問ふ、ラフアエル明かに答へず、更に有益なる事を問ふべしと誡む、アダムこれに服し、尚もラフアエルを引き止めんとして、己が身の上を語る、即ちはじめて樂園に其の身を置かれし事、上帝と對話せし事、初めてイヴと相見し事等を語る、ラフアエル之れを聞きはてゝ、尚も規誡し

て秩を分つ。

（第九卷）セータン眠れる蛇の身に其の靈を託して機をうかゞふ、アダムはイヴと共に例の如く勞役につかんとするに、イヴは相離れて業を執らんとを乞ふ、アダムはラファエルの忠告を思ひ出だし、暫しにても夫と相離るゝは危險なりと說けども、イヴ固く乞うて止まず、アダム止むとを得ずこれを許す、セータン機を得てイヴに近き、百方誘惑して夫婦をして上帝が嚴禁せる智慧の果（このみ）を食はしめんとす、イヴは其の夫をもすゝめて同じく「智慧の果」を食はしむ、是れより夫婦は其の裸躰を耻づるの念を生じ、層々墮落の罪を重ね、夫婦相責めて止む時なし。

（第十卷）天使樂園の守護を止む、天帝神子を下して、夫婦が破戒の罪を修めしめたまふ、神子二人を愍みて、之に衣服を與ふ、セータン、パンデモニアム宮に歸り、眷族を集めて其の成功を誇るうち、惡業の報により忽然衆と共に蛇に化す、「罪」と「死」との身の果、アダム、イヴ遂に其の罪を悔い、天帝に敎免を乞はんと決す。

（第十一卷）上帝は人間の祖先が始めての祈禱を受け納れさせたまひしも、最早樂園の生活を許したまはず、天使マイケールに命じて樂園を奪はしめ、且つアダムに未來の事を示現せしむ、天使アダムに命を傳へ、且つ高丘に誘ふて、大洪水以前に起るべき人間の運命を指示す。

（第十二卷）マイケールが豫言のつゞき、大洪水以後の人間の運命を指示す、アダムは人間の遂に償還回復の途あるに滿足し、高丘を下りて眠れる妻を呼び起こし、手を携へて悄然樂園を去る。

『失樂園』の出版せられ、一冊綴、三シリングの書冊となりて世に出でしは、一千六百六十七年なり。『失樂園』の出版につきて書肆某とミルトンとの契約に據れば、ミルトンは最初にまづ五磅を受領し、次に第一版一千三百部を賣り盡したらんとき更に五磅を受くべく、第二版、第三版各〻一千三百部を賣り盡したらん時に同じく五磅づゝを受くべき筈なりしが、僅かに其の半額を得しのみにて世を辭し、未亡人後に八磅にて『失樂園』の版權を賣り渡しければ、世界屈指の大作も通計十八磅の報酬を得しに過ぎざりき。之れを後年マコーレーが『英國史』を著して十万弗を得たりしに比すれば、その所得の差大ならずや。

『失樂園』につぎて『復樂園』の四卷の作ありき。三十歳の時の基督を以て主人公となし、千種万類の誘惑に逢ふも毅然として動かざる大剛毅を叙したるものにて、惡の遂に善に敵すべからざるを示せり。『失樂園』と引き離しがたき著作なり、一千六百七十一年出版。

『サムソン、アゴニステス』も亦同年の作なり。理想劇にして、一にアリストートルの

詩論に則り、固く時處の一致を守れり。初より舞臺に上さん爲に筆を執らざりしかば、脚本としては勿論不適當のものなり。曲中の主人公サムソンが失明して後、樣々の災厄に逢ひ、而も毅然たる信仰と不拔の精神とを持するところ、徹頭徹尾作者の面影也。ミルトンが晩年の作は以上の三大篇の外に、羅甸の小詩二三及び『英國史』等あり。

ミルトンが常に確信せりし作詩上の意見あり、曰はく「嘉すべき事物を材料として良著を成さんの企望に失敗せざるべき底の人は、其の身先づ眞詩篇ならざるべからず、即ち身みづから最善最貴なるものより成れる模型たるを要す」と。是れ彼れが自己をさながらに其の詩中に露呈する所以ならんか。又其の作中に見えたるものは一として尋常のものよりも偉大ならぬはなし。テーヌ其の理を解して曰はく「若し人ありて何故にミルトンの創造する事物が他人のよりも一層高大なるかと問はゞ、余は答へて彼れが一層高大なる心を持したればなりといはんと、洵に然り。ダウデン氏もまたミルトンを論じて曰はく

ミルトンの自修を力めしことは彼のゲーテにも劣らざりき。ふかしながらゲーテは彼

の工夫百錬の希臘主義を持して、人間をもて自家の究竟目的と爲せるに、ミルトンは然らず、猶太的精神(即ち猶太氣風)は常に執着して彼れが身を擁護したり、すなはち彼れは最高の人間は神の所造物なりと思惟し、神意に接近するをもて表極とせり。(中略)。ゲーテが自修の不偏なるや、かりにも罪惡といふ惑の爲に其の心を撹亂せられたるとなし、人生のいづれの部分も彼れの觀念する所によれば(罪惡などいふ)無形の敵の爲に甚しき危難におちいるべきもの殆どなく、又激烈なる攻擊を受けつべきもの殆どなし。彼れは決然としておもむろに自修し、圓滿の發達に進せんと力め、且つ從容として靜かに其の性の一方より他の一方に注意を轉ずると自在なりき。蓋し、ゲーテに取りては、世界は一の躰操場又は專門學校の如きものにして、人生は一層高き教育に進まんとする一期限なりき。ミルトンが定見の特質はこれと異なり。彼れの考によれば、世界は眼前に横はれる一の戰場にして、人の一生の業は諸邦國、諸權力に對しての戰鬪なり、而して善人は神軍の將たるものなり、かるが故に罪惡は常に人間に伴ふものなりといふ惑の暫くも其の心を離れざりしと同時に、人は竟に美德に達し得べしといふの觀念も、また決して其の心頭を離れざりき。ゲーテの見る所によれば自然は概して人間に取りて都合よき諸勢力の調和的集合と見えにき、只彼れの主として怖れしは修養館に於ける誤謬なりき、即ち人の一生の教育に於て、誤りて、其が性質中の首要なる力を修練することに代ふるに、其の次位の力、又は能を以てすることなりき。而してミルトンの最も畏れしは、上帝に對する不忠とそが爲に生ずべき墮獄罪となりき。所詮彼れの眼に

は、自然は只善惡の絕えざる牴牾とのみ見えにき、換言すれば、ミルトンは純粹の清淨教徒なりしと、其の修養の古文學的なりしと、其の美感の學藝復興期的なりしとに拘らず、Diabolus(惡魔)と Immanuel(善神)との爭鬪をもて世界開闢以來の事實と見做しゝと彼のバンヤンにも讓らざりき。彼れは又バンヤンに同じく天城と破滅之市との相去るとの遠く、各々異なる主裁者を戴きて相敵視せるを見、且つ(バンヤンに同じく)最後の勝利は遂に善に歸すべしとなせりき。要するに、彼れは永劫無窮の天道(神)あるを信じき。彼れ思へらく、夫れ勝利は神の有なり、吾人の有にあらず、蓋し永劫無窮の神明に合躰せんと力むるは吾人の分にして、吾人の爲に勝利を畫するは是れ神の分なりと。

此に至りてミルトンが內部の生活を左右する根本の理想を知り得たり。彼れの詩的著作が此の理想の周圍を回轉すると猶其の散文の著作が「自由」といふ理想の周圍を循環するが如し。唯彼れは善惡二力の間に不易常住の激戰ありとなせり、此の故にミルトンの大詩篇には、其のいづれの作にも、善惡の兩黨が幽明の如く相反對したるを見る、又相鬪戰せんが爲に相反對する諸勢力が双方に排列せられたるを見る。されば常に全聖全能の上帝を最上位に置きたれば、いづれの場合にても正義が寛に神聖の助力を得て勝利を奏するに至らざるをなし。

以上の所說の外に、須からくミルトンが美術家としては一に理想家風にものしたりしをも記臆すべし。彼れの發起點は常に抽象なり、バンヤンにありては抽象的美德及び邪惡が絕えず現實的人物たらんとするの傾あるに、ミルトンにありては總て現實的人物だに一理想又は多少複雜せる數理想の集合的代表たらんとするの傾あり。「有望」(ホープフル)及び「老直」(オネスト)及び「脆弱心」(フェイブル、マインド)等は吾人の讀み行くに隨うて次第に現實の人間とならんとす、即ち敬すべき新教的隣人として吾人に知られたる二世紀以前の英國人となりて活動せんとす、然るにミルトンが作中の人物を見れば彼のサムソン、ダリラなどの如き東方古國の傳說に見えたる人物をはじめとして、アリス、エゲルトン及び其の弟(コーマス)中の主人公)の如き當時に實在せし人物すらもミルトンが描寫せる所によれば現實界の人たるよりもむしろ空想界の人物なり、云々。

ミルトンを評し得て餘蘊なしといふべし。尙バンヤンと比較せるあたりは、後の章に敍說すべきバンヤンを參照して玩味すべし。

第三章　論文壇

論戰盛行の時代——テイロア——ブノウン——クラレンドン伯——其の他の論文家——復位期の論文壇——文躰の變化——第二流以下の文士

所謂五文星の筆頭たるヂョン、ミルトンをもて內亂第一期に於ける詩壇の精粹を代表せるものとなさば、ヂェレミー、テイロアは當時の宗旨論壇を表すると同時に其の尤も洗鍊なる散文學を示すものとなすべし。按ふに、內亂時代は英國宗論の全

盛期なり、すなはち國教派と清淨教派との軋轢其の極に達し、宗旨上の論爭激甚なりし時なり。清淨教派の勇將としてはヂョン、ミルトン及び『天路歷程』の著者ヂョン、バンヤンあり、國教派の論客にはヂョン、ヘールズあり、ヂェレミー、テイロアあり、トマス、フラア、トマス、ブラウンの如き將た宗旨論に盛名あり。其の他第二期以後に於ては、クエーカア宗の開祖ヂョールヂ、フォックスの如きあり、又固く宗旨の自由を主張し、ヂェームス二世に抗論せしリチャード、バクスタアの如きあり、又十八世紀にまたがりてはチロトソン、バーロー、ザウス等の如きあり。彼等皆單に文章家としても見るべきの價値あり、而してテイロアの如きは其の尤も錚々たる者也。

テイロアは一理髮師の子なり。一千六百十三年クムブリッヂに生まれ、十三歲の時ケアス大學に入り、在學七年にして得業し、學位及び僧位を得き。夙に時の監督長ウィルヤム、ロオドに知られ、まづ其の侍僧となり、やがてオッピンガムの牧師長となりぬ。一千六百四十二年內亂破裂ののちも、王黨に追隨してウェールスに逃れ、遂に民黨に捕らへられしが、後救されて私塾を開き、又轉じてアイランドに退隱し、王政の舊に復せしまではリスペアンの教會に宣教師たりきといふ。かくてチャールス二世の民黨に勝ちてロンドンに入るに及び、彼れまた擧げられて監督となり、ダウン、コンノア、ドロモーアの三僧を主管し、一千六百六十七年にみまかりき、時に齡五十七歲。

テイロアが主なる著作は、第一『豫言の自由』"Liberty of Prophesying"(こは信仰の自由を論じたるものにて、こゝに豫言とあるは宣教といふ義也)第二『基督の傳』"Life of Christ"、第三『淨生論及び淨死論』"Holy Living and Holy Dying"、第四『黃金林』"Golden Grove"(こは許多の禪思餘錄及び祈禱文を集めたるもの也、之れを「黃金林」と名けしはカルベリー卿が別墅黃金林といふところにて物せしが故なりとぞ)、其の他小篇は數を知らず。又若干の詩歌あり。テイロアが文致は所謂華麗躰にして、おしなべて典雅流暢の妙に富むと雖も、未だエリザ朝の文病を全脫せざるものなり。彼れは好みて對句を用ひ、形容語を疊み、强ひて比喩を延長するの癖あり。例へば、fetters of sorrow とゝはゝ足るべきところにも、fetters and chains of sorrow とやうに語を疊むこと不斷の癖なり。されば幸にして詞意相適ひ、神具尤も熟せる時の作は、句

々瑰麗言々富贍、散文の詩を讀むが如き妙趣あれども、久うして讀む者の心倦憊し、他の平淡清爽なるものに渇せざるを得ず。左に彼れが文の一端を示し以て管々しき評論に代へん。其の風調の如何に流麗にして其の比喩の如何に巧緻なるかを見よ。

THE PRAYER OF ANGER

（嗔恚の祈禱）

Prayer is the peace of our spirit, the stillness of our thoughts, the evenness of recollection, the seat of meditation, the rest of our cures, and the calm of our tempest. (祈禱は精神の安なり、思念の靜なり、回憶の平なり、禪思の居なり、心勞の止なり、心のあらしの沈靜なり。) Prayer is the issue of a quiet mind, of untroubled thoughts; it is the daughter of charity and the sister of meekness; and he that prays to God with an angry—that is a troubled and discomposed—spirit, is like him that retires into a battle to meditate and sets up his closet in the out-quarters of an army, and chooses a frontier garrison to be wise in. (祈禱は安心の果なり、靜慮の果なり、慈悲の女にして溫順の妹なり、若し夫れ嗔恚して(くはしくは紛亂せる心もて)神に禱る者は、譬へば禪思せんと欲して戰場に退き、陣頭に禪室を設け、戍兵なしてそこに入らしめ靜悟せんを俟つものゝ如し。) Anger is a perfect alienation of the mind from prayer, and therefore is contrary to that attention which presents our prayers in a right line to God. (嗔恚は心をして全く祈禱に遠ざからしむるもの也、故に神に一直線に祈願を獻ぐる一心不亂の旨に反す。) For so have I seen a lark rising from his bed of grass, soaring upwards and singing as he rises and hopes to get to Heaven and climb above the clouds; but the poor bird was beaten back with the loud sighings of an eastern wind and his motion made irregular and inconstant, descending more at every breath of the tempest than it could recover by the libration and frequent weighing of his wings; till the little creature was forced to sit down and pant and stay till the storm was over, and then it made a prosperous flight and did rise and sing as if it had learned music and motion from an angel as he passed sometimes through the air, about his ministries here below. (何となれば我れ曾て一雲雀の其の草裡の塒より起いでゝ、舞ひ登るにつれて囀りつゝ、天宮にもさゝかんと空だのめして、雲井はるかに舞ひのぼるを見たり、然るにあはれむべし件の雲雀は、さと吹きおろす東風に撲ち戻されて、羽根のあがきも亂れたゆみ、翼をさゝのへ平均をさらん遑もなく、暴風の吹きおろすたびにいよ〳〵降りて、其の小き動物はつひにおり居、うちあへぎ、あらしの吹やむまで俟たざるを得ざりき、さてあらし過ぎて後、こたびはいみじくも舞ひのぼりて、曾て神のみつかひが此の下界を敎化せんと虛空を渡りており來まし折、彼れ舞樂をや學び置きけんと思ふばかり、妙に舞ひのぼり囀りにき。) So is the prayer

of a good man; when his affairs have required business, his business was matter of discipline, and his discipline was to pass upon a sinning person, or had a design of charity, his duty met with infirmities of a man and anger was its instrument, and the instrument became stronger than the prime agent and raised a tempest and overruled the man; and then his prayer was broken and his thoughts troubled. (善男女祈禱はた斯くの如し云々)。

要するに、ティロアは縝密なる思索家若しくは森嚴なる論文家といはんよりは、むしろ能辯なる說敎師、否、甚だ巧妙なる修辭家とも稱すべきものなり。屢〻羅甸句法を用ふれども、ミルトン、ブラウン等の散文ほどには甚しからず、又多く過巧なる比喩を用ひ、典故、古言を引用すれど(間〻うるさきまで甚しきことあれど)これはた時尙の然らしめし所也、必しもティロアをのみ咎むべけんや。彼れ爲人忠實謹厚、其の口に文に表白せし所は悉く其の確信せし所なり、其の文の華に流れしが如きは、蓋し、其の燃ゆるが如き詩人的才藻と、まづ重に情感に訴へて人心を動かすをば第一とせし誘說的精神との結果なるべし。

ティロアと並びたちて當時の論文壇に雄視せしものは士爵トマス、ブラウンなり。

ティロアは文章家をもて聞こえたれど、當時に在りては專ら神學論者として重ぜられ、ブラウンはむしろベーコンにひとしく廣き意味にて謂ふ論文の名家として知られたり。按ふにベーコン以來エッセー(小品論文)を作る者漸く多く、十七世紀の初めには監督ホールの "Three Centuries of Meditations and Vows" と題せる短論文三百篇を收めたる文集出で、一千六百四十二年に至りてはトマス、ブラウンの "The Religio Medici" 出でたり。こは所謂エッセーの大に發達せる姿を代表せるものにて、紛々たる當時の論壇に一の清新なる生面を開きしもの也。こゝにはブラウンの閱歷及び其の論文家としての特質等を精査批判するの餘地なければ、只其のあらましのみを略說すべし。

士爵トマス、ブラウン

は一千六百〇五年ロンドンの中央に生まれき。幼にして父に死別し、義父なにがしに養はれて學を修め、中ごろアイルランドに遊び、稍〻長じて諸處に遊歷し、專ら醫學を修め、醫師の學位を得、一時醫を業とせりき。されば斯道の博識としても其の名高く、また勤王黨の名士としても江湖に知られ、良家の女を聚りて妻となせり。已にして學士會院の會員に擧げられ、ついで一千六百

六十二年にはチャールス二世王の恩命によりて士爵に叙せられ、同じき八十二年に逝りき、云々。

彼れが主なる閲歴はほゞ上の如し。按ふに、ブラウンをして英文學史上に多少の重きを致さしむるものは、其の閲歴に非ずして其の論文の特致なり。彼れは其の著作の分量よりいふも、その文章の品質よりいふも、未だ大作家をもて許すべきものにあらねど、後の名文家に影響せし點は頗る侮るべからざるものあり。博士サミュエル、ヂョンソンの如き、チャールス、ラムの如きは、多少ブラウンの文を師表とせし證跡あり。就中、羅甸語脉を混用して一種清新の文を做すはブラウン獨特の技倆にして、テイロア、ミルトン等はた數歩を讓らざるを得ず、而も是れ彼れの長短の併宿せる所にして、その弊やブラウンを讀まんとする者をして一種の異なる辭彙を需めしむるに至れり。例へば、彼れは Clearness といはで Clarity といひ、Fierceness の代りに Ferity といふ辭を用ひたり、而して其の實何等の詞の美をも加へざること間〻あり。されば彼れが愛讀者たりしコールリッヂすら、彼れを評して Hiper-Latinistic (餘りに羅甸的)なりといひ、彼れを敬慕せし博士ヂョンソンすらも之れを是認す

る能はざりき。さもあれ彼れは其の高遠幽玄なる思想を一種獨特の文致に寓して讀者をして或は驚かしめ、或は喜ばしむるの技倆あり。彼れが文を讀むや吾人はさながら埃及の象字文の險怪神秘なるを讀むが如き心地し、知らず識らず想像を太古に馳せ、若しくは永劫の未來に飛ばしむ。按ふに、彼れは常に好みて「死」「忘却」(オブリヰオン)、「不朽」などいふ莊嚴幽遠なる問題に筆を着け、概して社會の暗黑面に着目せしかば、其の文躰はた自然に奇峭なるに至りしならんか。而して其の弊や或は險晦となり、或は生硬粗大の失あるを免れざりき。こゝに彼れが思想の一斑を示さんに、彼れは謂へらく「人もし其の前後を圍繞せる無限の年代を思ひやらば、人生の淺薄にして沒意味なるとおのづから明かならん」と。又曰はく「自然は美術と異なれるものにあらず、美術はた自然と同じからずといふべからず、彼等は皆神の臣僕也。而して美術は自然の圓滿なるものなり」云々。又曰はく「自然は一の世界を形成し、美術は他の世界を形成す、而して人の信仰よりいへば、宇宙の萬象は皆 Artificial (技巧的)なり、何となれば自然は美術なれば也」云々と。

ブラウンが著作は種々の品類を含めりと雖も、多くは道德的若しくは哲理的考察

より成れるものなれば、其の旨深遠にして奥妙なる者多し。中に就きて最も善く世に知られたるは、前に擧げたる"Religio Medici"の外に"Hydriotaphia"一に"Urn-Burial"といへるあり、"The Essay on Vulgar Errors"と題せるあり。"Religio Medici"は明白に自家の信仰を說けるものなり、次の"Urn-Burial."は羅馬市なる一隅より發掘せられたる屍壺に關して自家の意見を述べたるものにて、彼れが博識を窺ふに足る。"Vulgar Errors"は、其の名の示すが如く、當時の社會(十七世紀)に流行せりし種々の妄說、謬信等を說破するを主とせる著なり。當時の俗衆は「水晶は固く凝結したる氷のみ、金剛石は山羊の血を以てせば自由に伸縮するを得べし、又は象には關節なし、土豚は盲目なり」などやうの笑ふべき妄說を主張せしなり。彼れすなはち博引旁證一々學理上の例證を示して、此等妄說を說破せり。されども彼れが著中最も眞面目にして讀みて有益なるは最初に揭げたる"Religio Medici"なるべし、こは單に文章としても永く愛讀せらるべきものなり。この他に"Christian Morals"(『基督敎道德』)と題せる著あり、こは博士ヂョンソンが其の卷頭にブラウンが略傳を附錄して出版せし以來世に知られたり。

彼れが羅甸語脈を餘りに多く混用せる由は、已に前にも語りたるが、其の措辭の瑰麗なる、眞に讀者の目を眩せしむるに足るものあり。且つや彼れの文に於ては一種稀有の結合存す、他なし、彼れは其の本來の面目たる哲理的思索に交ふるに滑稽詼諧の趣味を以てせり。彼れが文は、譬へば木綿地に於ける金銀絲の刺繡の如し、而も其の取りあはせのわざとらしからでおのづからなる美しさを具へたる、是れ其の技倆の卓絕なる所以なり。加之、彼れに多とする所は、彼れが一文を草せんとして或問題を捉らへ來たるや、普通の著作家と異なりてあらゆる方面より件の問題を看察し、攻究し、幾ど餘蘊なきまでに咀嚼したる後、さて始めて筆を把りし一事なり、されば其の措辭おのづから圓熟、絕えて蕪雜の失を見ず。コールリッヂがいたく彼れの文を稱美せしも以あるかなる。彼れが爲人はた取るべき者あり、彼れ曰はく「余は他人と說を異にするが爲に之れと絕たんとは欲せざるなり、況や怒り罵ることをや。本來相投合せざるを强ひて吾が意に從はしむるも、竟に何の甲斐かあらん、數日の後また必然離るべければなり、云々」と。又曰はく「人は其の心を省れば天道の面影の宿れるを見るなり。自然は神の面影なり。此の理を解せざる者は

未だ人間のアルファベット(いろは)をも學ばざる者也)と。以て其の温厚にして敬虔なりし性質を知るべし。

歴史家として五文星の隨一に列すべきエドワード、ハイド、後に大法官(チャンセロア)として知られ、就中、クラレンドン伯の名によりて最もよく知られたるハイドは、政治上の名士としても、王權黨の名流としても、其の名一世に嘖々たりき。彼れは瓦家に生まれ(一六〇八)オックスフォオドにて勉強し、十六歳の折ロンドンに遊び專ら法律學を研究せり。其の頃ベン、ヂョンソン、ウォーラア、モオレー、ヘールズ等當代の文豪と相交はり、益する所尠からざりきといふ。一時はバリストル(狀師)たりしが、幾程もなく廢業して身を繁劇なる政治社會に投じき。初めは民黨中の温和派として知られ屢〻國會に演説して朝議に反抗せしこともありしが、後年ハムデン等民黨中の名士等と議合はず相激論すること幾回、竟に心を王黨に傾け、いつしか忠實なる勤王黨となりぬ。かくて民黨の世となりしや、彼れは外國に流浪し、他の王黨と共に定めなき世の有樣を嘆じたりしが、時勢また一變し、クロムエル逝りて王政の舊に復せしや、あらためてチャールス二世王に擧げられ、大法官となり、男爵に叙せられ、ついでまたクラレンドンの伯爵に叙せられたり。しかるに其の謹嚴廉直の擧措は、兎角に淫逸なる朝廷と相容れず、寵遇いくばくもなくして衰へ、讒口しば〳〵金をとらかし、彼れはつひに彈劾せられ、朝を逐はるゝに至りたり。一千六百七十四年佛蘭西の客舍にみまかりき。

クラレンドンは多くの國書(ステート、ペイパース)及び種々の公文類を司錄して夙に文名を知られたりしが、眞に文學上に彼れが令名を留めたるは "The History of Great Rebellion" (『大叛逆史』)に外ならずとす。すなはち英國の大内亂を叙述せる者なり。這は今の所謂正當の歴史にはあらず、只普通の記錄躰もて一千六百二十五年より同三十三年まで に至る前後八年間の出來事をいと詳かに叙説せるものなり。此の書の材料は著者が耳聞目擊より得來たりたるなれば、事實おほむね確實なるが上に、文辭は尤嚴正にして暢達、多少の失あるにも係らず、永く有數の原史として尊重せらるべき價値あり。クラレンドンが看察と評論とは未だ全く公平なる能はずといへども、兎にも角にも紛糾錯雜せる種々の事件、就中、種々の人物を巧に叙狀し、一目の下に瞭然たらしめたる手腕は當時稀に見る所にして、見識はた非凡なりと稱すべし。而

して其の人物を批判し、性質を剖説するの點に於ては、尠くとも空前の技倆ありと稱せらる。又その身王權黨にありながら、頗る公平に民黨の諸名家を評論せる、優かに良史家たるの品位にかなへり。強ひて其の文病を指摘せば、動もすれば散漫に流れて不精確なる所にあるべし。按ふに、此の缺點は、恐らく彼れが元來修辭的素養多からざりしと多年公衆に對して演説せし説話句調の脱せざりしとに因るなるべし。クラレンドンの著書は前の『大叛逆史』の外に、トマス、ホッブスの著"Leviathan"に應へたるもの、及び"Essay on an Active and Contemplative Life"(『活動的及び靜思的生活論』)といへるあり。後者は殊に有益なるものとす。其の他教育上、社會上等に關する小論文數を知らず。要するに、クラレンドンをして其の名を後世にとゝめしめしは、能く複雜なる人物事件を井然たる秩序によりて嚴正なる筆致をもて描寫したる史的手腕にあり、彼れは英國歴史文學の史上に特筆せらるべき資格を有す。

以上諸家の外に當代に名ありし散文家は一千五百七十六年に生れ、オックスフォードに教育を受けクライストチャアチの校友となりて一生を該校に送りしRobert Burtonの如き其の一、其の著を"The Anatomy of Melancholy"といふ。論ずる所人の心性に亘りたるだけに褒貶かしましく、千六百二十一年に出版せられ、間もなく八版を重ね、暫く遺却せられ、今世紀の初めに至りて再び四五版を重ねたり。文躰には著大なる特點なし、たゞ古人の説を引用同化する一種の技倆をたゝふべきのみ。Thomas Fullerの如き其の二、一千六百八年に生れき。ケムブリッヂの出身にして、ブロード、ウィンゾアの牧師となり、夙に"The Holy War"を著はして名あり。爾後陸續著述し、"Church History of England"、"The Worthies of England"など、いづれも名高し、一千六百六十一年に歿しき。

尚此の外にも"Complete Angler"の著者Izaak Walton(一五九三—一六八三)"Familiar Letters"の著者James Howell(一五九五—一六六六)など、いづれも王朝文人の殿たるに足れり。

第四章　學術界

學術の勃興——ホッブス——其の哲學と當時の社會——ウィルキンズ——ロック——ニュートン——其の他

所謂内亂時代は純文學凋落の時代なり。之れを前のエリザベス朝に比するも、後

の十八世紀乃至十九世紀に比するも其の榮枯の差、日を同じうして談るべからざるものあり。然れども若し眼を轉じて其の學術界の氣運を觀れば、眞個前代未聞の盛あり、夫の後の哲學、科學に重大の影響を與へたる經驗學說の組織や、自然科學の進步や、皆この間に起り、ホッブズ、ロック、ニュートン等輩出し、英國の學術界に貢獻し、世界の人文に大刺戟を與へたり。さもあれ、學說の如何を記述するは本著の事にあらねば、左に聊か其の文章、其の議論、其の感想が當時の社會と相影響せし跡のみを一瞥すべし。(以下年代の序によりて、內亂時代第一期の哲學家トマス、ホッブズより始むべし。)

哲學家として五文星の一に列するトマス、ホッブズの學說と當時の社會とは離るべからざる關係あり。蓋し、峻嚴冷酷なる淸淨敎主義の極端なる抑壓に苦しめりし社會は、王政の舊に復するに及びて、其の反動の結果として、あらゆる惡德を行ふに至り、腐敗の極端に流れたり。其の腐敗のいかばかり甚しかりしかは、尙後の章に叙說すべきが、此の大墮落と關連して亦此の腐敗社會の反映として、且つ其の感想の影として、頗る考査すべき價値あるものは、トマス、ホッブズの爲我的倫理論なり。換言すれば、ホッブズの倫理論乃至政治論は當代社會の感想が系統的學說(システマチック、シオリー)となりて化現せるものとも評すべく、而して當時の貴賤はホッブズの理論を實踐體行せしものに外ならずと評すべし。すなはちチャールス二世王の朝廷に出入せし朝臣等は明かに實行界に於ける利己論者、兼、無神論者なりしが、ホッブズは明かに思索界に於ける利己論者、兼、無神論者なりし也。彼れはあらゆる人間の動機を利己の性、爲我の情に歸せんとせり。されば十七世紀の中頃に於てはホッブズの理論は普く世間の注意を牽き、兼ねて後代の倫理論上に尠からぬ影響を及ぼしたり。

トマス、ホッブスは千五百八十八年四月五日(後陽成帝の天正十六年、林羅山の生誕後五年)マームズベリに生まれき。其の性の怯懦なりしは、其の母が妊娠中に西班牙艦隊襲來の事ありて、いたく驚駭し、正日に先ちて生み落としゝが爲なりといふ。トマスはオックスフォードに學ぶこと五年にして佛、伊、獨等を歷遊し、歸りて某伯の書記となり、且つロオド、ベーコン、ベン、ヂョンソン等時の詞傑とまじはりにき。千六百三十一年更に佛、伊、及びザヴィ等の地に巡遊し、ピザにて有名なる天文學者ガリレオに會ひ、千六百三十七年歸國せしが、當時方に熾んなりし政治熱は彼れをして靜

居間學すること能はざらしめき。彼れはもと熱心なる王權黨なりしかば、民權黨が全勝を得たりし間は本國にとゞまること叶はずして佛京パリーに遁れたりき。彼れが佛の哲學者デカルト及び其の他知名の士に交はりしは、其のころのことなりきといふ。

ホッブズは英國人に普遍なる所謂實驗的(ポジチーヴ)、精神(スピリット)に富めりき。彼れは以爲へらく「人は本來利己的にして邪曲なる者なり、所謂正邪善惡は自家が利害を標準として命名したるものに外ならず。彼の優美高雅なる情操の如きは人間の固有にあらず」と。又曰はく「最も大なる善は四肢五躰を十分に發達せしめて全身の營養を計るに在り、死と苦とは人間の最大惡なり。人の欣求する所は只快樂のみ」と。又曰はく「何が故に友誼は重んぜざるべからざるか。友人は我れを助け、我れを益すればなり。人は何の爲に慈善を行ふか。不幸は我が上にも或はふりかゝるとあるべければ也。人心の根柢は此の如きのみ」と。又曰はく「音樂や、繪畫や、詩歌や、此等は過去を喚び戻し來たる所以の摸倣(イミテーション)として愉快なるものなり。蓋し過去にして善ならば善なるものとしてそを摸倣する點に於て愉快なり、もし過去は惡とせんか、之れを過ぎ去りたるものとして摸倣するが故に愉快なり」と。彼れの說によれば、美術は一種の器具たるに過ぎざるなり。而して彼れが倫理論の精神はた此の機械主義に外ならず。曰はく「智は利用を爲す、保護を人に與ふる者智なれば也」と。彼れが眼より見れば智もまた何の威嚴もなき一種の機械にして一身の利害を保護幇助するの點に用あるのみ。彼れまた曰はく「賢者は富まずとストイック派の學徒はいへれど、然らず富者は必ず賢人なり」と。是れ黃金を以て最も貴しとするの說に近し。之れを要するに、彼れの說によれば人は利己の爲に動き、利己の爲に生く、其の人を愛し他を顧るは利己の目的を圓滿ならしむる方便のみ、所詮、人間は利己心の凝結躰なり。されば、もし之れを其の成り行くがまゝに放任し置く時は、社會は紛亂して無秩序となり、人と人と相食まんとする修羅場を現出するは必定なり。かるが故に之れを制するには專制君主獨裁政治を建設するを要す、云々。

以上は彼れが"Philosophical Rudiments concerning Government and Society"(『政府及び社會に關する哲學的原理』)の成りし所以の思想なり。若しそが倫理論の本領たる爲我的快樂說の根據を寛はんとせば、須からく"Leviathan" or "The Matter, Form, and Power

of a Commonwealth, Ecclesiastical and Civil"『宗教上及び政治上に於ける國家の實質形式及び權力』といふ著を讀むべし、是れ彼れが最も名高き著書也。彼れはまた "Of the Body Politic" を著して神學上の問題をも例の爲我主義に歸せんとせり、されども其の說を論駁する者日に漸く夥しくなり來りしかば彼れが說は次第に世に捨てらるゝに至りたり。此の駁論者の中には、前に擧げたるクラレンドンあり、哲學者としても文學者としても盛名ありし伯爵シャフツベリあり、ブラウンはた其の隨一人なりき。

ホッブズが哲學上の功過は時勢に相照らして考ふる時は、今尙輕々しく判斷しがたしと雖も、純文壇に於ける彼れが功は、蓋し、尠少ならずと稱すべし。彼れは晩年ホーマアの飜譯家として文壇に現れ、先づ始めに『オヂッセー』を譯し、次いで『イリヤッド』全篇をも譯しき。其の譯の精確なりしはポープが稱揚せるにても知らるべし、但し、詩としてよりもむしろ散文として譯せりと許するが妥當なるべし。彼れは散文の名家として當代に錚々たりし者の一人なり。其の文辭の明晰と精覈とは流石に論理家たるの頭腦に耻ぢざるもの也。且つや其の學說の識者をして眉を

顰めしむるものあるにも拘らず個人としての其の行實は頗る稱美すべき價値ありき。クラレンドン曰はく「余は彼れが卓拔なる學識と毅然として褒貶に頓着せざる剛直とを尊敬す」と。彼れは齡九十二歲にして逝りき。

ヂョン、ウィルキンス(一六一四—七二)の名將たる記憶せられざるべからず。彼れはチェスターの僧官なり、夙に大陸の碩學がリレオを景慕し新科學の輸入と工夫とに竭す所多かりき。一千六百三十八年初めて "That the Moon may be a World" を著し、月球が動物の棲み得べき一世界なることを十四條の理由を擧げて說明し、同四十年 "That the Earth may be a Planet" を著し、翌年また "Mercury" を著せり。此の書は長距離の星躰へ一種の氣によりて交通する法を巧に想像して說けるものにて、其の著作中の最も有名なる者なり。曰はく「空中を運行する器械の工夫は種々あるへけれど予が別項に記載せる飛行車ばかり人の想像に超絕して便利の著きはあらじ。この車の自在なること鳥翼にも勝り、如何なる高壁も長河も大溝も妨ぐることなく、又如何なる嚴重なる邏卒の眼にも觸るゝこと無し、云々。以て其の一斑を知るべし。文章は簡勁にして精緻を失はず。以上三篇に他の嚴正なる數學、科

學及び神學に關したる小著あまたあれど擧げず。按ふにウィルキンスが唱へたる學理は今日の眼を以て見れば幼稚笑ふべき程のものなれど、以上三種の著述は其の想像の興味深きを愛する讀者今に絶えず。

内亂時代の末に至りて英國の學問頓に般なり、竟に獨力にして近世哲學の所謂經驗學派を開始せし一大學者こそあらはれたれ。これをヂョン、ロック(一六三二——一七〇四)となす。ロックは彼の只管に先哲の所説に攀緣して眞理の妙光を捉へんと試る演繹の方法に滿足する能はずして、寧ろ確實不拔なる事實の上に立脚して新に一學系を築き做さんと試みしものなり。按ふに、ロック以前英にはベーコンあり、ホッブズあり、佛にはデカルトあり、蘭にはスピノーザあり、或は歸納的論理法を用ひ、或は自然科學の應用を試み或は知識の本然を論究せんと試みしこともありしが、未だロックの如く斷として哲學研究の起點を知識其の物の研究にありと明説せし者は無かりき。蓋し、ロックの一世は自家の哲學系を大成するに費せしよりも、寧ろ世の謬説を破して新説の障礙を掃ふことに費せし所多きが如し、即ち人間に「生具の思想あり」といふ論をば根本的誤謬なりとなし、「一切の

知識皆經驗より來る」と論じたるなり、而して此れ實に後の英佛獨の諸學者が所謂經驗的哲學説の端緒なり。

ロックはオックスフォードの出身にして、同所のクライスト、チャアチの講師たりき。初め宗教家とならんとして志を得ず、後には醫學、化學を研究しき。シャフツベリ伯の知遇を得るに及びて政事上伯と浮沈を共にし、大陸に遊ぶこと前後數回なりしが、和蘭に滯留中に其の有名なる大著 "Essay on Human Understanding" といへるを著しき。同年に成りし書中、別に "The Treatise on Government" あり、後の政治家に重視せらるゝ著述なり。其の他 "First Letter concerning Toleration" "Second Letter concerning Toleration" "Thoughts concerning Education" 及び神學上の議論若干編あり。いづれも學術史上に特筆すべき良書なれども、出版の當時は別段の注意を呼び起すこともなく、其の歿後二三十年に至りて始めて嘖々の評を得たり。文章は平板にして節奏に乏しく、動もすれば冗長若しくは煩雜となりて讀むに懶し、たゞ其の質直にして平明、其の俗を啓發するに與りて有力なりしを多とすべきのみ。

當時形而下學の發達は形而上學に比して更に一段めざましかりき。一千六百六

十二年、チャールス二世が學士會院を保護して學問の進歩を圖りしより、彬々たる名士該會院より出で、William Gilbert（一五四〇——一六〇三）は磁力の發見をなして後の斯學の基を造り、William Harvey（一五七八——一六五八）は血液循環の理を創說して醫學に資せり、而してアイザック、ニュートンいづるに及びては當代の科學熱殆ど其の頂點に達したりきと評すべし。

アイザック、ニュートンは一千六百四十二年（我が寛永十二年、契沖時に三歲）リンコンシャヤに生れき。幼きころより器械の工夫、數理の研究などに熱心なりしが、長じてケムブリッヂ大學に入るや、忽ち數學に名を擧げ、同校の敎授となり、靜かに斯學を研究し、力學、天文學、光學等に亘りて其の貢獻せし所擧げて數ふべからず。在職中議院に入ること兩三回、學士會院の總長に選ばれ、又士爵を授けられ、一千七百二十七年に歿しき。恐らくはニュートン出でざりせば、理科の學は今日の如き進步に達すること能はざりしならんか。ニュートンは實に文明史上の偉人なり。ニュートンが學術に關して著しゝ所は"Philosophia Naturalis" "Principia Mathematica" "Optics"外若干篇あり。就中『オプチックス』は今の光學の基礎となりしものなり。ニュートンの學術上の著述は、多くは羅甸文なるが、英文にてものせるは"Chronology of Ancient Kingdoms" "Observations on the Prophecies of Daniel"など、皆聖典（バイブル）に關する議論なり。平明質實にして遒勁なる文辭は能く其の敬虔の念と其のやゝユニテリヤン敎旨に近き信仰とを表白して餘りあり。

さて第二流の學者を擧ぐれば、熱心に博物を研究し、其の結果によりて神の攝理の妙を說きしJohn Ray（一六二八——一七〇五）の如きは其の一、彼れが博物學を一科學となしたる功は忘るべからず。著書は"History of Fishes" "The Wisdom of God Manifested in Creation"等なり。十七世紀の哲學者中ベーコンの經驗的哲學の系統を繼げることロバアト、ボイルより大なる者はなし、ボイルの生誕のベーコンが永眠の年にありしも妙なりとハラムが評せしRobert Boyle（一六二七——九一）の如きは其の二、其の著作は合せて六部の大册を成せり。

第　章　新聞、雜誌の濫觴

新聞紙の起原——其の進步——雜誌の起原——圖書館の設立

古羅馬には"Acta Diurna"あり、ヂニスには"Gazetta"あり、佛蘭西には"Affiche"あり、近

代の新聞紙及び定期出版書類は孰れも皆これに則れるなり。英國にて數葉の出版物大さ約そ我が菊版の二倍位のもの)が新聞紙の形して刷りいだされし初めはチェームス一世の御宇なり。一千六百二十二年、恰も三十年戰爭の鎮定せし時"The News of Present Week"と題したる數葉の印刷物、最近の事件を錄して現はれたり。記者はナサニエル、バッタアといふものにて、補助者若干人ありき、これを正則なる新聞紙の濫觴となす。或はいふ、一千五百五十八年、"English Mercurie"と稱する新聞紙發兌せられ、彼のアルマダ事件の詳細を錄したりきと。此の古新聞紙三葉今尙大英博物館に保存せらる、而して一千八百三十九年までは最初の新聞紙なりと信ぜられたりき。然るにトマス、ワッといふ者(一說には博物館長某)其の僞作なることを證明せし以來は、チェームス一世の朝を以て英國新聞紙の生誕期と定むるに至れり。當時の新聞紙は今日のと異りて出版の時日を定むることなかりしなり。かくてチャールス王が其の國會と衝突して、內亂起るに及び、新聞紙始めて政論を揭げ、兩黨各〻若干の機關ありき。殊にをかしきは其の題號なりき、"Scotch Doves" "Parliament Kites" "Secret Owls"などあるさ〻異稱なるに、"Weekly Discoverer"出づれば、一方よりは"The Weekly Discoverer Stripped Naked"といふが現るゝといふ習はしなりき。又羅馬の神使に因みたる"Mercury"の名を載けるもの、双方ともに數種ありき。

チャールス二世及びチェームス二世の朝には小形の新聞紙あまた出でしが、題號、記事の可笑しきとは前代に讓らず、記事も多くは外國の瑣事、閑話にて滿ちたりしが故、マコーレーは當時の新聞は其の一年間の記事を合するも其の事項の分量今の『タイムス』の二日分にも足らずといへり。こはさもあるべきことなり、汽車もなく、電信もなく、人事今の如く急迫ならざりし世の事とて、地方なればあやしげなる珈琲店などに暇ある老幼のうち集まり、近時の世態を件の新聞紙にて讀むことをば一日の業務となせりしは勿論、倫敦市の熱鬧とても用務ある紳士が半日を新聞縱覽所に消せしと珍しからずといへる程なれば、其の記事の閑冗なりしこと論を俟たず。

さて、序ゆゑに此の種定期刊行物の發達の行末をもほのめかしおかんに、新聞紙は右の如き起原にて年を追うていよ〳〵發達の好運に向ひ、一千七百十三年トーリ

黨の內閣の時、新たに一ペーヂ一ペンニの出版稅を課せられてさへ毫も頓挫の色なく、盛んに進步發達し、後遂に建議して件の重稅を脫するに至りては、其の勢ひ更に盛んに、これより探訪、通信の諸機關いよ〳〵整備し、萬事分業の制を行ひてほゞ今の新聞紙の體を得たりき。こは十八世紀の末頃なり。かくて一千七百八十八年一月一日"The Times"の第一號出でたり。これを昨今のに比すれば、見るに足らざる勿論なれど、當時にありては出色の物たりしや疑ひなし。首都の區內ならば、尙印刷のしめりあるまゝにて毎朝配布し、地方には夕までに郵達せしが、其の部數は合せて僅かに一萬に滿たざりきといへば、之れを今の『タイムス』の毎年製紙工場に支拂ふ金額の數百萬ポンドなるに比すれば、讀書力の範圍の擴張もまた實に驚くべきなり。

新聞紙の發達のかくの如くなるにつれて、所謂雜誌類もまたこの間に起り、大に後の文士の地步を造りき。案ずるに、雜誌が儼然たる形を成就せしは、一千七百四年に現はれしデフォーの"Review"にありと雖も、其の文學と密接の關係を有つに至りしは、スチールとアヂソンとが彼の『タトラァ』"The Tatler"に筆を執りし時にあり。有名なる"Spectator"程なく起り、英倫土(イングランド)にては"The Gentleman's Magazine""The Guardian""The Rambler"(サミュエル、ヂョンソン主筆)蘇格土にては"The Mirror""The Lounger"など相つぎて十八世紀中に興りき。かく發生したる定期刊行の冊子の中に、自らレヰュー(評論)とマガヂーン(雜誌)との別あり、而して此の二種が共に長足の進步をなして今日に至れる次第は、尙委しく後々の章にて說くべし。

さて、雜誌的寄書の編纂法を轉用して起りたりと思はるゝ彼の「エンサイクロピデヤ、」又の名サイクロピデヤ『大全』『類聚』等の起原は、所謂雜誌類の一通り榮え出でし後にあれば、これまた詳細は後の篇に讓る。

因みに英國圖書館の起原につきて一言せんに、圖書館の盛大になり來りしもヂェームス一世の朝なり。今日大英博物館內にある圖書館は、そのころ士爵ロバアト、コットンの設置せしところなり、又同じころ士爵トマス、ボドレーといふ者オックスフォード大學內にボドレー圖書館といふを設けき。これを圖書館發達の起原とす。

第六章　復位期の文學

清淨教派の**枯禪主義**も、其の勃興の當時に於ては、放肆浮靡の極端に流れたりし學藝復興熱の弊を救ひて、移風易俗の殊功ありしが、王黨全く挫敗し、民黨全國に君臨して、清淨教派の空想の現化せらるゝに至りては、其の弊やゝ顯著となりぬ。蓋し、彼等の志を得て政教の二權を掌握せしや、單に有害なる驕奢淫靡の習俗を矯正するのみをもて足れりとせず、頻に嚴令を都鄙に下し、猥雜なる興行物、祭祀、遊戲は言ふに及ばず、かりそめにも質素勤儉の旨に觸るゝ限は、無邪氣なる遊興をすらも悉く之れを禁制し、竟に全國の民衆をして擧げて枯禪主義の僧侶たらしめんとせり。こゝに於てや、始めは私人が行爲をのみ督制せし良心も、廣く公衆を紀律するの道義力となりて活動し、清淨教派の嚴格なる教規はさながらに政府の法令となり、警察令となり、賢愚曉昧の差別なく、あらゆる國内の老弱男女をして強ひて之れに從うて生活せしめんと欲せしかば、詩歌、藝術、舞蹈、演劇、遊戲、およそ人心の保養に係る限りの物は、悉く皆禁止せられき。當代の英國は冷然として笑謔なく索然として歡樂なく譬へば落寞たる嚴冬の光景の如く、風趣蕩然たる國土なりき。さもあれ、人の性は單調を嫌ひ變化を好む、終日ことさらに跪坐して正言し、强ひて歡笑を抑殺して長永に澁面を粧ふことと豈人情の自然ならんや。假令此の極端なる偏調をして道理に適合するものたらしむるも、尙斯くの如き偏調の永く續かんことは望むべからず。清淨教徒の過嚴なる訓戒と苛細なる法律とは日ならずして形式的となり、煩瑣的となり、漸く嘲笑の標的となりぬ。是れやがて英國の社會に

第二の反動を招致せし所以なり。

共和政府の統領ウィルヤム、クロムエル逝き、其の子リチャード、クロムエル繼ぎ、共和政治の基礎の漸くゆらぐや、おそるべき反動の潮流は多年奢侈の佛國に流寓したりしチャールス二世を戴いて卷きかへし來り、政治上の反動と合同して一擧に共和政府を轉覆し、同時に人情風俗をも激變し、嚴令の爲めに矯飾せし昨の似て非なる禪僧侶をして無耻無慚の蕩兒群たらしめたり。此の大敗俗の時代を復位期となす。

按ふに、佛蘭西風の華奢と風流とが、彼の國の特有なる純理を悅ぶの思想と高雅な

る鑑賞力とに伴はれずして、突然反動の波に乘じ、久しく枯禪主義に倦み果てたりし實際主義の英國に入り來りしなれば、其の弊殆ど言ふ可からざるものありき。王チャールス二世が嗜む所は諸司百官は言ふに及ばず諸民皆之れに倣ひ、昨は卑しみて斥けしものを今は狂奔して喜び迎へ、昨は惡みしものを今は愛し、昨は敬せしものを今は嘲り、全習俗の局面翻然として一變し、世人は擧げて酒、色、財、三慾の餓鬼となりぬ。金碧燦爛たる後宮すらも殆ど威嚴ある青樓のごとく、偖似整然たる禁庭だにも、其の實相を觀じ來たれば、雅びたる破落戸の集會所たるにほかならざりき。上源既に然り、況や其の下流をや。美德は此の時より人間に存せざる物と見做さるゝを以て普通とし、當時の縉紳、名士等は其の隱慝を許かるゝも平々然として慚色無かりき。惡德は朝に野に青天白日にも恬然として濶步し「かくあることは人間の本領なり、彼れも行ひ此れも行ふ、必しも耻づるに及ばず」と寧ろ惡を行ふに巧なるを誇り示すものゝ如くなりき。されば、こそ、已に前にも語れる如く、當時の碩學ホッブズは、其の哲學の中にて、人間の、所詮、私慾動物に外ならざる所以を論理的に證明し、當時の詩人、文客等も、其の作、就中、脚本中に於て、此の理をまざ〳〵と活寫したり。貴賤上下の社會は、其の風俗に、好尙に、行爲に、概して此のあさましき敗風の反響を示し、制度、文物に反映せる所もまた此の醜俗の暗影に外ならざりき。王チャールス及び其の嬖幸等の沒德亂倫に至りては、二百年を隔てたる今日、之れを語らんと欲するものをして赧然として其の行爲の名目をすらも言ふことを憚らしむ。實の社會既にかくの如し、之れを寫實的に反映せる當代文學の醜推知するに難からざるなり。

其のころ持囃されし**詩歌、戲曲**は、我が元祿期の好色本にひとしく、其の題名其の物すら往々にして士君子の惡感を牽くに足るべし。詩人ロチェスタア、ウィッチェリーの輩は、何れも當時の廷臣なりしが、其の言ふ所多く道義に背き、禮節に悖り、其の行ふ所に至りては更に之れよりも甚しきものありき。彼の時文壇の泰斗と仰がれ、前のベン、ヂョンソン、後の博士ヂョンソンにひとしく、一世の文界を睥睨せし詩人ヂョン、ドライデンの如きすら、尙其の行實の上よりいへば、阿世の賣文者たるに過ぎざりしなり。ドライデンは、ヂョン、ミルトンと次章に叙說すべきサミュエル、バトラアとを除きては、當代唯一人の大家、十七世期文學の殿將、優かに一代の宗匠たり、而も如

是大家にして尙かくの如し、餘は推して知るべきのみ。要するに當代の文學は形は美ならざるにあらぬも其の質は汚れたり。彼等阿世の文人は、例へば汚穢を粉飾するの術に長じたりし者か。醜を美しく描くことの技に於ては、彼等に勝るもの多かるべからず、彼等は美なる詞藻をもて巧に醜穢の情を寫せり。單に修辭術として文章を見ば、或は當代の文章術は漸く精緻に近づきたるものとも評すべきか、何となれば所謂英國の擬古文學は實に此の際に端緒を開きて、後のポープ、チョンソン、アヂソン等の時代に至りて其の洗錬の至極に達したればなり。さもあれ、當代の詩文人は、到底美の無形中に存在することを認むるの詩眼無く、只管現實界の皮相に泥みて淺薄なる寫實を事とせり。彼等は一時流行の風俗を直寫することを知るも、不易の人情美を醇化する玄妙を解せざりき。こゝに於てや、詩はミルトンの大抒情詩を最後の光明として、姑く英國の詞界より消滅し去りて、英國は頽然大俗の國となりぬ。

かくの如き有樣の時代には、散文學將た高雅なる能はざるは自然の理なり、而も當時の論文家中に多少の文名の後世に傳へたるもの無きにしもあらず。蓋し當時の教育ある人士は大抵論文に筆を執れり、且つは國語の純正も漸く此の頃より保有せられき。かくて彼の十六世紀末葉の不躰裁なる文躰は次第に棄てられ、古典の濫用外國語法の混入、華麗の弊、皆一時に跡を絕ちにき。さてこの種の散文の先登者は、前に語りたるチェスタァの監牧師ヂョン、ウィルキンズなるが、續いては彼れに劣ぎてチェスタァの監督となり"Exposition of Creed"といふ宗教上の講論集を著しゝ John Pearson (一六一二——八六)乃至は著書の部數百六十八篇に及び健筆一代に冠たりし Richard Baxter (一六一五——九一)若しくはホッブズの反對論者にして熱心なる宗教家なりし Ralph Cudworth (一六一七——八八)、此等皆記憶すべき名家たり。カドヲオスは'The True Intellectual System of the Universe"と題せる一千ページの大冊を著して、旁證博引、大胆にホッブズの說を攻擊しき。詩人 Abraham Cowley もまた晩年には力を注ぎて散文をものしき、"Advancement of Learning" "Discourse concerning Oliver Cromwell. 等の著あり、其の詩歌の歲を逐うて不評となりゆきしに反して、論文は次第に價値を認められたり、蓋し彼れの文章は髣髴ベーコンの脉を傳へて簡勁なるが中に一種絢爛の趣致もありて、復位期の散文中に一異彩を放てり。

John Evelyn（一六二〇——一七〇六）もまた當代に名あり、彼れは素封家にして旅行を好み、廣く學藝に通じたり。著はす所二十七篇"Sylva"は英領諸國の木材を說き"Architecture""Gardening"Sculpture"及び"Navigation and Commerce"等皆有用の著なり。詩人フィリップ、シドニの血族 Colonel Algernon Sydney（一六二二——八三）將た文名あり"Discourses concerning Government""Love"等を著す。

以上の諸家は皆多少特殊なる光彩を具へたりと雖も、尙復位期の文家中の卓然たる出色は、按ふに、ウィルヤム、テムプル（一六二八——九九）とトマス、バアネットとの二人なるべし。

ウィルヤム、テムプルは、當時の政治界にも重きを置かれたりし名士にして、博覽多識、文章を以て聞ゆ。"The Advancement of Trade in Ireland""Observations upon the United Provinces"等を著す。彼れは其の觀察したる所を宛然畫の如く描き出だすの技を以て名あり。別に雜論集一卷あり、中にも"Of the Gardens of Epicurus"及び"Of the Poetry"の二篇最も名高し。其の佛蘭西的口吻を學びて、措辭滑脫、議論と談話との間に出入するの巧妙を見るもの、誰れかこゝに新文致の生起を認めざるを

得ん。ゴッス氏評して曰はく「テムプルがアヂソンを造りたりといふは溢美なりとするも、よくアヂソンを解しアヂソンを歡迎する讀者を造りしことほどは事實なり」と。

トマス、バアネット（一六三五——一七一五）は"The Sacred Theory of the Earth"を著す、こは宗敎及び天躰に關する物語にして、超絕的想像の闕如せりし此の大俗の時代に於ては殊に珍什視すべきものたり。傳へて曰ふ、作者嘗て南歐に旅行してアルプス山を越えし時、彼の「土塊、岩塊の累々として不消化に堆積せる」光景を觀て大に感ずる所あり、大地の外皮の凹凸參差窮極する所なきの理を說明せんと企て、遂に此の篇を成しきと。彼れ以爲へらく、地球の太初は滑かにして光澤ある一大球躰なりしが、神意に起原せる洪水の汎濫の數回ありて遂に現時の如き高低をなしにき。（中畧）かくて此の後億万年を經るに至らば、宇宙に一大火災起りて地球は他の惑星と共に悉皆鎔冶せられ、再び故の滑澤ある球躰に復すべし、云々と。其の想像の如何に非科學的に荒唐自在なるかを見るべし。而して此の畏怖すべき壯觀を恰も目睹したりしものゝ如くに描き出だし來る筆力は、往々にしてミルトンに酷

似し、又其の散文を以てして跌宕奇怪の光景を歴々活げるごとく狀寫せるは、後のデクインシーに比すべし。殊に其の第三篇の如きは、アヂソンをして「正に是れ地球を葬るの辭」なりと稱讃せしめき。此の種の文致は、十八世紀の中葉に至りてエドマンド、バァクが雄辯の出づるを俟ちて、はじめて其の表極に達しき。

さもあらばあれ、以上列擧する所の論文家の如きは、之れを純文學の方面より觀れば、要するに、多く重きを置く能はざる者なり、若し此の間に就いて眞に特筆すべき當期の傑作を求めんか、ミルトンの大抒情詩に對照すべきものとしてはバンヤンが散文の寓意小説（アレゴリー）、同じくミルトンの嚴格なる理想主義（アイデヤリズム）の作に對照すべきものとしてはサミュエル、バトラァが放縱なる現實主義の滑稽敘事詩、さて最後にはドライデンが（濫作の譏はありながらも）縱横自在の韻語及び散文の作物。

第七章　ヂョン、バンヤン

バンヤンと清淨教――其の生涯――其の著作――『天路歴程』の梗概――『天路歴程』と『西遊記』――バンヤンとミルトン――諸家のバンヤン論

韻語壇に於けるミルトンと相照映して十七世紀の散文壇に清淨教派の理想を發輝せる者、言はゞ清淨教全盛時代の餘脉を傳へたる者をヂョン、バンヤンとす。

そも〳〵新教徒の根本義は、個人を救濟するの神德を説くにありて、清淨教派の第一義は熱誠と謹嚴と剛毅とにあり、而して最も平易巧妙に前者を説明し、兼ねて最も著く後者の面影をも描き出だしたる者は、英國古今の作家中、否、列國の文人中、恐らくバンヤンの右に出づる者なかるべし。バンヤンが傑作『天路歴程』（"Pilgrim's Progress"）は、ひとり英國にて廣く愛讀せらるゝのみに非ず、苟も基督の福音の傳へらるゝ處には、毎に飜譯せられて愛讀せらる。現に外國語に飜譯せられたる者、既に八十五種の多きに及べりといふをもても、其の如何ばかり弘く愛讀せらるゝかを知るに足らん。按ふに、此の書は著者が靈性上の苦悶（スピリチュアル　ストラッグルス）を種子として立案せるもの也、即ち其の從來抱持せりし信仰の壞れて安心立命の地を失ひ、種々の癡妄轉倒を經たる後、翻然として改宗し、竟に天帝の救濟を得るに至れる精神的變遷を精緻平明なる筆をもてさながら畫の如く寫し出だして以て一篇の小説となせる者なり。苟も道德若しは宗教の意識深からん者にして此の書を繙かば、さながら精神上の苦悶に惱める第二の我れに接するが如き心地すべし。されば此の書が倫

理道德の最早人間界に存すべからざるものゝやうに思惟せられたりし當時、人々内に省みて眞心の恐怖を感じ、常に應報を恐れ、坐ろに神明の加護に依らんと欲せりし當時、ホッブズの爲我説の行はれんとせし當時に於て、戰々兢々たりし一派の社會に歡迎せられたりしは故ありといふべきなり。而して人多く聖賢ならずして失敗と過誤とを免かれ難しとせば、常に靈性上の苦悶を感じて其の救濟の道を得んとを努むるもの多かるべければ、此の書が深き興味を以て今尚廣く愛讀せらるゝ、亦偶然にあらざるなり。

ヂョン、バンヤンは一千六百廿八年(我が後水尾天皇の寛永五年、北村季吟生誕の年)ベッドフォオドに近きエルストー村なる貧しき鑄掛師の家に生まれき。幼かりし程は父の稼業に從事せしが、十八歳の折議院の率ゐたりし軍隊に入りて、暫く身を兵事に委ねき。幼きより貧困の中に人となりしかば、聊か物讀み物書くことを學びたりしのみにて深き敎育とては受けざりしが、天性正直にして敬神の念深く、多感多情にして想像力ゆたかなりき、隨うて頗る奇癖あり、動もすれば心を天上界に馳せて恍惚淨樂の境を夢想し、人間の煩惱、罪惡、不義非道等を省思しては自から責むると甚しく、毎にみづから墮獄の苦しみを感じ、生きながら惡鬼に苛責せらるゝをおぼえ、歡樂の中にも悲哀を觀じ、得意も到底は失意なりと絶望し、自己を無上の大罪人なりと自責し、煩悶し、苦惱し、遂に堪へかねて、むしろ大惡魔たらんことを欲せし時もありき。或時は無漏の安養界に遊びて羽衣の天使と翺翔し、或時は墮獄して阿鼻焦熱の大苦悶を經驗せり。要するに、光明、闇黑、美德罪惡、悲喜、哀歡の影は絶えず彼れが心眼に往來して、或は樂しましめ、或は泣かしめにき。すなはち兩端に迷うて歸趨の地を知らず、茫然として中有に彷徨せり。地に止まらんか、罪惡の身を汙すに堪へず、天に昇らんか、道なきをいかにせん。彼れは人生の不安を感じて頻に安立の地を求めんともがきぬ。彼れは常に罪惡の幻影(イリュージョン)に襲はれ、惡鬼の追迫に苦めり。其の一旦改悟して洗禮(バプチスト)敎會派に改宗するに及びてや、慷慨は一層極端に流れ、禮拜する僧、供物壇、法衣などに對してすら非常なる苦悶を感じき。甚しく神を敬愛するの餘り、器服の如きをすらも崇拜せんとせりき。其のいまだ改宗せざりしや、素行頗る修まらざりけるが、一たび悔悛して清淨敎徒となりてよりは、あらゆる快樂を唾棄し去りぬ、而も其の幼時よりの習慣たりし寺鐘を打鳴らして之れ

聽くの一事は、如何にしても禁ずる能はず、折々そゞろに寺院に行きて鐘を聽くことを樂むものから、其の心中は戰々として今にも鐘樓の崩壞して我が頭上に落ち來らんかと恐れ、決して鐘下には近よらざりき。又嘗て說敎せりし半に、ふと不敬の念心中に萠しゝかば、自ら大に怖れおのゝき、開かんとせし口をつぐみ、默然たること久しかりき。又或時には渾然として無邪なる小兒の如く、一時の感想に打たれ、恍惚として狂喜し、手の舞ひ足の踏む所を知らざりしこともありしが、やがて天外に聲ありて已が罪業を罵るが如く覺え、慄然として身を措くに處なきを感ぜしこともあり。はじめは人と應對する毎に動もすれば妄に罵詈を口にする癖ありしが、其の不德なる由を一婦人に非難せられてより甚しく之れを悔いぬ。自ら當時の所感を語りていへらく、余は默して獨り慙愧を催し、上帝の己れを殺して再び小兒と生まれかはらせ、誓罵の惡癖を脫して自在に談話する身とならしめたまへと願ひき、云々」と。此等唐突なる變動、急激なる決心、不定なる情操もしくは奇怪幽玄なる觀念及び幻影の斷えず彼れが心中に出沒せしは、皆其の放縱汪溢、燃ゆるが如き想像の所爲にして此の想像こそ彼れをして作者たらしめ、はた感激者たらしめ、竟に偉大の寓意譚『天路歷程』を綴らしめし所以なるべけれ。而して其の境遇と時勢とは彼れが此の天性をばいよ〳〵ます〳〵助長せしめき。

バンヤン二十才前後にして妻を迎へしが、洗ふが如き赤貧の爲に且夕の需要をすら十分には得る能はざりき。僅かに有せりし「家財」とては、只一箇の匙と一箇の皿とのみなりき。幸に新婦が携へ來りし無形の寶あり、彼れは之れによりて貧苦の中の慰藉を得き。無形の寶とは "The Plain Man's Pathway to Heaven" (『正人昇天之道』) 及び "The Practice of Piety" (『敬神之實習』) と題せる二書なりき。彼れが後に著しゝ "Life and Death of Mr. Badman" (『邪氏の傳』) は多く此の二書より脫化せる者なりといふ。王政の舊に復せしや、政府は令を下して共和政府の下に成長せし異宗徒を嚴罰せしが、バンヤンは浸禮敎會の長者たりしかば、捕へられて糺問せられ、竟に有罪と認められて十二年の久しき間ベッドフォードの獄に投ぜられき。彼れが不朽の寓意小說『天路歷程』は實に此の禁獄の間に綴られしもの也。彼れは入牢中日々に手工して若干の賃銀を得、之れと敎友等の醵金とを送附して辛くもその妻子が口を糊せしめき。さて赦されて青天白日の身となりしや、敬神の念ます〳〵固

く、ロンドン、ベッドフォオドの間を往來して一意布教に力を盡しき。千六百八十八年ふと感冒にて打臥しゝが、醫藥効なく、竟にロンドンにて逝りぬ。

バンヤンが著書數多きが中に、彼れをして重からしむるもの三あり、曰はく"Grace Abounding in the Chief of Sinners"曰はく、『天路歴程』曰はく"Holy War"(『淨兵』)也。此等は共に著者が宗教的自傳ともいふべきものなるが、此處には單に『天路歴程』のみの結構を説述し、其の文致の一斑を評するをもて滿足すべし。

『天路歴程』は二卷より成れり。(別に『作者のことわりがき』と題して二百五十行の韻語を添へたれど、後人の僞作なり)。信士(クリスチャン)と呼べる一市民其の罪業深き生活を解脱せんとて天國さして旅立ちし、さま〳〵の艱難辛苦を經て、竟に救濟の門に入りて得脱すといふ筋なり。第一卷には發端より信士得脱までを叙せり。

信士(クリスチャン)其の家族と共に壞滅(デストラクション)の市に住へること年久し。然るに一朝或小冊子を繙きてゆゝしき大禍厄の此の市に襲ひ來べき由を知りければ、大に驚き、妻子を集めて仔細を語り、早くいづ方へか逃るべしと説き勸めけるに、ふかるに久しく泰平なりし世になれ

たる妻子はうべなはず、信士が振舞なば狂氣にあらずやと疑ひぬ。されど信士が心の怖れは消ゆべくもあらず。

案ずるに、壞滅の市とは道德地に墜ちたる澆季の世の第二の洪水遠かるまじき社會をいひ、ゆゝしき禍厄とはこの洪水若しは神火を指せるなるべく、小冊子は聖典(バイブル)をいふなるべし。

一日思ひに惱みて野邊を彷徨ひける時、ふと一人の沙彌(イヴァンゼリスト)に遇ひぬ、即ち心の中を語りて教を請ひけるに、沙彌は一軸を授け、遙か彼方(かなた)なる輝く天門へ志して速に災禍を避けよとをしふ。信士たよりを得てすぐさま家に歸り、支度をなし、罪業といへる重荷を負ひて其の日のうちに旅行(かしはたち)す。

解脱の始めは恐怖にあり。恐怖の始めは眞面目なる人世の觀察にあり。信士、既に恐怖を起して有緣の人となり、發心堅固、直ちに光明界へ志して出發す。

是れを見たる妻子は更らなり比隣の人々、こはいよ〳〵狂氣の沙汰と、樣々に止むれどもかひなし。人々の中に柔弱(プヴィアブル)、頑陋(オブスチナート)の二人信士を迫うて引戻さんとしけるに信士は聽かず却りて柔弱に天國の限りなくめでたき由を説き諭しければ、柔弱は即(やが)て信士に隨行することゝなり、道すがら信士が讀みきかする小冊子をばいとも熱心にうちきゝ

ぬ。

抑〻督基教の説く所に由れば、人生はこれ靈魂を清め罪障を消滅するの場所にして、人間事業の最要義は靈魂の洗淨にあり。信士豈に塵俗の爲に其の淨志を絆せられんや。理想の樂土既に前にあり、亦何をか踟躕せん。

ふばらくありて町盡頭まで來ぬる時、二人は突然絶望溝と云へる恐ろしき泥濘に陷りぬ。信士は辛うゞて彼方の岸にはひのぼりけれど柔弱は得隨はず、もとの岸に還ひ上りてやがて引き回へしける、これより信士は一人となりて又行くほどに路にて俗智士といふ人にあひぬ。此の人云ふやうは「御身の旅程甚だ危し。災禍を避けんとこそ天國には限らゞ。遙かの此方に道德鄉といふあり。試みにそこをたより賜へ。かしこには正法といふ翁あり、公平の處置萬人遺憾なし。翁不在の時には其の一子に制裁といふ肚者あり、果斷よく事を理す。」と。

艱難忽ちにして途に横はる、柔弱心從ふ能はずして去る。これより苦行の一段となる。常識先づ勸めて曰ふ、むしろ德を修めて安心せよと。然れども人は能く自力のみによりて德を修むるを得べきものか。

信士即ち諫に隨うて道德鄉へと志しけるに、忽ち當國に一巨山あり、峻嶮にして攀ぢがたし。加ふるに、劇しき山颪と共に飛び來る爐火雨の如く、面を向くべからず。信士勇を鼓して登らんとすれど、登る能はず、そのまゝ昏倒してふばし人心地なかりしが、以前の沙彌再び現はれて介抱し、れもごろに信士が心の迷ひを誡め、もとの路へおもむかしむ。

德を行ふの難きは火山を攀づるよりも難し。凡夫安立せんとすれば、到底宗教の途によらざるべからず。

急ぎ行く程に天領の小門に達しぬ。門を入れば程なく惡魔ビールゼバブの城門あり。ビールゼバブと其の眷屬とがこなたを目がけて一齊に射出す箭は杼絲よりも繁し。信士は幸ひにして矢に中らず、門を入れば内より例の沙彌は出で迎へ尙ほ路を教へて釋法院を訪はしむ。

勤行愈〻進めば惡魔の障礙も愈〻はげし。正に是れ迷悟相わかるゝの瀨戸。

やがて釋法院に到れば、主人自ら出で迎へ、室に請ゞて種々の額面などを示し、尙ほ他の室へ案内す。闥を排すれば、只見る數千年の塵堆き一室の今がた轟もて拂ひたりと見えて、舞ひ昇る一面の黄埃濛々として透視すべからざるが中に、瀟洒たる一少女あり、如露を手にして縱横に撒水す、塵埃忽ち歛まると見れば、人あり、更に塵埃を煽起す、少女は

又撒水す、かくすること終日と見ゆ。次の室に入れば煩惱(パッション)、忍耐(パーシエンス)の二童あり、一は立ごころに萬物を我が物とせんとし、一は靜かに萬物の來るを待つといふ一場の劇を演ずぬ。室を出づれば一臺の火あり、人は油を加へてこれを明かにせんとし、惡魔は水を注いでこれを滅せんとす。

今や眼を放ちて人事を觀るも、亦た是れ得脫の一助たり。案ずるに、塵埃の一室は是れ人々の心界、塵埃は太古より積り來れる罪業。法律の手を以てこの罪を撲滅せんとするは猶ほ箒を以て塵を掃ふが如し、いよ〳〵勞して世はいよ〳〵騷がし。たゞ經典の撒水の能くこれを鎭むるを得るのみといふ意か。煩惱、忍耐の劇は解脫を要せず。一臺の火は夫れ知見の眼か。

此の院を看終りて信士の信心いよ〳〵堅く、ひたすら途を急ぐほどに、路の兩側に解脫(サルヴェーション)と呼べる高壁あり、そこを通りてとある小山にかゝる。登りつむれば十字架あり。信士これを手にすれば、不思議や、今までも脊負ひたりし罪の重荷忽ち肩を外れて遙なる谷間に墜ち去りぬ。此の時三天使現はれ、信士の解脫を宣言し、其の弊衣を脫がせ一着の新衣と卷物とを授けて去る。信士又路を急ぐ程に、一側の高壁より形式(フォーマリティー)、僞善(ヒポクリシー)の二行者逆樣に落來る、信士はこれを扶けて三人同行す、やがて嶮山にかゝる、信士は勇

を鼓して攀ぢ上れど、二行者は從ひ得ず、たゞ麓を回りて易路をもとむ。此の時頂上より半信(ミストラスト)、怯懦(ナヤスチチ)の二人さま〴〵の憂き目を見て降り來る。信士は只一人途を急ぎ、進みて美妙館(ビューティフル)に投宿す。

修行は一意專念眼を轉ぜざるを要す。かくして始めて解脫を得べし。形式的信者、僞善的信者等の企て及ぶ所にあらず。半信、怯懦の徒亦た然り、共に斯道の嶮に堪へず。

こゝに敬虔(ペイエティー)、謹慎(ブルーデンス)、清淨(チャスチチ)といふ三少女出で迎へ、れんごろにもてなして樣々の物語をなし、且つ行手の災厄を示して、何くれと注意を與ふ。翌朝屈辱谷(ヒューミリエーション)にさしかゝる、時に破壞(エボリオン)といふ惡魔出でゝ路を遮りしが、信士奮鬪して之れを僵し、更らに進むうち、忽ち死(シャドー、オブ、デアス)の蔭といふ深さ知らぬ暗谷に陷りぬ。こは昔ダビド王すらなやまされし程の魔界にて、周圍悉く泥澤、惡虫、毒蛇簇々群生す。且つ蛛の絲よりもしげき索繩一面に張りわたされ、剩へ不測の罠(わな)さへありて、その危きこと言語に絕せり。信士は三女の注意を體し、勇を奮うてやう〳〵逃れ出で、確信(フェースフル)といふ一友を得て、途すがら其の經歷を語り合ひ、打ちつれて名利(ワルヂー、フェーア)の市といふ一都會に達す。こゝには英吉利店、佛蘭西店、伊太利店、西班牙店、日耳曼店など軒を並べ、人目を眩する珍奇の貨物を鬻ぎ、演藝を興行し、異國人と見れば神

を捉へて買ひ物を勸む、其の巧言いふべからず。信士、確信の二人も今や此の群に取り圍まれしが、二人は少しも顧みず「我れはたゞ眞を求むるの旅客なり」とて袂を拂つて進むほどに、彼等は今や嘲弄惡戲を逞くし、遂に二人に鬪を挑み、理不盡に二人を縛め、知事僧（ヘートグッド）普の法廷に引き立てゆく。かくて二人は罰を受けしが、後ち免されて出でけるに、市民また確信を捉へて竟に之れをなぶり殺にして其の屍を燒く。信士は辛くも免れて市を出で、こゝに多望（ホープフル）といふ親友を得て又途を急ぐ。然るに夜に入りて圖らずも不思議の谷底に陷り、つゞいて疑惑城（ダウティング、カッスル）の囚となり、虐主大絶望（ジャイアント、スペア）の手に虐殺せられんとす、偶々虐主顚癇を起す、こゝに隙を得て辛くも免れいで、それより尙ほ若干の領城を過ぎ、幾多の危難に遭ひ、遂に目的の樂土に達す。

こゝは Beulah の國と呼びて景象千萬、一として信士が心を驚かさゞるなし。されどこの樂土の眞城に入るには、尙ほ一帶の河水あり、是れ淨不淨の境たり。信士この川を渡る、其の水凜冽として氷の如し。已にしてあまたの天使、聖者來り扶く、すなはち岸に上り、導かれて天堂に登る。虛空には妙樂響き、四下悉く金色にかゞやき、宛然（さながら）大日の中にあるが如し。街路の人は皆金冠を戴き、棕櫚を手にして金線の琴を搔き鳴らして讃歌を齊唱す、云々。

以上を『天路歷程』の本卷とす。後の卷は信士が再び故鄕に皈りて其の妻子を天堂

につれゆく旅行記なり、而して第二の旅には巧みに路上の諸難を避けて早く樂園に達する樣に寫しいだせり。第三篇は第一篇に比して遙に劣りたる作也。

以上の梗概にても知らるゝ如く、一個の基督敎徒がたゞ一片の信念にすがりておびたゞしき誘惑、苦悶、艱難等、あらゆる內外の障礙に勝ちて上天する經歷は、これ當時の淸淨敎徒（ピューリタン）が信仰によりて救濟の門に入るの路程、兼ねては作者が心の紀行なり。バンヤンは常に以爲へらく「人は瞋恚（ラッス）の見なり、生まれながらにして罪深く、墮獄の罰を蒙むるべき約束を有す」と。

彼れは常にかくの如く感じて畏縮逡巡せり。彼れ曰はく「一日余は隣市に行きしが、忽ち我が罪惡の怖るべき結果を思ひ起こし、茫然共同椅子に坐し、天を仰ぎて嘆じき。さる程に、怪しむべし、太陽は再び我を照らさじと叫び、街上の家屋と瓦石とは余を微塵とせんとどよめきぬ。驚いて熟視すれば、幸ひなるかな、彼等は依然たりき」云々と。彼れは絶えずかゝる奇異なる想像に苦しめられ、其の身の非運を嘆じ、汚れたる人間を脫して天上の淸淨界に入らんともがけりき。クリスチャンといへる回國者は、取りも直さず作者バンヤンが替身なり。彼れはまば〳〵人生の

暗谷（ブラッディバレー）に陥らんとして悚然たりし者なり。彼れ曰はく

余は夢に此の谷の右方にいと深き濠あるを見き。この濠は古へより盲人の相率ゐて陥りてあはれなる最後を遂げし處なり。又左手には怖るべき泥濘ありき、一たび之れにはまる時は善人も立つべき底を見出だす能はず。

今や彼れは此の暗谷に入り、前は不思議の濠に臨み、後には無底の泥澤を控へ、一歩を轉ずれば身は奈落の下に沈まんとする窮境に立ちて、進退維れ谷まり、頻りに上帝の冥助を祈り、辛うじて救濟せられて、竟に安立の地に達せり。『天路歴程』の主意は、蓋し、是れに外ならざるなり。而してバンヤンは如是主人公に配するに、Giant Despair（大絶望）Hopeful（多望）Doubting Castle（疑惑城）Vanity Fair（名利市）などいふ抽象的人物、場所等を以てし、巧に迷妄の流轉を寫せり。若し此等生命なき抽象的事物をして他の凡作家の筆に上らしめば、冷々死灰の如く讀むに堪へざるものともなりぬべきに、其の一たびバンヤンの筆に入るや、皆劃然たる個性（パーソナリティー）を具へて活躍し、さながら活人物に接するの思ひあらしむ。其の他、彼れが寫し出だせる光景は、皆悉く眞に逼りて、婦幼をだに喜ばしめずばあらず。彼の『神女王』の著者スペンサァ、の如きも比喩的物語の名家なれど、讀者が彼れの作に於て興趣を感ずるは、概して人物の上にあらで其を圍繞せる事件と光景との絢爛たるに在るなり。所詮、抽象的性情を擬人し、假空的光景を點綴し、而も生氣あらしめ、血肉あらしめ、讀む者をして悲喜嘆笑せしむるは、バンヤンが特擅場といふべし。按ふに、彼れが作中に現れたる人物事件は、いづれも空想の作物たりといへども、其の實人生の根柢より來り社會の反動より來れるものなり、されば其の景を叙し、人物を狀するや、筆々神に入り、句々微を穿ち、讀むこと弥〻深くして旨味のいよ〳〵深厚こるを覺えしむ。後人の之れを讀むや、單に作者の爲人を窺ひ得るのみにあらず、亦以て倫理紛亂せる當社會の面影を髣髴するを得るなり。

又按ふに、『天路歴程』は幾段か平易なる『西遊記』とも稱しつべし。『西遊記』は佛教旨を骨子としたる正覺成道の寓意譚、『天路歴程』は基督新教を主眼としたる轉迷開悟の比喩談なり。前者は複雜にして富贍、後者は單純にして平淡、前者は幽玄、後者は通俗、前者は温雅にして當然、前者は殺伐にして勇ましく、後者は柔めやかにして寂しく質樸なり。『西遊記』は其の寓意を離れて花々しく、後者は

讀めば、他界の『水滸傳』とも見做しつべく『天路歴程』は引きなほさば一部の紀行體の社會小説をなすに足るべし。『天路歴程』にあらはるゝ人物はクリスチャンもデスペヤ(絶望)もホープフル(多望)も、悉く皆人間の性癖を具へたり、他の『西遊記』にあらはるゝ人物の、三藏法師を除くの外は、概して人間以上若しくは人間以下なるが如くならず。更に此の東西の二大比喩談の相異なる所を言はんか、『西遊記』は學者の讀み物にして、『天路歴程』は婦幼、無學者をも樂しましむべき著述なり。前者の用語は美術的、哲學的なれども、後者の語林は悉く俗談的なり。バンヤンの基督教的人世觀に於けるは彼のスペンサアが一種のプレトー思想に於けるが如し。其の神與に任せて高遠なる夢を語るの精采は、共に一世の天品なり。マコーレーの『天路歴程』を評して曰はく、バンヤンの語林(ヂカビュラリー)は平民の語林なり、二三の神學の語を除けば、文盲の農夫にも解しがたき句(ふたつまり)全くなし、數葉の中に二疊音以上の字なきこと間〻あり、まかも言はんと思へることを隈なく言ひ盡したること他に越えたり(中畧)。十七世紀の末英國に騒客多しと雖も、最も高上の想像に富めるものはミルトンとバンヤンとの二人のみ、甲は『失樂園(パラダイス・ロスト)』を作り、乙は『天路歴程(ピルグリムス・プログレス)』を作る」と。

マコーレーの評當たれり、『天路歴程』も『失樂園』も、共に人間の歸を語るものなり、想像の力双ながら高しといふべし。唯〻異なる所は、ミルトンは稀世の大學者、バンヤンは殆ど無學の人なり、而も其の歸する所は一なり。是れはた不思議に似て不思議にあらず、人道の歸を知るは、必ずしも學の多少に因らざるべければなり。

要するに、バンヤンが廣く讀書社會に歡迎せらるゝ所以は、崇高なるもの、奇怪なるもの、乃至悲慘なると、可笑しきと等を巧に綴り合せたる伎倆のみにはよらじ、平明流暢なる文致もまた與りて力ある也。夫れ彼れの如き情熱をもて彼れの如き高遠なる宗教上の物語を綴る時は、必然の文弊として蕪雜に陷るか、然らざれば險晦に流るゝを免れざるが常なるに、彼れはよく此の弊を脱し、平易遒勁、而も甚だ靈活なる對話を利用し、自在に趣を盡したり。且つ彼れが文躰の他と異なる特質は、(半ば無意識的に)無數の聖書(バイブル)中の語句を引用せるにも係らず、而もよく調諧整頓して、離々斷々の弊なく、渾然たる一躰をなせると是れ也。トマス、ショー嘗てバンヤンを評していはく「バンヤンの寓意小説に於けるは猶シェークスピヤの脚本に王たるが如し、エドマンド、スペンサアの寓意譚(アレゴリー)巧みなりといへども、彼れは事件の面白き

をもて讀者を牽く、此れは人物活動してそゝろに讀者をして同感せしむ」と。テーヌもまたいはく「寓意譚にあらはるゝ人物は總じて死灰の如し、バンヤンの人物は然らず、皆活きて動く云々」と。

第八章　サミュエル、バトラア

ミルトンとバトラア――バトラアの生涯――『ヒューディブラス』――『ヒューディブラス』と『ドン、キホーテ』――バトラアの文致

ヂョン、ミルトンは清淨教派の美所を發揮し、其の高遠なる理想を皷吹せし詩人なり。そが作中に隱顯する美德の影は、所詮は、清淨教徒の無上純粹となせりし美德の影なり。彼等の美所は、其の曾て實現し得ざりしものまで、ミルトンが詩中に現せられたりと評すべし。而もミルトンは僅に清淨教派の半面のみを描寫し得て他の半面を逸したる觀あり。他の半面即ち清淨教の弊所、醜所は、復位期以後に於て曝露せられたり。而して其の先鋒となりて尤も鋭利なる嘲笑の筆を揮ひし者を王黨の諷刺家サミュエル、バトラアとなす。

バトラアのミルトンに於けるは、啻に其の性情の相異なるのみにあらず、其が境遇

も、閲歴も、主義も、技倆も、悉く相反せり。ミルトンとバトラアとは政治上に於ても、信仰上に於ても、全く正反對の位置に立てり。其の文學に於ける傾向は殊に著く相背けり。ミルトンは謹嚴眞摯、バトラアは蕩迭洒落若しバトラアの性情より滑稽的といふ質を除き、嘲笑戲謔の能を除かば、彼れ恐らくは皆無（ナッシング）とならん。彼れは何事をも嘲笑することをよろこべり、笑ふべき物なきときは我が數奇をすら嘲笑することを躊躇せざりき。宛として嘲笑の權化なりき。『失樂園』とバトラアが傑作『ヒューディブラス』とは、尤も高上なる理想主義と尤も平庸なる現實主義との好代表といふべく、而して二者の時を同うして世に出でたるは、偶〻以て時勢の兩面を窺ふの好材料を供する者となすべし。ミルトンは其の氣力と年月とを偏に自由と道義との爲に費し、バトラアは全く之れに反して、清淨教徒の短所と弊所とを刺笑するに全力を費せり。ミルトンの心を皷吹せしものは三あり、曰はく神に對する義務、曰はく美術に對する義務、曰はく政治上の自由に對する義務の念、是れ也。而してバトラアに於ける著き三特點は(一)その大なる滑稽（ユーモア）(二)强大なる常識(三)いみじき詩的想像なりとす。右の中、第三點ばかりは、二詩人の相共に有せりし所なら

んが、他の二點に於ては二者全然相異なれり。圓轉滑脫はミルトンの皆無なる所にして、ペトラアは之れが權化(インカーチョン)とも評しつべし。さてペトラアの滑稽は、重に高尚なる物と卑野なる物とを巧に對照せしむる點にあり、即ち彼れは偉大なる物、崇高なる物、神聖なる物を捉へ來たりて、笑ふべく嘲けるべきやうに狀寫し、讀者をして絕えず驚笑を催さしむるに長ぜり。ミルトンは之れに反して常に清淨敎の美所を見たり、彼等が醜所、痴態過激、狂愚の笑ふべき失態は之れを見るに及ばざりき。ペトラアは之れに反して、美面は毫も見る事なく、偏に其の醜面を見、且つ嘲り且つ笑へり。楯の兩面を知らんとせば、此の二詩人に接せざる可からず。

サミュエル、ペトラアは一千六百十二年貧しき農家に生れ、ウースタアの小學に入りし後、更に勉學せんためにケムブリッヂの大學に入らんとせしが、事情は之れを許さざりきともいひ、或はオックスフォオドに入りて修學しきともいふ。其の傳かくの如く曖昧なれども、要するに、其が著作中に現れたる學識が大學の講堂より得たる者ならざりしは事實なるが如し。少年の折、故鄕なる或豪家の書記となりしが、その天禀の才能はいつしか他に知られきと見えて、程なくクント伯爵夫人の

家に寄食する身となり、圖書室に出入するを得、やがて名家セルデンに知られ、其の秘書官の如きものとなり、後又熱心なる共和黨の一人にてベッドフォオドシャヤの富豪なりしサア、サミュエル、リュークの書記となりしが、其の名著『ヒューヂブラス』の材料となれる可笑しき人物、怪しき風俗などは、實に此の際に見聞せるものに係るといふ。其の主人リュークの如きも、或は謂ふ、彼れが諷刺詩に取り入れられて其の材となりきと。恩人をすら嘲笑するを憚らざりしによりて、此の作家の爲人を推知すべし。さて晩年に至り、彼れは王黨にも見捨てられ、ロンドンの街頭をさまよひたる後、コヴェント、ガーデンなるローズ街のいぶせき住居に悲慘の殘年を送り、竟に病みて逝るに及び、一千六百八十年、辛うじて友人等の醵金によりてセント、ポールの精舍に葬られき。

『ヒューヂブラス』は、共立黨就中長老敎會(プレスビテリアン)及び獨立黨(インデペンデント)を諷刺せん爲の作にして、ヒューヂブラスといふ淸淨敎徒の士が國內を遍歷して都鄙の娛樂を禁止せんと試み、種々の抵抗に遭ふ由を輕妙なる韻語をもて叙したるものなり。

蓋し、前にも叙し置きたる如く、當時の「長議會」は一切公民の娛樂を禁ずるの法例を

可決し、演劇、舞踏は言ふに及ばず、苟くも贅澤らしき遊戯はこれを許さず、而して下級民が無上の快樂とせし闘熊戯(ベーヤ、ベーチング)(熊を捕へて獵犬と闘はしむる戯)の如きは嚴峻なる制裁下に禁止せられき。而もこの禁令や、動物に對する殘忍を止むるの意にいでず、單に事の娯樂に屬するを嫌ひてなれば、民衆の不平甚しく、違犯踵を接して起りたり。『ヒューヂプラス』の主人公ヒューヂプラスは、或は謂ふ、サミュエル、リュークを粉本とせるにて、其の性質容貌より其の術誇癖は勿論、怯懦にして頑迷なるなどの點までも、一々に實寫して、以て長老教會派(プレスビテリアン)を代表せしめたりと。又侍士にラルフと呼べるあり、苛酷、執拗頑迷、邪信の質を具へたり、こは獨立黨(インデペンデント)を代表せる也。さて、作者が諷刺に用ひたる想像の奇矯なる、叙事のわざと露骨なる等の妙致は、ルシヤン、ラブレー、ブルテール、スヰフトだにも、恐らくは多く優る能はじ。

『ヒューヂプラス』の梗概は左の如し

件の主從が遍歴の初め、闘熊會を試みんとする群衆が禁を破りて熊を闘場に引き行くに遇ふ、ヒューヂプラスすなはち之れを咎む、承服せず、對論數回、ヒューヂプラスは其の中の重だちたる者數人を獄に下す。さるほどに、餘の者共やがて多勢を嘯集して獄を

襲ひ、先に捕はれたる者を救ひ出だし、却りてヒューヂプラス主從を牢に投ず。ヒューヂプラスが怨憤にせる某富豪の刀自あり、主從に應接す。主從辛うして逃れ出で、うちつれて刀自を訪ふ。其の家の僕の爲めに散々の侮辱を受く、主從怒りて狀師に就きて其の復讐に着手す、云々。

これを第一篇の畧筋とす。第二篇以下に於ては、當初の目的たる長老、獨立、二派の暴を譏刺し、やがて一轉して長議會議員を譏刺し、延いて復位期以前の諸名士をも譏刺せり。事件も、脚色も、狹隘、陋劣、感興(インテレスト)の一致もなければ葛藤も、和解も、双つなから趣味に乏し。然れども『ヒューヂプラス』の眞價値はもとこゝにあらず、むしろ一切此等の點を離れて、其の譏刺の鋭く、深く、骨を刺すが如き所にあり。これ畢竟彼れが王黨なりしが爲のみにはあらじ、其の嘲罵の天才と彼等を嫌惡するの情とが相合して其の筆をして一層鋭利ならしめしに因るなるべし。もと此の詩の結構は有名なる西班牙の作家サアヴァンテスが『ドン、キホーテ』に取れるなり。着想の『ドン、キホーテ』と異なる所は、中古武士に代ふるに清淨教徒を以てし、當時の政治上並びに宗教上の狂妄(ファナチシズム)と痴態とを嘲笑することを旨としたるにあり。其の人物事件

の如きは、全くペトラアが創意に出づ。但し、サアヴァンテスのは小說なれども、彼れの
は小說とは稱しがたし、サアヴァンテスの本意は高雅任俠なる人物に對する愛慕と
尊敬とを失はしめずして尙能く主人公(中古武士)の擧措の仰山なるを笑はしむる
に在れど、ペトラアは强ひて其の人物を嘲笑すべきやうに描きいだし、力めてをか
しく賤しむべきやうに造りなしたればなり。更に詳しくいへば『ドン、キホーテ』は
讀者之れに對すれば笑を禁じがたしと雖も、尙其の中に高大にして愛らしく敬す
べき所あるを感ず。『ドン、キホーテ』の可笑しみを感ぜしむるは、其の主人公が氣高
き義俠の情操と之れを圍繞し纏綿せるをかしき出來事との不調和にあれど、あら
ゆる醜なるもの、卑劣なるもの、誇衒、利己、僞善、等を結合して描かれたるペトラアが
主人公は嘲笑すべきものといはんよりは、むしろ憎惡すべきものといふべきなり、
而して醜惡は好笑の情を呼ぶよりはむしろ慷慨の情を呼ぶに至る。按ふに、あら
ゆる喜劇的著作は笑を催さしむるを主とす、而して巧に矛盾と不調和とを描き得
るに及びて成功す調和が美の原理なるが如く、矛盾は好笑の原理なればなり。ペ
トラアの作は此の點に於て『ドン、キホーテ』に及ばざること遠し。

『ヒューヂブラス』は幾回にも分たれたるものにて、一時の作にあらず。其の第一篇
は三章より成れるが、千六百六十三年に、第二篇は其の翌年に、第三篇は更に十四年
を經て千六百七十八年に出版せられき。此の作の出でしや、嘖々たりし一時の評
判はミルトンの『失樂園』をも凌がんとせり。これ一つは淸淨敎風の枯禪を憎める
當時の上流社會の好尙に叶ひしと民黨に對する王黨の勝利を謳歌したりしとに
因るといへども、亦彼れが才の富贍自在にして犀利穿鋭なりしにも由れるなり。
彼れは、前にもいへる如く、學識人に超えて世故に通じたりしのみならず、其の想像
もゆたかなりしかば、平易快暢なる俗談平語と嚴正高雅なる美術的文辭とを調和
して巧に其の文を綴り做し、巧調珠玉を轉ずるが如く、彼れが作を繙ける者をして
此の巧調の爲の故に轉々卷を措くことをかたんぜしむ。ペトラアが措辭は簡淨
にして勁拔、句々の意味深長なるが多く、一語々々を引きはなすも、往々にして一格
言をなすに足るあり、是れ其の詩句が人口に膾炙し、間々談話の料にも引用せらるゝ
所以なり。彼れの詞致とミルトンのとを比べんに、二者ともに暗示的なる所は一
なり、但し、彼の大叙事詩人は概して間接の引喩によりて優美と森嚴と崇高とを

寫しいだし、此れは鋭利なる筆鋒によりて其の無盡藏の想像を諷刺的繪畫と化現し來たる。要するに、パトラアの著は頓智、戲謔のあらゆる變化を有形にして說明せる作ともいふべし。通例、或一時、一處の人物、事件、若しくは風俗を諷刺するが爲に物せられたる作は、其の時、其の處以外には價値を推持すること稀なるが、パトラアが此の詩は、其の最良の部分に就いて觀れば、單に清淨敎徒に對する諷刺詩たるのみに止まらず、英語にて物せる最もいみじき諷刺詩たるの資ゆたかなり、是れ或種の讀詩家の今尙パトラアを激賞して措かざる所以ならんか。

第九章　復位期の詩壇

詩躰の變化——「ヒロイック、カップル」の流行——復位期の諸詩人——ウォーラア——カウレー——デーヴナント——諷刺の詩及び談理の詩

學藝復興の大勢に乘じて興りし傳奇的詩歌の躰は、內亂時代に至りて漸く衰へ、復位期に至りて遂に全く跡を絕ちにき。按ふに、傳奇躰の詩歌の衰へたりしは、獨り英國のみにあらず、英國は寧ろ佛蘭西、西班牙、伊太利等、諸外國の刺戟によりて此の種の變遷を釀しいだしたりしかの觀あり。但し、英國に於ける傳奇躰の衰頽は、主

として其の詩形の衰頽を謂へるなり。彼の情趣燃ゆるが如き傳奇躰特得の想像分子は尙脉々として伏在せりき、たゞ其の放縱不羈の風格の漸く棄てられ、考案と想像と相伴ふ底の詩律之れに代りたるのみ。

復位期の詩躰といふは、彼の學藝復興時代のを超脫して遠く十四世紀に行はれたりし古風格を取り、且つ之れを洗練して一新躰となせる所謂**ヒロイック、カップル**是れなり。こは每行五律歩（ヒート）を具へたる聯句の躰にて、夙にエリザベスの朝より行はれたりしものから、其の勢力尙甚だ微弱なりき。然るに復位期に至りて、此の詩躰俄かに廣く行はれて、突然詩形の標準となり、幾多の反抗を排して十八世紀間一圓に盛行したりき。但し彼の沒韻律語（ブランク、ヴァーズ）には克ちがたくてや、竟に梨園には入るを得ざりき。

此の變遷の潮頭に立ちて、先づ其の方向を呼號せしものを**エドモンド、ウォーラア**となす。

ウォーラア（一六〇五——一六八七）が小壯のころの英國詩壇には、傳奇派の外に殆ど何等の詩律もなかりしが、ウォーラアの一たび出でゝ（彼のチューサアが『カンタア

ベリ物語』をものせし時、即ち一三八五年に初めて用ひきといふ詩躰に則りて『ヒロイック、カップル』の一躰を創めしや、其の伎倆精妙なりしかば、忽ち全國に行はれ、其の晩年には他の詩形を用ふるもの殆どなからんとする有樣なりき。ウォーラァが此の詩躰を試みしは、敢てチョーサァを再興せん意ありしにもあらず、將た佛國の趨勢に觀る所ありしにもあらざりきと。ウォーラァはバッキンガム州の一領主なりき。壯にして議院に入り、政事上にも多少の名あり、其の初めて作をなしゝは一千六百二十三年なりしが、其の詩法の嚴正なる、ドライデン、ポープすらも勝る能はざるものありき。これよりのち長く詩法の改革に盡力し、一千六百四十五年の『詩集』を始として "To My Lord Protector" "Divine God" "Fear of God" 等をものしき。此の間既に同行者あり。ヂョン、デンハム(一六一五——六八)シドニ、ゴドルフィン(一六〇一——四三)等先づウォーラァに唱和し、就中、デンハムは "The Sophy" 及び "Cooper's Hill" をものしき。然れども、流行の初に當りては、新舊兩躰を併用したりし作家も少からず。其の中にて

アブラハム、カウレー(一六一八——一六六七)の如きは傑出せる詩人なり。

カウレーは早熟の詩人にして、十二才の時、既にスペンサァを暗んじ、傳奇的詩風を模して盛んに創作し、二十歳に及ばざるに既に二卷の詩集と一卷の劇詩とあり、ヂーズピーの一戰の後、カウレーは佛京に趣き、かしこにてウォーラァの感化を受けきとおぼし。一千六百四十年 "The Mistress" といふ詩集を著はしゝが、新舊兩派に通じて好評ありき。新躰の詩にて最も名高きは、同五十六年の "The Davideis" にして、同年ものせし "Pindarique Ode" といふ集は、音律に拘泥せで句の長短を自在に物せる一躰にて、後ち佛蘭西に渡りて彼のラシーヌ、コルチーユ等にすら影響を及ぼしきといふ。されども詩想の上には著き見所もなし。

ウィルヤム、デーヴナント(一六〇六——六八)は前にも屢〻名を掲げたる脚本家なり、歌は其の本領にあらざりしが、尙新詩法の傳播に與らざりしにあらず。一千六百三十七年ベン、ヂョンソンに嗣ぎて桂冠詩宗となり、翌年詩集 "Madagascar" をものしき、當時は全く舊傳奇派の詩風を奉ぜりしが、後ち佛京に遊びてウォーラァ、カウレー等と會するに及びて、翻然新派に入り、敘事歌 "Gondilbert" を作しき。是れ其の傑作なり。此の歌の妙は只、挿話(エピソード)の美なるに止まれど、頗るドライデンを感ぜしめ

てその半世の詩風を左右せし程の力ありきといふ。

言ふまでもなく、眞に復位期の詩界を飾るに足る詩人といふは、前にも言へる如く、前にはバトラー、後にはヂョン、ドライデンあるのみ、而してドライデンのバトラアを拔く數等なること辨を俟たざるなり。ドライデンは「ミルトンよりウォオ、ヂチオスまでの英文學中最大の詩人」と稱せらるゝ作家にして、之れに較ぶればウォーラアや、カウレーや、デーヴナントや、彼等は皆巨人の前の倭魔たるに過ぎず。但し、ウォーラアが盛んに新躰の詩を唱導せしはドライデンが生誕の前にあり、カウレー、デーヴナントの輩が之れを助け、英國の讀詩社會が纔かに新詩形に好意を表したりし時、ドライデンは始めて其の大材の端を示し、爾後數十年の間件の詩形を用ひて縱横自在の妙技を現はしゝなり。されば、ドライデンは明かに復位期文學の代表者にして、抒情、叙事の詩界と劇詩界とに跨りて一世の重きをなしゝ作家たるに相違なけれど、年代の順序よりいへば寧ろ章を改めて說くべきものなり、故に今は之れを省き、便宜上、彼れが前後を圍繞せりし第二流以下の作家のみを網羅せんとす。

諷刺家を以て名を著し、眞詩人たるの賦性は或はバトラアを凌ぐべしと評せらるゝ作家あり、之れを"Andrew Marvell"(一六二一——七八)とす。マーヱルは其の前半生を傳奇派の殿となりて費したりしが、其の後半生即ち復位期以後は新派の諷刺詩人となりて立てりき。嘗てミルトンに薦められてコロンヱルの副秘書官となり、後ちミルトンと共に秘書官に昇進せし熱心の清淨教徒にして、復位の後は「ヒロイック、カップル」の詩躰を以て政府と教會とを諷刺せしが、其の深刻にして放膽なるはバトラアをも凌がんとす。最も著きを"Last Instructions to a Painter"及び"The Character of Holland"とす。聯句の自由なることは當代に冠たれど、其の譏刺は往々激烈に過ぎ、人身攻擊に流れたり。John Oldham(一六五三——八三)も亦諷刺家なり。窮迫の短生涯を送りし中に著はす所"Satire upon the Jesuits"及び"Remains"あり。人世の光明面を見る能はずして、身を持する辛竦、頑狹、只管人を罵るを能事とせり、但し諷刺の技はマーヱルに劣らず、格調はた頗る激越なり。

復位期の末に當りて身貴族にありながら少しく異樣の方面に詩界の開拓を圖りしはマルグレーヴ伯 John Sheffield. ロスコンモン伯 Wentworth Dillon となす。John Sheffield(一六四九——一七二一)は"Essay on Satire"及び"Essay on Poetry"を作しき。

二篇とも「ヒロイック、カップル」の新躰にして、始め匿名なりしかば、時人多くはドライデンの作となしき。Wentworth Dillon（一六三四——八五）は一千六百七十年談理の詩"Essay on Translated Verse"をものし、後ち羅馬の諷刺詩人ホレースの作を義譯して"Art of Poetry"を公にす、共に好評なりき。同じく貴族にして詩壇に盛名ありしJohn Wilmot（一六四七——八〇）は彼の蕩逸なりしロチェスタア伯爵なり。放肆亂行にして世を蚤うし、隨うて其の作は多からざれど、短篇中に間〻珠玉の光を放つものあり。著はす所僅かに『詩集』一卷あるのみ。Aphra Behn, Sedley, Lord Dorset 等は伯と同調格の詩人なり。

其の他、ホイッグ黨の醫家 Samuel Garth（一六六〇——一七一九）の如きも、亦詩名ありき、彼れは嘗て貧民施藥の件につきて醫科大學校と藥劑師會との間に爭論ありし時"The Dispensary"と題せる詩をものして之れを諷刺せしが、此の書時人に歡迎せられて忽ち數版を重ねき。後ち風土詩"Claremont"を著はす。氏は談理の詩に於てドライデンよりポープに至るまでの間の第一位の作家なりと稱せらる。ウィンチェルシーの伯夫人 Anne Finch（一六六〇——一七二〇）は舊傳奇派の殿ともいふべく、又新傳奇派の先驅ともいふべき作家なり。尋常の復位期詩人とは異なりて女史は他詩人の措いて問はざりし山水の景を詩題となし、其の館の周邊なる田野の景致等を描けり。其の"Nocturnal Reverie"の如きは、後年ウォオヅヲオス、スヰフト、ポープ等に激賞せられしが、時尚に適はざりしかば何等の反響をも得ざりき。

按ふに、十七世紀の末は英國の詩歌の悉く羅甸風となりたりし時なり。さりとてかくなりゆきしをば、或論者の思惟するが如く、職としてドライデンが盛んに羅甸詩人を紹介せしに因るとするは偏見なるべし。主としてアリストートル派の詩論が佛蘭西より入りぬるに因るとするも淺見たるに近し。二者共に時代の風潮を造る程の力なかりき、否、時の風潮を助長せしに過ぎず。ゴッス氏論じて曰はく、當時の人士は彼の學藝復興の大氣中より生じたる華に過ぎたる情熱文字に飽きて漸く淡泊なる旨味を求めたりしなり、即ち希臘風よりはむしろ羅馬風なるものを取りて合理風の作に滿足の意を表したる、是れ蓋し氣運流轉の結果なりと。實に當時の人士は、擧りて詩歌の眞髓たる抒情を棄て、叙事を棄て、音調を棄て、景致を棄て〻、主として談理の乾坤に跼蹐し、著想は合理なるを悅び、形式は準據あるを好みたり。

要するに復位期四十年間は詩歌の極衰期なり。特りドライデンのあるありて、ほのかにエリザ朝の高歌に反響したりしのみ。

第十章　ドライデン

專門文學者——新舊詩人の差別——ドライデンの生涯——著作——劇詩家としてのドライデン——叙事的抒情詩人として——彼れの多方面

若しミルトンを以て復位期以前の文學即ちエリザ文學の精神を遺傳せりしものとすれば、ヂョン、ドライデンは復位期以後の文學即ち反動的文學の鼻祖ともいふべし。彼れは實に英國十七世紀の後半に於ける最大の詩人にして當代の將星、リテラリー、ヂクテータア、文學的指揮者なりき。又た彼れは詩文を賣りて自活獨行する道を開きし嚆矢にて、褒貶の兩義を含める**專門文學者**の鼻祖なり。健筆彼れの如きは古今疑ふらくは多からざるべし。但しドライデン一流の著作は、前代詩文人のと同じからず、シェークスピヤ、スペンサア等天成の詩人は、人間及び自然の諸現象を直覺して、やがて之れを活寫せる趣あれど、ドライデン以下新代の詩人は、概して先づ散文にて思想を綴り、さて之れを翻譯して詩歌となせる趣あり。彼等

は詩を作りし者といふべく、詩を生みし者といふべからず、此の故に內亂時代以後詩を作るの術は日に月に進みたれど、眞の詩人的情熱は次第に衰へゆきし觀あり。彼の十八世紀の詩宗アレクサンダー、ポープの如きはドライデン派の圓熟を代表せるものなり。

ヂョン、ドライデンは千六百三十一年(沙翁死後十五年、我が寛永八年、貝原益軒生誕の翌年)ノオサンプトンシャヤなるオルドヰンクルに生まれき。其の父は該州の治安裁判官にして素封家なりき。一千六百五十年、ヂョンはウェストミンスタア學校を經てトリニチ、コレッヂに入學し、同五十四年「ベチェロア」の學位を得たり。父逝りし後はロンドンに出でゝ、士爵ビッカリーの秘書官たりしが、王政復舊の後、始めて獨立して文壇に上り、脚本作者となりて糊口の道を求めんとせり、されど其の處女作"The Wild Gallant"(喜劇)は悉く不評なりき。

一千六百六十七年、ロンドンに惡疫流行し、人皆之れを地方に避く、此の際一篇の長詩を著す、"Annus Mirabilis"(『驚絶の年』)是れなり。爾後專ら梨園の爲に作せり、一年三作、年俸三百磅なりき。さて一千六百七十年には桂冠詩宗となり、兼ねて皇室附

修史官に任ぜられ、雙方にて年俸二百磅を得たりき。當時ドライデンが翻案せし劇のうちに "The State of Ignorance" と題せるものあり。ミルトンが『失樂園』を翻案してあさましき劇となせるなり。一千六百八十年までに彼れが作せし劇二十八篇、其の多數は二句づゝに押韻せり、是れ佛國傳來の時尚なりき。其のうち最も大あたりなりし "Spanish Friar" (『西班牙僧』)は羅馬舊教徒を諷刺せしものなり、按ふに時の政治問題を寓せしが故に時好にかなひしならんか。

一千六百八十一年以後彼れは專ら政治上の諷刺詩を作れり。有名なる "Absalom and Achitophel" (『アブサロムとアキトフェル』) "The Medal" (『賞牌』)若しくは "Abralom and Achitophel" の後篇乃至 "Roligio Laici" (『庶民の宗教』)等は總じて場當たりの作なり。

チャールス二世崩じて其の弟ヂェームスの位を繼ぎしや、ドライデンは翻然として羅馬舊教の信者となりぬ、或は王の寵任を得んとせしに外ならずといへれど、其の實否は明かならず。一千六百八十七年 "The Hind and the Panther" を作す、其の改宗に關する解嘲の詩なり。一千六百八十八年、ヂェームス王位を失ひて所謂名譽革命の

成就せしや、ドライデンも亦其の官位俸給を褫奪せられ、己むを得ず、復た狂言作者となりぬ是れ其の齡六十歳に垂んとせし時なりき。一千六百九十三年、ヴァヅルが大作を譯しはじむ、こは彼れをして三年の時間と思想とを費やさしめしものなり。同九十七年譯し了りて出版す、好評なりき。同年其の傑作の抒情詩 "Alexander's Feast" (『歴山大王の盛宴』)を作しぬ、一夜間の作なりきといふ、六十六歳の頓作としては眞に驚くべき傑作なり。同九十年『物語集』(フェーブルス)を出版す、題して "Tales Ancient and Modern translated into Verse from Ovid, Boccacio, and Chaucer" (『オヰッド、ボッカチオ、チョーサアより韻語に譯したる古今物語集』といへり。さて更にホーマアの二傑作を飜譯せんと企てつゝありし間に、老病漸くあつしくなりて、一千七百年五月一日、遂に易簀し、ウェストミンスタアの精舍に葬られき。

此の大才の作家が時勢の然らしめし所とは言へ、眞詩人たるの資格より墮して製詩家、賣文家となり果てたりしは、惜むべき極みなり。彼れは職業として作し、職業として讀書し、職業として批判せりし趣あり。彼れは學問の該博なるを以て聞こえ、ヴァヅル、オヰッド、ホレース、ヂュエナル、エルエシオスの類は常に彼れが口頭に在りき、

又コルチーユ、ラシーヌ、プアロー、ラーバン、ポッスーなども常に彼れが愛讀せし所なりき。彼れは自國の古文學にも精通し、就中、劇壇の文學は其の得意とせる所なりし故、或はシェークスピヤの短を擧げ、或はヂョンソンの失を數へ、更に一歩を進めては、平生師表とせし佛の作家をすら褒貶し、議論縱横、傍ら人なきが若くなりき。然れども論理に秀でたるもの必ずしも作に秀でざるの例なり。彼れは口を極めて其の模範たる佛劇の短所をさへ罵れり、彼れは佛劇のあまりに三同(three unities)に拘泥せしを笑ひ、其の餘りに科介(アクション)に乏しく、白(せりふ)の演說に似たるを誹れり。彼れはまたシェークスピヤ、フレッチャア等の作の粗笨陋俗なるを誹れりしが、流石に其の想像の豐富なると生氣の活動せるとを認め、眞の詩歌たる點に於ては佛の諸劇に優れりとせり。批評家としての彼れの論は、概して正鵠を誤らざりしに似たり、而して其の自ら作せしや、彼れは此の雙方の短を棄てゝ獨り其の長をのみ合せんとせり、即ち無意識にして成れるシェークスピヤの靈妙を規則の力によりて生み出ださんと試みき。彼れはフレッチャア等の狂熱に倣ひて作しはじめながら、忽ちラシーヌ、コルチーユを顧みて其の高雅なる文致を學ばんとし、多岐亡羊、其の一をすらも獲る能はざるの結果に墮りぬ。蓋し、シェークスピヤ風の想像はラシーヌ風の理窟を以て嚮導すべきものにあらず、將た佛劇の窮屈なる韻語體をもて描き得べき者にあらざればなるべし。既に此の困難あり、而して彼れは更に時流の好尙にも合はんことを願へり。當時の觀者は果して如何なる觀者なりしぞ。彼等の多數は殆ど美術の何ものたるを知らず、又風流の眞味を解せざる猥雜卑陋の民衆たりしなり。彼れが作の其の論に伴はざりしは、蓋し、已むを得ざりし所ならんか。

ドライデンが所謂佛劇風の高雅は、單に措辭上、結搆上に止まれり。其の劇詩の白(せりふ)の中に哲學的警句も見え、高尙なる文句もあれど、概ね皮膚上の高雅たるに止まれり。ドライデンが劇中の人物は、其の言ふ所と行ふ所と相表裏するもの、比々是れなり。彼等はその言ふ所は佛の風流紳士の如く、その行ふ所はサクソン上代の未開人の如し、否、チャールス二世朝の最も墮落せる士人を代表せり。されば、ドライデンの『テムペスト』を翻案し、『失樂園』を劇とせしや、イヴも、ミランダも、宛然一娼婦となり了りぬ。其の批判の眼識は乏しからざりしかども、想像と創意(インヴェンション)とは相對的に甚だ乏しく、加ふるに崇高なるものを描くの才、悲哀の情致を寫すの才、虛靈の境に遊ぶ

の力などは其の最も貧なりし所なりき。但し、公平に評すれば、才餘ありて誠足らざりしのみ。彼れは曾て全力を傾けて作せしことなし、否、唯一時の爲に一時の筆を揮ひしのみ。彼れ若し誠意誠心偏に詩文の爲に全力を傾けたりしならば、其の後世に傳ふる所の作、或は現に存するものに止まらざりしならん、彼れの如きは世間に執着する心深きが爲に偶〻詩人たるの才分を害ひしものといふべし。彼れは其の『アレクサンダアス、フィースト』に於て其の明證を與へたる如く、叙事的抒情詩人としては推服すべき伎倆ありしに、其の世間に執着するの心は强ひて彼れを驅りて劇壇の作者たらしめたり。さもあれ、彼れの眼識に富めりしや、明かに自家の才の此の方面に適せざるを意識せしに似たり。其の悲劇、喜劇、前後數十篇、一として(其の傑作と稱せらるゝ "Maiden Queen" だに)才の之れに適せざるを示さゝるなし。"Rival Ladies" や、"Indian" や "Emperor" や "Tyrannic Loves" や "All for Love" (『アントニーとクレオパトラ』の翻案)や "Don Sebastian" やたとひ其の興行の當時には滿朝野の俗衆を悅ばしめきとも其の悲哀の眞の悲哀にあらず、其の人物の眞の人間に類せずして、概して揑造に屬することは詩眼ある者の看破し得る所也。ドライデンみづからもシェークスピヤ風の情熱の到底模倣し難きことを意識したればこそ、脚色を奇にし、辭白を洗錬し、至情に訴ふる能はざる代りに屢〻聽衆の耳目に訴へ、若しくは修辭上の價値に依りて劇詩たるの缺點を補はんとはしたれ。其の初め流麗壯大なる韻語を以て綴りしがごときも、一面より見れば此の弱點を蔽ふ方便たるに外ならざりし也。さかはあれど、さすがに其のころの悲壯劇は、總じて佛國の劇に倣へる所謂理想的劇詩なりしかば、作家に斯くの如き缺點あるも、たかゝ其の作る所の悲壯劇をして不自然又は超人間的に高尙ならしむるか、若しくは熱血なく情火なき索然たる作とならしむるかに止まりしが、其の同じ缺點の他の寫實的喜劇に現はれしや、其の驚屢〻言ふべからざるものありき。詩的情熱の缺乏は作者が描く一切をして動もすれば卑しき實感を喚ぶものたらしめ、猥雜と野卑とに陷りたれば也。蓋し、ドライデンは眞の詼諧の才に秀でざりし爲に、其が寫す好笑は轉じて醜穢となり、其が畫く滑稽は化して猥褻となれり、彼のシェークスピヤ、近松等が屢〻猥褻なる句をものしながらも、其の輕妙の滑稽と洒脫の筆致とによりて巧みに淨化し、讀者をして笑はしむるも實感を起こさしめざるとは異なれり。所

詮ドライデンの最傑作は『アレクサンダアス、フィースト』の如き叙事的抒情詩なり、彼れが此の種の作に其の力を專らにせざりしは憾むべきなり。然れどもドライデンは一世の文豪なり、幾んど何れの方面に向ひても凡を拔けりき。其の散文の如きまた玩讀するに足る、韻語の劇に適する所以を論じたる"Essays on Dramatic Poetry"の如き、其の諷刺を論じたる『ヂュエナル』論の如き、尠くも當時に於ける空前の審美論文にして單に文章としても愛誦すべき價値あり。

第十一章　當時の劇壇文學(上)

演劇禁止令の解除——新作の需要——デーヴナント——ウィルソン——エサレッヂ——シャドエル——古劇派——ペン——ウィチェリ——オトエー——其の他諸作

第十七世紀の末つ方三十年間に於て、英國の劇壇は前代未聞の盛を致しき。是れ前十八年間諸興行禁止の反動なりき。遊興に飢え觀劇に渴したりし都人は、其の禁の解けしと共に、殆ど狂氣せるものゝ如く、日々劇場に群集せり。蓋し、是れより先き一千六百四十二年、九月、兩院決議して各地大小の劇場を閉鎖し、尙ほ其の令の弛廢せんとを恐れて、同四十七年更に嚴重なる制を布きにき。さる程に同五十六

年五月に至りて、デーヴナント辛うじて一種の半公開の劇場を開くことの允許を得しが、禁制の全除せらるゝに至りしは同六十年八月以後なり。此十八年間の休業の爲に所謂カロライン風の劇は全く衰滅し、該派の餘脉たりしシャアレーが作も世に棄てられ、ブローム乃至ヂャスペア、メイン等が新作はた何等の勢力をも有せざりき。かくの如く舊派の作家等は老朽し去り、新作の需要激甚なりきと雖も、所謂新作家輩は總じて作劇上に經驗なく、纔かに二十年前の幼時に觀し劇を想起して覺束なくも筆を行るに過ぎざりしかば、其の作大かたは舞臺の約束と調和せざるのみか、美文としてもまた庸劣なりき。新派の率先者デーヴナントが一千六百五十六年に作して劇に上せし『ローダの圍み』(Siege of Rhodes")の如き、同六十八年に作せし喜劇"The Man's the Master"の如き、何れも劣作なり、而して後者に至りては佛劇を剽竊せしものに外ならず。さる程に劇運次第に興隆し、おひ〳〵名家輩出せし中に、まづ傳すべきヂョン、ウィルソンは千六百二十二年?に生れ、久しくアイルランドに住せりし狀師なり。千六百六十三年に著しゝ喜劇『詐欺』("The Cheats")は結搆も筆致も練熟にし

て、當二十年來の脚本中に第一位を占むべきもの、全篇悉く散文もて綴れり。其の後またベンヽヂョンソンに倣ひて羅馬の事蹟を材とし莊重典雅なる無韻律語をもて『計畫者』("The Projector")と題せる喜劇を著し、やがて文壇を退きしが、千六百九十年更に悲喜混合劇一篇を著しき。時に佛蘭西より華やかなる新劇入來しかば彼れが作は棄てられたり。蓋し、彼れは善くベンの長所を模倣し得たりと雖も、チャールス二世の時代に須要なる生氣と光彩とを缺きたりしかば、時人に喜ばるゝ能はざりしなり。

やゝ文才ある者も此の如く失敗し、其の他の鈍腕はた漸く倦憊して筆を投じたりし後は、作劇は遂に專門作者の業となりぬ。當時未だ普通の文學と作劇との間に截然たる區別なかりきと雖も、尙文人の事業中最も需要多く、利得割合に豐かなりしは作劇業なりしならんされば名匠大家と稱せられし際も、屢〻指を作劇に染め、互ひに譽れを爭ひしかば、劇壇は一時詞客が中原たる觀ありき。

此の際、文壇の一方に雄視し、夥多の門下生と共に作劇に從事し、名譽を一時に擅にせしものはヂョンソン、ドライデンなること勿論なり。當時の作劇家中、或一面より觀れ

は彼れに優りし者もなかりしにあらねど、全躰に於ては彼れに及ぶものなかりしなり。ドライデンが事は前章に敘したれば今は再び言はず。こゝには第二流の作家にして彼れと相併びて佛蘭西劇の輸入に與りて功蹟ありし輩らの上をいはん。

ジョールジ、エサレッヂ が眞價は漸く近年に世に知られたり。其の名の聞えざりしは、粗放蕩逸にして世事に拘らず、道樂的に作して名を求めざりしに因るならんか。一千六百卅四年に生れ、幼時は佛京パリーにありて人となり、其の初作"Comical Revenge"の始めて劇壇に上りし時までは本國に歸りしことなし(時に年三十四)。モリエールに親炙して作劇の妙機を得たりしかば、件の悲喜劇の如きも、彼の西班牙風の劇の如く强ひて脚色を複雜にせる無理もなく、又たヂョンソン風の劇の如く、大袈裟なる滑稽をわざと衒誇する陋もなく、たゞ筆に隨ひて當時の花々公子等が風流情事をさながらに寫しいだせる所輕妙にして洒脫なり。後ち四年を經て更に喜劇"She Would if She Could"を作せり、前者に比して更に佳なり。次に又"The Man of Mode"を作しぬ、前の二者よりも佳なり。晩年文壇を去りて專ら官に

仕へ、交際官となり、コンスタンチノープルに赴き、やがてストックホルムに轉じ、一千六百八十五年間には全權公使となりてラチスボンに徙り、解職せらるゝに及びて國に歸り、同九十一年に歿しき。

エセレッヂが喜劇の詞致は、其の先輩の粗笨の作に比すれば、綿布に對する絹布に比すべく、又は美しき磁器に比すべし。華美は其の長にして脆弱は其の短なり、こは彼れが思想の浮靡なるが爲に自然に生じたる失なり。（按ふに、彼のコングリーヴ、ゴールドスミス、シェリダン等は此の繼續者なりといふべし。）畢竟、エサレッヂは時の浮靡淫蕩なる風俗に對して、毫も之れを矯正せんの念なく、寧ろ喜びて歸趨し之れと同化せし趣あり。其の作が後の謹嚴なる英國民の爲に擯斥せられしは宜なりといふべし。然れども始めて佛國劇の眞趣を英國に傳へしは彼れの功なり、而して其の作 "The Man of Mode" の如きは、兎も角も英國喜劇の一例として永く傳はるべきものなるべし。

トマス、シャドエル（一六四〇——一六九二）はエサレッヂに次ぐ作家なるが、幼時父に大陸に從ひ、壯年の後歸國したれば國劇より受けし感化はエサレッヂ程に大なら

ざりき。其の處女作 "The Sullen Lovers"（千六百六十八年出版）の序中に盛にベン、ヂョンソンを稱揚し「ヂョンソンは如何なる喜劇にも七種以下の滑稽を用ひしとなし」須からく之れに倣ふべきなりと論じたるが、この作は其の旨を實行せるものなり。缺點もとより尠からねど、初作としては成功に近し。爾來、劇場改善の說を唱へ、陸續作を出だしき、最後の作『義勇兵』（"The Volunteers"）を含めて十七種の作あり。此の間、常にドライデンと論爭し、時には「愚物」（フール）とすら罵られしこともあり。彼れは常に文章の鍛錬に力を用ひき。其の "The Virtuoso" の如きは五年間の推敲を重ねしものといふ。又滑稽の工夫に精神を勞し、先人未言の自然的滑稽を得んと力めき。而も其の作は概ね妙ならず。"Epsom Wells" の如きは今尙ほ愛讀せらゝものゝ一なり。

以上は王政復古以後第一期の作家にして、一言にていへばドライデンを中心とせる**古劇派**（クラッシック、スクール）なり。さて第二期即ち中期に遷らんに、此の期に於て最も秀でたりしもの三人あり。ウィッチェリー、オトエー、及びリー是れなり。ベン夫人、セットル、クラウン及びバッキンガム之れに次ぐ。何れも殆ど同時に著れし作家なれば、例によりて

其の年長者より敘說せんに、

アフラ、ベン（一六四〇―八九）女史は、未だ『ソンソン』を姓とせし妙齡の頃、ギヤナ、及び和蘭に在りて、多少冒險めく閱歷ありしが、卅歲にて文壇に立ち、始めて悲喜劇"The Fore'd Marriage"と題したるを物し、爾後十八篇の作あり。英國にて筆を以て世に立ちし最初の婦人なりき。詩文の作頗る多く、其の健腕ドライデンを除きては當時敵する者なかりき。最も喜劇に長ぜしが、稍〻健筆を衒ふ癖ありて、推敲を缺きしかば滑稽概ね淺薄なるのみか、社會の陋俗を直寫せる醜あり。其の傑作『放浪漢』("The Rover")は例外とす悲劇の作何れも失敗なりき。

ウィルヤム、ウイチェリー（一六四〇？―一七一五）は英國近代喜劇の祖たる資格にてはエセレッヂの上にあれども時人には冷遇せられき。其の作の出版せられしは、大抵作の成りしより十年、二十年の後にして、其の舞臺に上されしは、概して其の死後の事なりといふ。其の家代々舊教を奉ぜしが爲めに、罪を得て、佛蘭西に徙されしが、彼處にて軍隊が豪奢の情況を目擊し、後年召されてオックスフォードに遷り、やがてチャールス二世の陸軍に吏となりぬ。其のころ已に二種の喜劇を作り、次いて

又『田舍紳君』("Country Wife")及び『素樸漢』("Plain Dealer")の二篇を物せり、共に喜劇なり。二篇共に規模廣大、詞句華贍、滑稽人情を離れず、諷刺はた深刻、よく喜劇の躰を得たり、但し筆意やゝ野なりし爲め、時人に喜ばれず、殆ど二百年間、何れの劇場にも上らざりき。畢竟、其の詞致が羅紗を捨てゝ天鵞絨を喜ぶ當時の好尙に適はざりしに因る、而も他に因なきにあらず、例へば、彼れが言動の武人的にして粗豪なりしこと、屢〻王と爭論せしこと、羅馬法王に私信を絕たざりしこと、及び七十五歲の高齡にして妻を迎へしことなど、何れも時人が憎惡を買ひ、擯斥を招きし緣なるべし。

トマス、オトエー（一六五一―八五）は**ウイチェリー**に次ぎて佳作をなしゝ眞詩才なるが、彼れ將た時尙に誤られたりき。按ふに、王政復古が學藝に累をなしゝは著き事實なるが、オトエー及びリーの如きは其の犧牲の隨一なり。彼等は非凡の才器を持し、時俗よりは幾段か進步せる思想を抱きて劇文學の進步を圖りたりしが、時尙に縛せられて驥足を伸ぶる能はず、塞驢と伍して老死せりき。

オトエーはサッセックス州なる牧師の子なり、幼よりオックスフォードに入りて神學を修めき。一千六百七十一年長期休業の間、一夜某公爵の爲にベン夫人が作を演ずる

一人となりしが、大學に歸りて後も當日の樂さを忘れざりきといふ。同七十五年、悲劇"Alcibiades"をものして時の名優ベッタアトンに送る、ベッタアトン之れを場に上しぬ。この作惡作なりしにも拘らず、無事に一興行を終へしかば、オトヱー續きて"Don Carlos"を著しぬ、以後其の作は毎にベッタアトンが一坐にて演ずる例となりき。此の時、亦二三の喜劇を作せしが、皆妙ならず。一千六百八十四年、悲劇『孤兒』("The Orphan")を作りき、こは沙翁以後有數の作として推重せらる。蓋し、革命以來絶えて見るを得ざりし一種の温情(センメンタリティ)のいとよく寫されたるを喜べるなり。かくて彼れは斯道の經驗に熟し來り、一千六百八十二年"Venice Preserved"を物しき、こは『孤兒』にも優る佳作なり。悲劇中の人物に大言壯語せしむる時劇の弊を除きて、代ふるに自然にして痛切なる情感を以てしたり、其の劇の場に上りしや頗る觀る者を感動せしめき。ゴッス氏の如きは此の作を稱揚して「優かに沙翁が傑作の次位に立つべきもの」となせり。實に彼れをして意のまゝに脚本を作らしめしならば、或は小沙翁たるの譽をも博せしならんか。其の後、尙一篇の喜劇をものせしが、貧と病と交々至り、長く世と交る能はずして處々を流浪せし末、一千六百八十五年、ある

麵包商の店頭に斃死しきといふ。齡僅かに三十四なりき。

ナサニエル、リー(一六五五——九二)は牧師の子にして其の生涯はオトヱーと相似たり。幼時はケムブリッヂの神學校にて敎育せられ、二十歳の時俳優とならんと欲してロンドンに出で、某劇場に入りて一たび或役に扮せしが、悉く失敗せしかば、轉じて作者となり、初めて"Nero"を作し、翌年又"Gloriana"及び"Sophonisba"の二悲劇を作せり、皆律語の作なり。此等は抒情詩として見るに足れども、劇としては價値尠し。同七十七年"Rival Queen"同七十八年"Mithridates"を作す、共に其の技倆の上達せる跡を示せり。一千六百八十一年、其の傑作"Lucius Junius Brutus"を物し、次いで十一篇の悲劇を作しき、中二篇はドライデンと合作)。かくて後俄かに發狂し、同八十四年ベドラムに禁錮せられ、數年にして恢復し、一千六百八十九年、其の唯一の喜劇"The Princess of Cleve"を作り、其の翌年最後の悲劇『巴理の虐殺』("The Massacre of Paris")を作りき。此作を脫稿せしや、病再たび發し、一夜保護者の宅を脫して市街を狂驅し、一千六百九十二年、齡三十七にして狂死を遂げき。當時ミルトンの詩風を傳承せしものはリー一人ありしのみ。後人其の詩躰の豪放をたゝへ

て、或はリーを小マーローと稱す。

リーと雁行して同じく當時の作者たりしヂョン、クラウン(John Crowne)が生死の年月は詳かならねど、通例は一千六百四十年に生れ一千七百五年に歿しきと傳へたり。一千六百七十一年、其の處女作"Julina"を作し、同九十八年に"Caligula"を作してより陸續著作し、著はす所十八篇に及べり、中に就きてチャールス二世の命を受けて西班牙劇より飜案せる"Sir Country Nice"は其の傑作と稱せらる。洒淡の滑稽の間に巧みに時俗を諷刺せり。有名なる遲筆家にして、此の作の如きも次ぎの朝即ちヂェームス二世の朝に至りて成りき。

エルカナー、セットル Elkanah Settle(一六四八——一七二四)はクラウンより八九年の年少なりしが資性傲岸、屢〻ドライデンと爭論せりき。オックスフォードの人にしてホイッグ黨の一人なり。一千六百七十二年"Cambyses"を作し、其の翌年激烈なる悲劇『モロッコの女帝』("The Empress of Morocco")を物してドライデン派を驚かしき。後十四篇の作あり。其の他 Charles Sedley(一六三九——一七二二)は"Mulberry Garden""Bellamira"等を作し、バッキンガムの公爵 George Villiers(一六二七——八八)は"The Rehearsal"等を著しき。さて、此の期の諸作家とこれより二十年を經て輩出せし所謂オレンヂ朝派の作家との間に出でし劇壇の一異才はトマス、スッザアンなるべし。Thomas Southerne(一六五九——一七四六)は所謂英雄劇(ヒロイック、プレー)の荒唐に慊らずしてオトユーの温雅を取り入れ、別に一流の悲劇派を成しゝものなり。彼れが傑作の續出せしは、恰もオレンヂ派興起の際にあり、彼の派即ちコングリーヴ等の悲劇と相併びて、一時の騷壇を飾りき。傑作數篇なり、就中"The Fatal Marriage""Oronoko"の二悲劇最も名あり。喜劇も數篇あれど讀むに足らず。スッザアン若年の時"Loyal Brother"といふ悲劇を作り、ドライデンに序曲を求む、序曲成る、ドライデン報酬十ギニー(約五十圓)を請ひ、且つ曰はく「若人よ、卿を侮ると思ふ勿れ、從來は五ギニーを例とせれど、そは餘りの薄謝たるなりと」蓋し之を機として報酬の額を高めたりしなり。

第十二章　當時の劇壇文學(下)

オレンヂ朝派の諸作家——喜劇の流行進歩と——コングリーヴ——
其の特質——其の諸作——シッパアー——ゾンブルー——ファークハー

十七世紀の末、即ち王政復古三十年後に出でし脚本作家を總稱してオレンヂ朝

派の作家といふ。オレンヂ公ウィルヤム三世王に因みての名稱なり。其の中の主なるものをコングリーヴ、シッバァ、ヴァンブルー、ファークゥーとす、何れも喜劇の作家なり。風尙を高うする底の偉なる技倆こそは空しけれ、其の詞致は大に進歩し、前期の喜劇家に普通なりし野卑醜墮の失はやゝ減ぜり。

William Congreve.

ウィルヤム、コングリーヴ(一六七〇——一九)は十七世紀の後半の劇壇に牛耳を執りし作家なり。佛のヲルテールは激賞して喜劇の光榮を加へし功績は英國歷代の劇詩家中コングリーヴを以て第一とす」といひきとか。かゝる激賞も幾分か其の實なきにあらず。喜劇にしてコングリーヴが作に優るものはもとよりあまたあるべく、風俗を直寫したる點よりいふもコングリーヴのに讓らざる作は多からんが尙彼れのゝ如く華麗に裝飾せられたるは稀れなるべし。實に彼れが長所は絢爛流麗の詞句と當意即妙の滑稽とにあり、特に後者の如きは佛のモリエールすら及ぶ能はざるものあり、又後の英國の喜劇作者中其の右に出づるものなしと稱せらる。而して其の最も力を盡くし、又最も成功せしは對白の圓轉と滑稽となり。彼れは滑稽の爲めに喜劇の他の要素を犧牲にせし觀あり、科介動作の不都合乃至脚色結構の亂雜、不條理は敢て顧みざりし氣味あり。人物の性格の如きも(よく寫されたるもあれど)動もすれば、始めより漫に嘲弄し、殊更に狂態を演ぜしむるが如き嫌あり、故に、彼のウィッチェリー、シャドエル等のに比して詞致の優雅なりしにも拘らず、着想は更に一段ひなびたり。

コングリーヴは劇壇にありしと僅かに六年なり。廿一歳の初作『老獨身者』("Old Bachelor")(一六九三出版)はウィッチェリーを學びて成功せしものなり。此の作大にもてはやされしかば、同九十四年、又"The Double Dealer"を作しぬ。時人の玩賞は前作に劣りしが、批評家は痛く賛美し、就中、ドライデンの如きはシェークスピヤにすら比せんとせり。かゝる激賞の不當なるは勿論なれど、其の才華の亂發してモリエールと光彩を爭ひし當時に於ては、かゝる溢美の賛評も、或は失當と思はれざりしならんか。翌九十五年、傑作「戀故の戀」("Love for Love")を作す、絢爛目を奪ふ底の風俗喜劇なり。翌々年"The Mourning Bride"を作る、悽愴たる悲劇にして佛の悲劇家クレビロンを摸せるなりき。一千七百年、喜劇"The Way of the World"を作す、後ち復た筆を執らず、此の作も描作ならざりしが、其の滑稽のあまりに皮肉なりし爲め